

平安京右京三条三坊三町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条三坊三町跡

2009 年

財団法人 京都市埋藏文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、建物建設に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援いただきました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

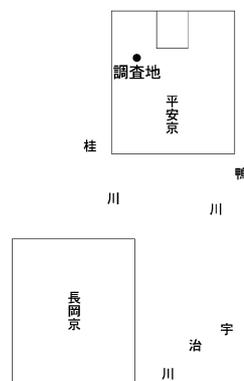
平成 21 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京桑原町1番地
- 3 委 託 者 株式会社竹中工務店京都支店 支店長 長谷部 斎
- 4 調査期間 2009年4月6日～2009年6月23日
- 5 調査面積 1,265 m²
- 6 調査担当者 内田好昭・田中利津子・山本雅和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」、「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 山本雅和・田中利津子・竜子正彦
付論1：バリノ・サーヴェイ株式会社
付論2：河角龍典（立命館大学）・小野映介（新潟大学）
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・遺物整理にあたっては下記の方々から種々の御教示をいただいた。
小野映介、河角龍典、鈴木久男
（敬称略 50音順）



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	2
(1) 遺跡の位置と環境	2
(2) 周辺の調査	2
(3) 試掘調査の成果	5
3. 遺 構	8
(1) 基本層序と遺構の概要	8
(2) 第1面の遺構	13
(3) 第2面の遺構	15
4. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 土器	22
(3) 瓦	28
(4) 土製品	29
(5) 石製品	30
(6) 金属製品	30
(7) 木製品	31
(8) その他の出土遺物	34
5. ま と め	37
付論1 自然科学分析	44
付論2 平安京右京三条三坊三町の発掘調査から見た最終 水期以降の紙屋川（天神川）扇状地の地形発達史	63

図 版 目 次

図版1 遺構	1 北壁断面（南西から）
	2 第1面全景（北から）
図版2 遺構	1 礫敷1（北北東から）
	2 溝120 漆製品出土状況（北から）
図版3 遺構	1 第2面全景（北北西から）

- 2 畦 333 (東から)
- 図版4 遺構 1 井戸 10 (北から)
 2 井戸 10 容器出土状況 (南東から)
 3 井戸 10 土師器出土状況 (南西から)
 4 井戸 10 枠組北西隅部 (南東から)
 5 井戸 10 枠組南東隅部 (南西から)
- 図版5 遺構 1 土坑 275 (東南東から)
 2 柱穴列 356・柱穴列 357・柱穴列 358 (東から)
- 図版6 遺構 1 溝 280 (北から)
 2 溝 280 土師器出土状況 (北から)
 3 溝 280 須恵器出土状況 (南西から)
 4 溝 200 (西から)
 5 北西側拡張区溝 354・溝 355 (南西から)
- 図版7 遺物 土器
- 図版8 遺物 瓦・土製品・石製品・金属製品
- 図版9 遺物 木製品 1
- 図版10 遺物 木製品 2

挿 図 目 次

図1	調査前状況 (北北東から)	1
図2	作業状況 (北から)	1
図3	社内説明会 (北東から)	1
図4	調査区配置図 (1 : 500)	3
図5	周辺調査位置図 (1 : 5,000)	4
図6	試掘調査区配置図 (1 : 600)	6
図7	試掘調査断面図 (1 : 150)	7
図8	北壁断面図 (1 : 80)	9
図9	西壁北部断面図 (1 : 80)	10
図10	断ち割り部分断面図 (1 : 80)	11
図11	第1面平面図 (1 : 300)	12
図12	第2面平面図 (1 : 300)	14

図 13	畦 (小径) 333 断面図 (1 : 40)	15
図 14	井戸 10 実測図 (1 : 40)	16
図 15	井戸 10 展開図 (1 : 40)	17
図 16	柱穴列 356・柱穴列 357・柱穴列 358 実測図 (1 : 50)	18
図 17	溝 280 実測図 (1 : 20)	19
図 18	溝 260 断面図 (1 : 40)	19
図 19	溝 200 断面図 (1 : 40)	20
図 20	東壁溝 165 断面図 (1 : 40)	21
図 21	東壁溝 190 断面図 (1 : 40)	21
図 22	土器実測図 1 (1 : 4)	24
図 23	土器実測図 2 (1 : 4)	26
図 24	土器実測図 3 (1 : 4)	28
図 25	瓦拓影・実測図 (1 : 4)	29
図 26	土製品実測図 (1 : 4)	29
図 27	石製品実測図 (1 : 4)	30
図 28	錢貨拓影 (1 : 1)	30
図 29	櫛実測図 (1 : 2)	31
図 30	容器実測図 (1 : 4)	31
図 31	井戸枳実測図 1 (1 : 8)	32
図 32	井戸枳実測図 2 (1 : 8)	33
図 33	井戸 10 出土種実・昆虫遺体	36
図 34	遺構変遷図 弥生時代から古墳時代 (1 : 300)	38
図 35	遺構変遷図 平安時代前期 (1 : 300)	39
図 36	遺構変遷図 平安時代中期から鎌倉時代 (1 : 300)	40
図 37	遺構変遷図 室町時代 (1 : 300)	41
図 38	調査地点の模式断面図	45
図 39	軟 X 線写真	49
図 40	土壌薄片写真	50
図 41	花粉化石群集の層位分布	53
図 42	植物珪酸体含量の層位変化	54
図 43	花粉化石	61
図 44	植物珪酸体・種実遺体	62
図 45	紙屋川 (天神川) 流域扇状地周辺	64
図 46	地質断面図 (西壁)	65

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	22
表 4	井戸 10 出土種実・昆虫遺体一覧表	35
表 5	花粉分析結果	52
表 6	植物珪酸体分析結果	54
表 7	種実分析結果	55

平安京右京三条三坊三町跡

1. 調査経過

今回の調査は、島津製作所E 10号館新築工事に伴う発掘調査である。島津製作所敷地内ではこれまでにもたびたび遺跡調査が行われており、今回の発掘調査は当研究所が実施する10次調査となる。

調査地は平安京跡にあっており、周辺の調査でも多数の遺構が見つかることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施したところ、古墳時代・平安時代の遺跡が残っていることが確認された。これを受けて文化財保護課は島津製作所に対して埋蔵文化財発掘調査の指導を行い、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査区は文化財保護課の指導に基づき、当初は南北長約60m・北辺の東西長約24m・南辺の東西長約17mの南西部が少し凹む形に設定した。さらに調査中に文化財保護課の指導を受けて、遺跡の状況をより詳しく調査するために北東側に約5㎡、北西側に約15㎡、西側に約15㎡の拡張区を設定した。最終的な調査面積は約1,265㎡である（図4）。

調査は2009年4月6日から開始した。最初に盛土・室町時代以降の耕作土を約1.0～1.4mの深さまで機械掘削したのち、2面に分けて実施した。各遺構面では遺構検出・遺構登録を行い、遺跡の状況が明らかになった段階で写真撮影・遺構実測を行った。調査最終段階では調査区北部に東西約20m、深さ約1.5mの断ち割りを入れ、下層遺構の確認や堆積状況を確認したのち、6月23日にすべての調査を終了した。



図1 調査前状況（北北東から）



図2 作業状況（北から）



図3 社内説明会（北北東から）

なお、調査期間中の2009年6月15日に島津製作所の社員を対象に社内説明会を開催し、約270名の参加を得た。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は京都盆地北西部に位置し、地勢的には紙屋川（天神川）の扇状地に立地している。紙屋川は鷹峯を源流とし、京都盆地西部をほぼ南流して吉祥院で桂川に合流する。現在の河道は20世紀前葉に付け替えられたもので、それ以前は農業用水として利用される一方、たびたび洪水を引き起こし流路の位置を変えたようである。調査地北側には旧河道の痕跡が北北東から南南西に向く道路や地割として残っている。また、調査地の現地形はわずかに西から東に向けて傾斜しているが、これは調査地西側を流れていた紙屋川が氾濫したときに土砂が堆積したことによるものと考えられる。

調査地周辺の歴史的状況は次のように概観することができる。¹⁾ 調査地は『京都市遺跡地図』では平安京右京三条三坊三町および西ノ京遺跡として周知されている。²⁾ 西ノ京遺跡は京都盆地北西部に位置し、おおよそ北は丸太町通、東は西大路通東側、南は六角通、西は西小路通に囲まれた南北約1.2 km・東西約0.8 kmの範囲に広がる遺跡で、遺構の検出は少ないものの弥生時代から古墳時代の遺物が出土している。また、平安京右京三条三坊三町については居住者などの記録は残っていないが、『拾芥抄』によると南側の三条三坊四町は平安時代後期には大江匡房の所領、南西側の五町・十一町・十二町は棲霞寺の所領があったことがわかる。

(2) 周辺の調査

調査地周辺ではこれまでに多数の調査を実施している。主要な調査については図5・表1にまとめた。見つかった遺構・遺物の時期は西ノ京遺跡に関わる弥生時代から古墳時代、平安時代前期から中期、平安時代後期以降に大きく分けることができる。

西ノ京遺跡については、調査地北西側の西ノ京徳大寺町の調査（図5-21）で竪穴住居1棟のほか土坑を検出し、古墳時代中期の土師器・須恵器が出土した。また、この南側の調査（図5-22）や調査地北隣の調査（図5-16）では、遺構は検出していないが、古墳時代中期の土師器・須恵器、滑石製模造品が出土しており、遺跡の拡がりを考えるうえで注目される。その他にも西大路御池交差点南東側の西ノ京南原町の調査では古墳時代の溝・土坑などを確認している。³⁾ なお、遺構には伴わないが、尖頭器・石鏃が調査地北隣の調査などで出土しており、縄文時代にさかのぼる遺構が近隣に所在している可能性も考えられる。

右京三条三坊周辺では平安時代前期から中期の遺構が良好な状態で残存しており、それぞれの調査で建物・柵・井戸・溝・土坑・柱穴などを多数検出している。右京三条二坊十六町の調査（図

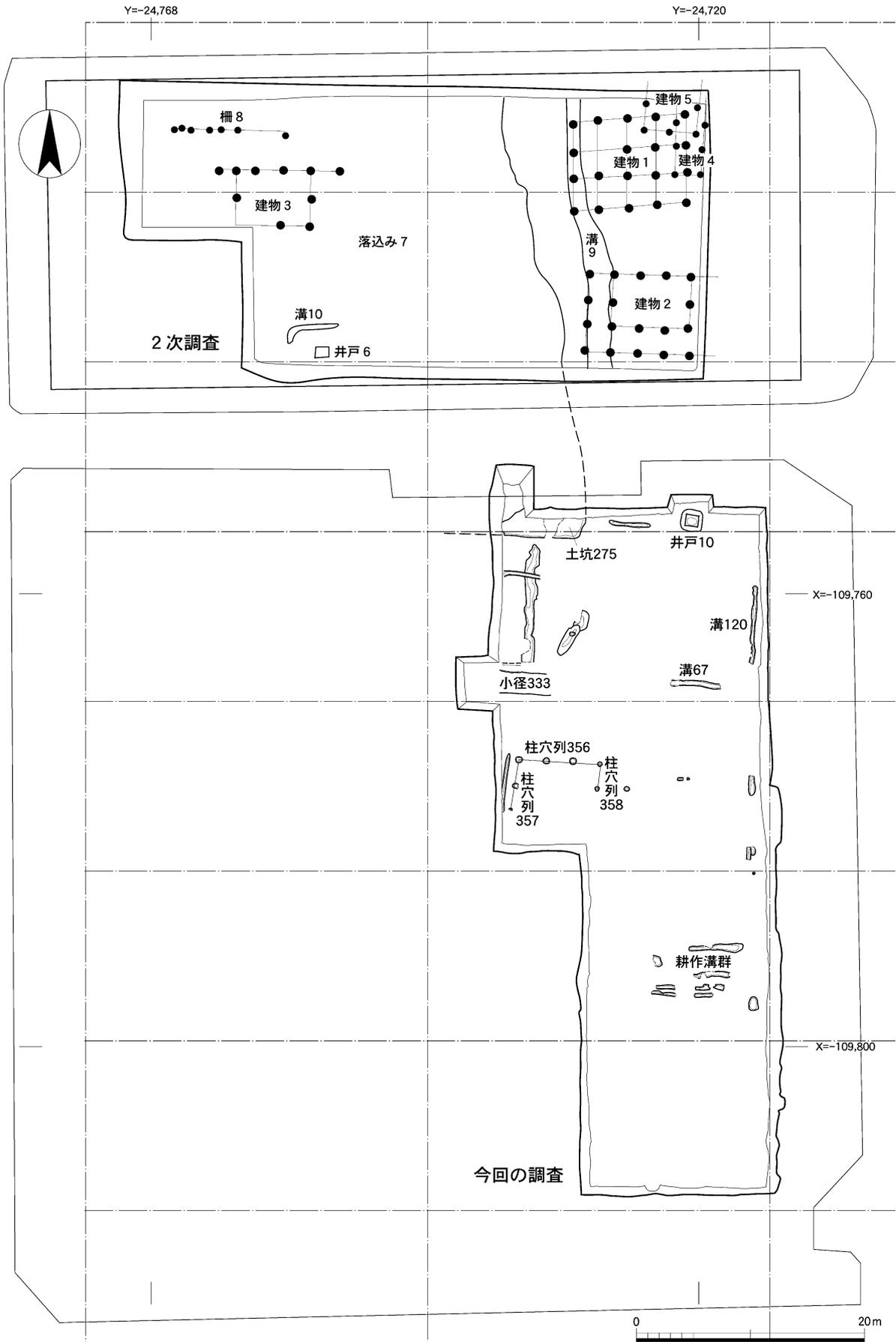


図4 調査区配置図 (1 : 500)

5-15) では、平安時代中期の1町規模の邸宅の全容がほぼ明らかとなった。出土した墨書土器から「齊宮」の邸宅と推定できる。三条三坊五町の調査(図5-18・19)では、南東部で平安時代前期の大規模な掘立柱建物を検出しており、1町規模の邸宅であった可能性が高い。調査地北隣の三条三坊三町の調査(図4・図5-16)では、平安時代前期から中期の掘立柱建物5棟・柵1基・井戸1基・溝2条・湿地状の落ち込みなどを検出した。また、三条三坊九町の調査(図5-21)では三彩の精巧な獅子頭、三条三坊十町の調査(図5-22)では木棺墓から副葬品として漆皮の折敷の上に乗せた土師器皿・毛抜き・墨などの化粧道具、銅鏡、須恵器壺などがまとまって出土しており、相応の身分の貴族が居住していたことが推定できる。

その一方、三条三坊十二町の調査(図5-24)では、ほぼ全域に湿地が広がっていた。また、三条三坊五町の調査では宇多小路に近接して南北方向の流路を検出した。後世の紙屋川に関連する流路の一つとして理解できる。これらのことから湿地や河川を避けた地形の条件が良い場所に建物などの選地が行われたことがわかる。

平安時代後期以降、中でも室町時代になると、ほとんどの調査で耕作土と耕作溝を認めていることから、調査地周辺のほぼ全域が耕作地となっていたことは明らかである。耕作地としての利

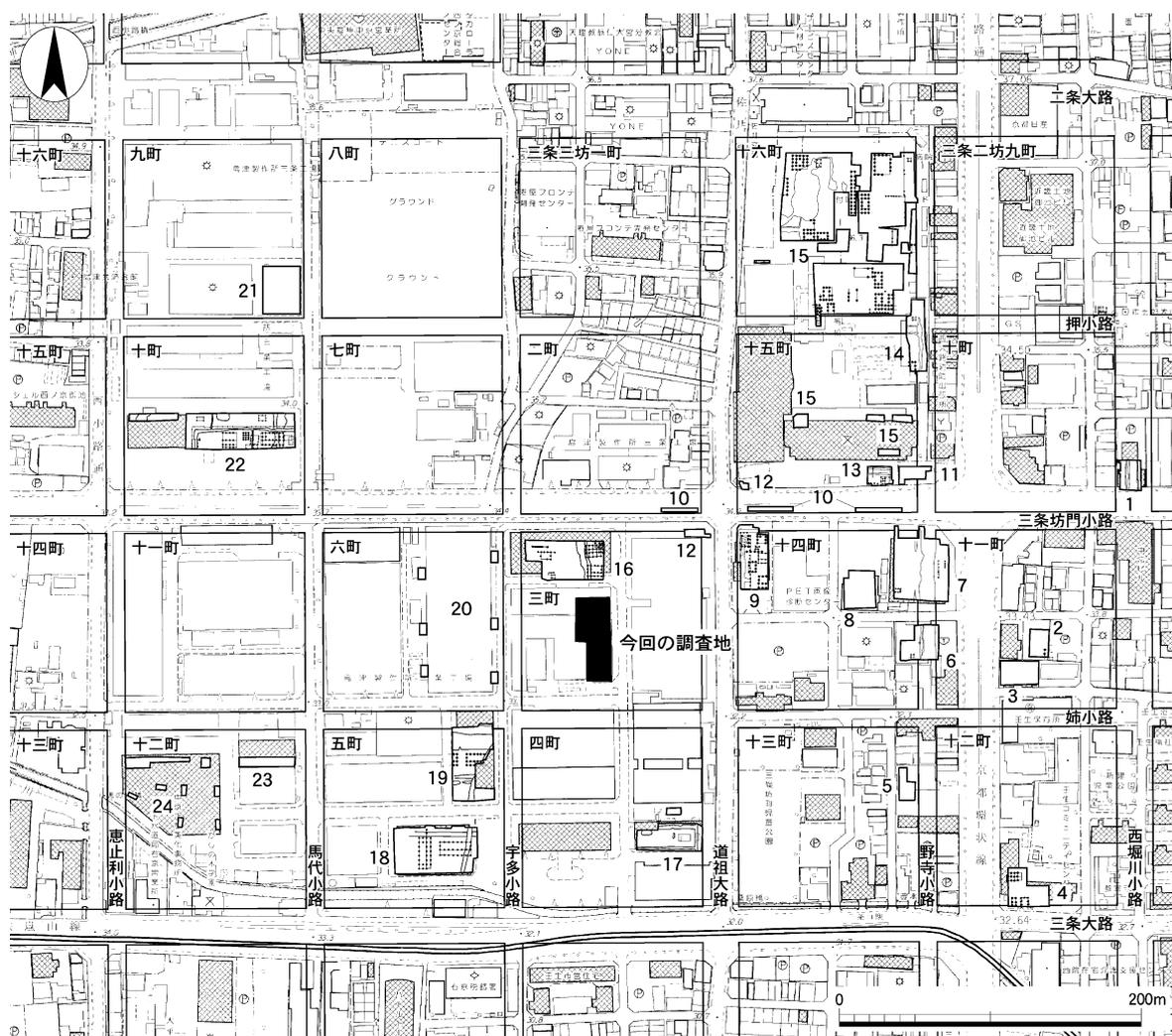


図5 周辺調査位置図(1:5,000)

表1 周辺調査一覧表

番号	調査概要	文献	備考
1	平安時代の西堀川小路路面・西側溝・西堀川などを検出	註4	
2	平安時代の建物・溝などを検出	註5	西大路御池駅駐輪場の調査
3	詳細不明		古代文化調査会の調査 未報告
4	平安時代の建物・井戸などを検出	註6	
5	鎌倉時代から室町時代の土取跡・柱穴、江戸時代の耕作地などを検出	註7	
6	平安時代の野寺小路西側溝・井戸・柱穴、鎌倉時代の野寺小路川・水利施設などを検出	註8	
7	平安時代の三条坊門小路南側溝・野寺小路東西側溝・柵、野寺小路川などを検出	註9	島津製作所8次調査
8	平安時代の建物・柵・土坑などを検出	註10	(財)古代学協会の調査
9	平安時代の三条坊門小路南側溝・建物・門・柵・井戸、道祖大路川などを検出 絵馬が出土	註11	島津製作所9次調査
10	平安時代の井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝などを検出	註12	西大路御池駅の調査
11	平安時代の建物・柵・溝、野寺小路川などを検出	註13	西大路御池駅昇降口の調査
12	平安時代の三条坊門小路南側溝・道祖大路西側溝、道祖大路川などを検出	註14	西大路御池駅昇降口の調査
13	平安時代の溝・柱穴、中世の井戸などを検出	註15	西京高校校内の調査
14	平安時代の押小路南北側溝・建物・井戸、野寺小路川などを検出	註16	西京高校校内の調査
15	平安時代の園池・建物群・井戸・道路、室町時代から江戸時代の耕作溝などを検出 「齊宮」などと記した墨書土器が出土	註17	西京高校校内の調査 「齊宮」の邸宅跡と推定できる
16	平安時代の建物・柵・井戸・溝・湿地状の落ち込みなどを検出	註18	島津製作所2次調査
17	平安時代の建物・溝・土坑などを検出	註18	島津製作所3次調査
18	平安時代の建物・柵・溝などを検出	註19	島津製作所6次調査
19	平安時代の建物・柵・井戸・溝などを検出	註18	島津製作所5次調査
20	遺構未検出	註20	日開調査設計コンサルタントの調査
21	古墳時代の竪穴住居・土坑・河川、平安時代の建物・井戸・溝・土坑などを検出	註21	(財)古代学協会の調査
22	平安時代の建物・柵・溝・土坑・木棺墓、古墳時代の流路などを検出 木棺墓の副葬品として化粧道具などが出土	註18	島津製作所1次調査
23	平安時代の整地層を検出	註22	島津製作所7次調査
24	湿地状の堆積、室町時代以降の耕作土を検出	註18	島津製作所4次調査

用は近代の開発が及ぶまで継続した。

(3) 試掘調査の成果

調査地の試掘調査は、文化財保護課により2009年1月28日・29日および2月27日に実施された(図6・7)。調査区は建物建設予定地全域を対象として、断続的に8箇所が設定されている。調査地の土層は全体的に西および南に向かって傾斜しており、調査地西半部では西側を流れていた紙屋川の旧流路あるいは氾濫にともなう礫・砂・シルトが堆積する状況が認められた。検出された遺構には試掘6の古墳時代の溝、平安時代の遺構面がある。また、各調査区では中世の遺物包含層が認められた。

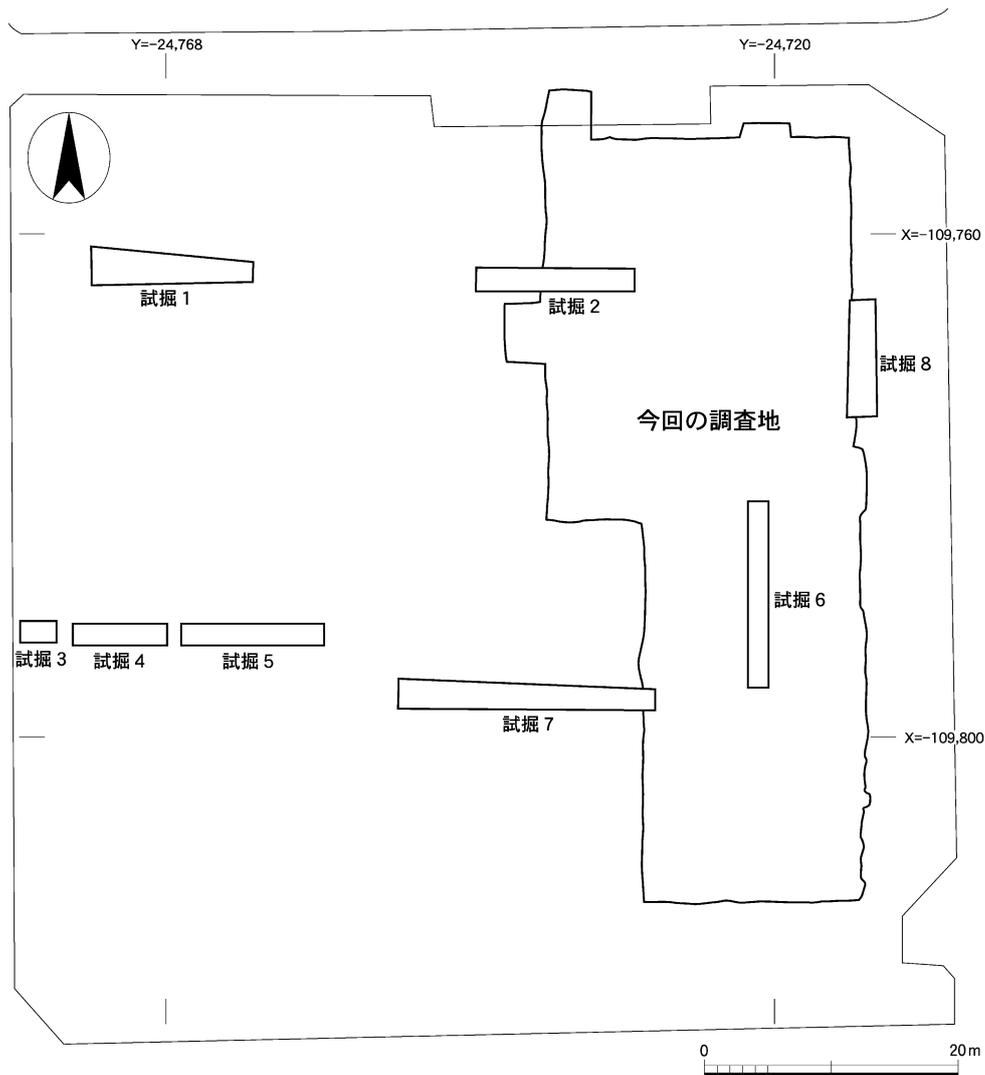


図6 試掘調査区配置図 (1 : 600)

遺物は試掘 1 から平安時代の土師器・須恵器・瓦、試掘 2 から平安時代・室町時代の土師器、試掘 6 から平安時代の土師器・須恵器、室町時代の土師器、試掘 7 から古墳時代の土師器、平安時代の土師器・瓦、室町時代の土師器が出土した。

試掘調査の成果からは、調査地西半部は紙屋川の旧流路や氾濫の影響を強く受ける場所であるが、東半部は土地が安定し、生活に適した場所であったと考えられる²³⁾。

遺跡の沿革や周辺の調査・試掘調査の成果からみられるように、調査地には平安時代の遺構が良好に残っている可能性が十分に考えられ、事実、調査地北隣にあたる三町北部の発掘調査では、平安時代前期から中期の掘立柱建物・柵・井戸・溝などを検出しており、調査地に一連の遺構が分布していることが予想できた。また、西ノ京遺跡に関連する弥生時代から古墳時代の遺構の検出も期待された。これらの状況を踏まえて調査地東半部が発掘調査の対象として指導されることとなった。

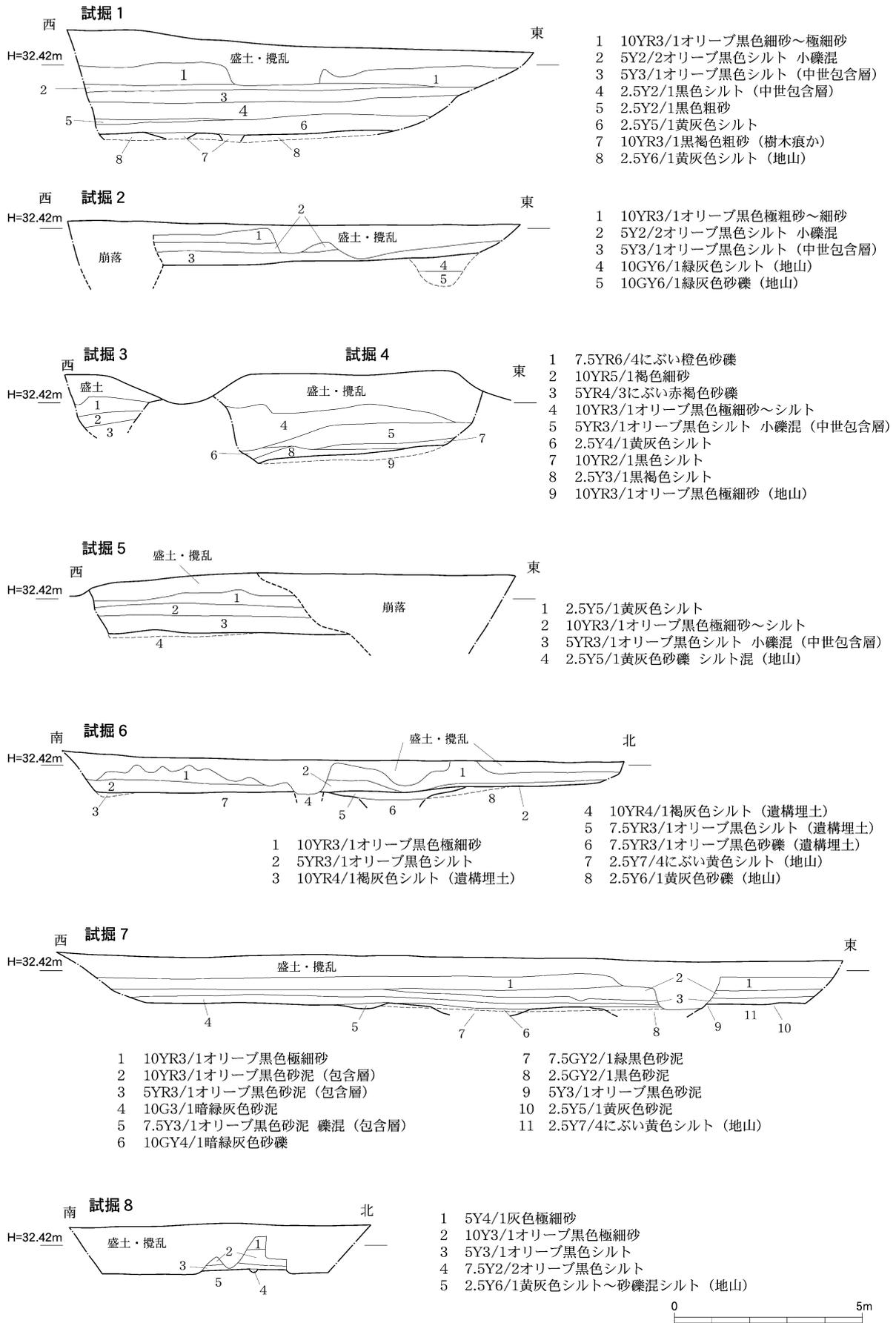


図7 試掘調査断面図 (1:150)

3. 遺 構

(1) 基本層序と遺構の概要

基本層序（図版1、図8～10・20・21） 調査地全域には0.4～0.8 mの厚さの盛土が拡がり、部分的には既存建物の基礎による攪乱が地表下約1.5 mの深さにまで及んでいる。また、既存の工場建設や解体工事の影響で土層が変形している部分がみられた。

1層は河川の氾濫に伴う堆積物の土層の存在により1-1層と1-2層に細分²⁴⁾できる。灰オリーブ色シルトなどで、厚さは約0.3 mである。西側から東側に向けて傾斜している。1層上面は浅いところでは地表下約0.4 mに位置し、工場建設直前の氾濫堆積物を母材とした耕作土である。

2層は暗灰黄色シルトで、厚さは約0.1 mである。氾濫堆積物を母材とした耕作土で、出土遺物は確認していないが、江戸時代から近代と推定できる。西側から東側に向けて傾斜している。

3層は灰オリーブ色シルトなどで、厚さは約0.2 mである。氾濫堆積物を母材とした耕作土で、出土遺物は確認していないが、江戸時代と推定できる。西側から東側に向けて傾斜している。

4層は4-1層～4-4層に細分できる。オリーブ黒色シルトなどで、厚さは約0.2～0.5 mで東から西に向かって厚くなる。4-1層～4-3層は氾濫堆積物を母材にした耕作土であるのに対して、4-4層は小礫や黒色シルトの小ブロックを含む黒褐色シルトであることから異なる母材の存在が考えられる。4-3層・4-4層から室町時代の遺物が出土した。

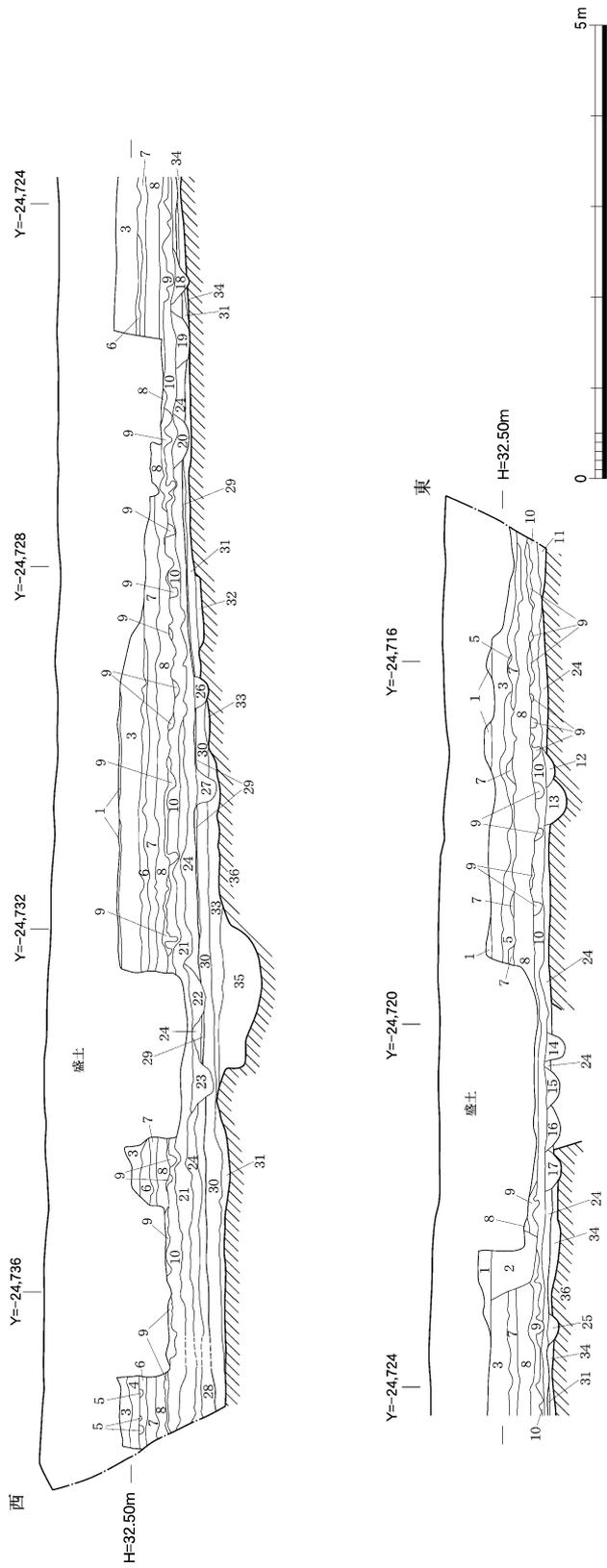
4層の下は、一部を除き調査区東部・南部で8層となる。また、調査区北西部では礫敷1を構成する5層が拡がる。5層は上面に礫を敷き詰めた人為的に施された地層で、厚い部分では約5 cmある。礫に混じって平安時代前期の遺物が出土した。

6層は北西部の5層の下に拡がる黒色シルトで、厚さは0.1～0.2 mである。上部を6-1層、8層の灰白色シルトのブロックを含む下部を6-2層に細分²⁵⁾できる。また、調査区東部・中央部の一部でも8層の上に認めることができる。平安時代前期の遺物が出土した。

平安京造営以前の遺構確認や地形環境を明らかにするため、調査区北部で8層に東西約20 m、深さ約1.5 mの断ち割りを入れた。8層の堆積は上部から灰白色シルト～粘土、粗砂～礫層、植物遺体を含む黒色の有機質シルトなどに大別することができる。黒色の有機質シルトに含まれる植物遺体についてAMS（加速質量分析）法による放射性炭素年代測定を実施したところ約

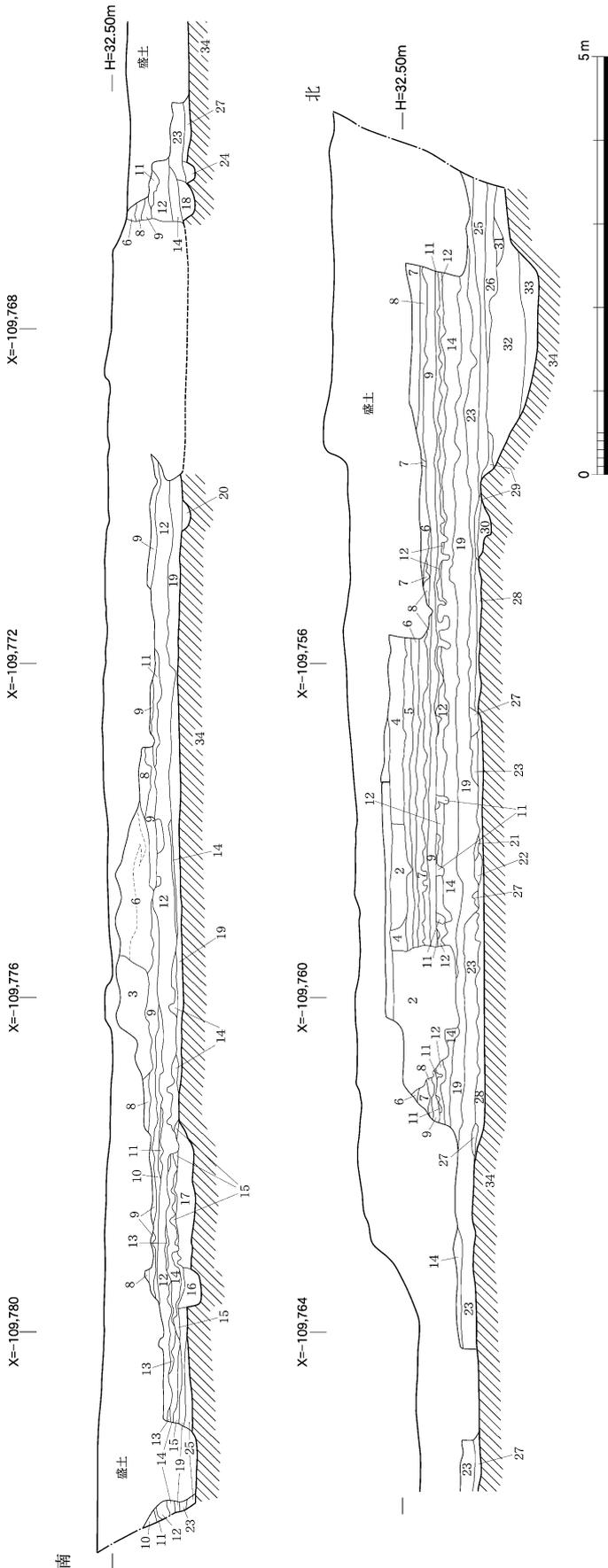
表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代～古墳時代	溝165・溝190・溝199・溝200・溝260・溝280・溝354・溝355、 落込み310	
平安時代	井戸10、溝67・溝120・溝209・溝215・溝216・溝217、小径333、 土坑275・土坑305、柱穴列356・柱穴列357・柱穴列358、礫敷1	
室町時代	畦333、溝2A・溝7A・溝7B・溝8・溝13、土坑11	



- | | | | |
|----|---------------------------------------|----|--|
| 1 | 5Y5/2灰オリーブ色シルト 小礫含む (1-1A層) | 19 | 10YR3/1黒褐色粘質土 径1.0~8.0cmの礫を多量含む (溝17) |
| 2 | 5Y5/3灰オリーブ色小礫シルト (1-1B層土の処理坑) | 20 | 10YR3/2黒褐色砂泥 径1.0~10cmの礫を多量含む (溝25) |
| 3 | 5Y5/2灰オリーブ~7.5Y5/8明褐色小礫シルト (1-1B層) | 21 | 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を少量含む (4-2層) |
| 4 | 5Y4/1灰色シルト (江戸時代以降の耕作土) | 22 | 10YR2/2黒褐色砂泥 径0.5~4.0cmの礫を多量含む (溝274) |
| 5 | 7.5Y4/1灰色小礫シルト (1-2B-1層) | 23 | 10YR3/2黒褐色砂泥 径0.5~3.0cmの礫を多量含む (溝276) |
| 6 | 5Y4/1灰色シルト 中砂~細砂含む (1-2B-2層) | 24 | 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を多量含む (4-3層) |
| 7 | 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 鉄斑あり (2A層) | 25 | 7.5YR3/2黒褐色砂泥 径1.0~7.0cmの礫を多量含む (溝13) |
| 8 | 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト 鉄斑あり (3A層) | 26 | 10YR3/3暗褐色砂泥 径0.5~10.0cmの礫を多量含む (溝272) |
| 9 | 7.5Y4/2灰オリーブ色細砂シルト (3B層) | 27 | 10YR3/3暗褐色砂泥 径0.5~5.0cmの礫を多量含む (溝273) |
| 10 | 5Y3/1オリーブ黒色シルト 小礫含む (4-1層) | 28 | 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を多量含む 黒色シルトの小ブロックを含む (4-4層) |
| 11 | 10YR3/3暗褐色シルト (土坑3) | 29 | 礫敷 (5層) |
| 12 | 10YR2/3黒褐色シルト 礫を多量含む (溝2B) | 30 | 10YR2/1黒色シルト (6-1層 土坑275) |
| 13 | 10YR2/3黒褐色シルト 礫を少量含む (溝2A) | 31 | 10YR2/1黒色シルト (6-1層) |
| 14 | 10YR4/2灰黄褐色粘質土 径1.0~5.0cmの礫を中量含む (溝6) | 32 | 7.5Y3/1黒褐色粘質土 径0.5~1.0cmの礫を中量含む (溝331) |
| 15 | 10YR4/2灰黄褐色シルト粘質 (溝7A) | 33 | 5Y2/1黒色シルト+7.5Y6/1灰色シルト~粘土 (8層) ブロックが混る (6-2層 土坑275) |
| 16 | 10YR4/1 褐灰色シルト 小礫~極粗砂含む (溝7B) | 34 | 5Y2/1黒色シルト |
| 17 | 10YR3/1黒褐色粘質土 径1.0~5.0cmの礫を中量含む (溝8) | 35 | 10YR2/1黒褐色シルト 中砂~小礫を多量含む (溝280) |
| 18 | 10YR3/2黒褐色粘質土 径1.0~5.0cmの礫を多量含む (溝60) | 36 | 7.5Y6/1灰白色シルト~粘土など (8層) |

図8 北壁断面図 (1:80)



- 1 5Y5/2灰オリーブ色シルト 小礫含む (1-1A層)
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂～中礫 (1-1B層土の処理坑)
- 3 5Y5/3灰オリーブ色小礫～シルト (1-1B層土の処理坑)
- 4 5Y5/2灰オリーブ～7.5Y5/8明褐色小礫～シルト (1-1B層)
- 5 5Y4/1灰色シルト (1-2A層)
- 6 7.5Y4/1灰色小礫～シルト (1-2B-1層)
- 7 5Y4/1灰色シルト 中砂～細砂含む (1-2B-2層)
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 鉄斑あり (2A層)
- 9 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト 鉄斑あり (3-1A層)
- 10 5Y4/1灰色シルト (3-2層)
- 11 7.5Y4/2灰オリーブ色細砂～シルト (3B層)
- 12 5Y3/1オリーブ色黒色シルト 小礫含む (4-1層)
- 13 5Y4/2オリーブ色極細砂～シルト (4-1B層)
- 14 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を少量含む (4-2層)
- 15 5Y4/2灰オリーブ色極細砂～シルト (4-2B層)
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 径0.5～4.0cmの礫を多量含む (土坑329)
- 17 10YR3/2黒褐色粘質土 径0.5～1.0cmの礫を少量含む (溝325)
- 18 10YR2/2黒褐色砂泥 径0.5～5.0cmの礫を多量含む (溝298)
- 19 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を多量含む (4-3層)
- 20 7.5YR3/1黒褐色粘質土 径0.5～3.0cmの礫を多量含む (溝303)
- 21 10YR3/2黒褐色粘質土+2.5Y4/2暗灰黄色粘質土が少量混る (溝282)
- 22 10YR3/1黒褐色粘質土+2.5Y4/2暗灰黄色粘質土が少量混る (土坑279)
- 23 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を多量含む 黒色シルトの小ブロックを含む (4-4層)
- 24 7.5YR3/2黒褐色砂泥 (溝297)
- 25 10YR2/1黒色シルト (6-1層 土坑275)
- 26 5Y2/1黒色シルト+7.5Y6/1灰色シルト～粘土 (8層) ブロックが混る (6-2層 土坑275)
- 27 5Y2/1黒色シルト+7.5Y6/1灰色シルト～粘土 (8層) ブロックが混る (6-2層)
- 28 10YR3/1黒褐色粘質土 径0.5～3.0cmの礫を中量含む (溝281)
- 29 10YR3/1黒褐色シルト～粘土
- 30 礫
- 31 10YR2/1黒褐色シルト
- 32 10YR3/1黒褐色小礫～粗砂 (溝355)
- 33 10YR3/2黒褐色シルト 極粗砂と植物遺体を多く含む (溝355)
- 34 7.5Y6/1灰白色シルト～粘土など (8層)

図9 西壁北部断面図 (1:80)

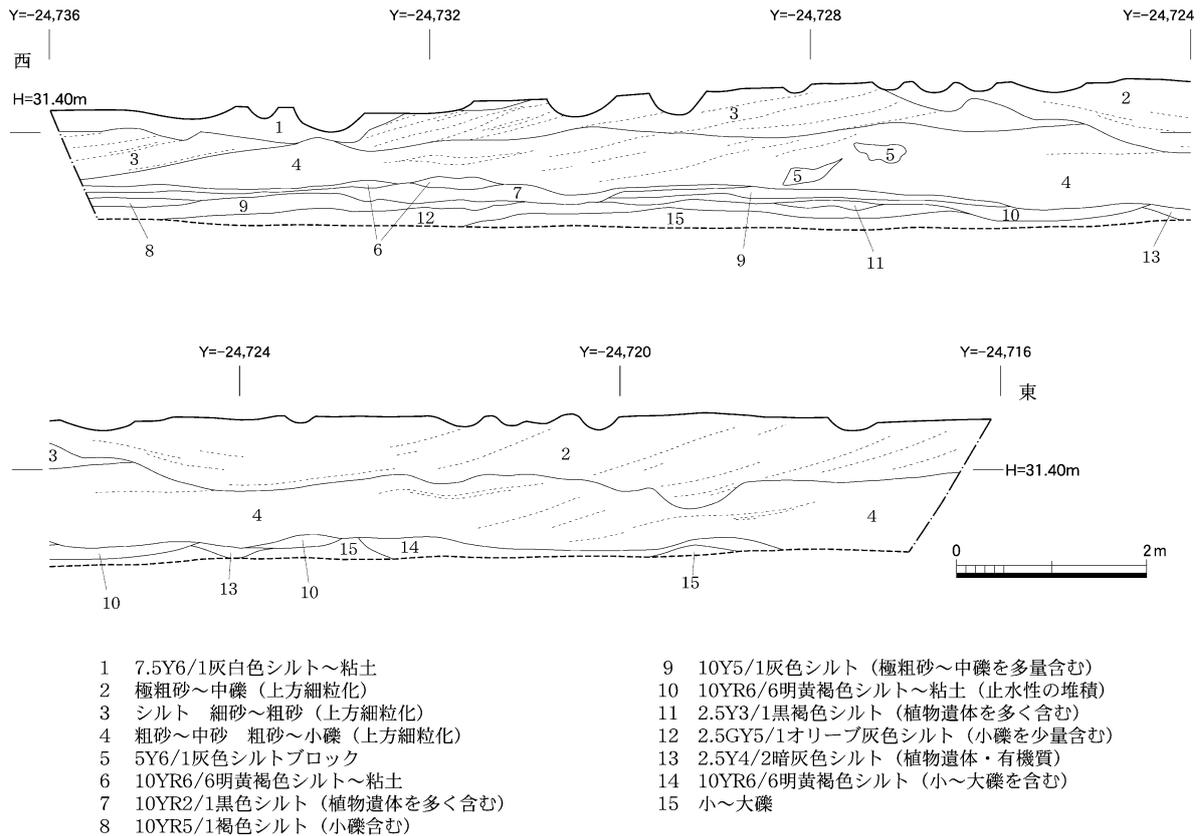


図10 断ち割り部分断面図 (1 : 80)

24,000年前との数値を得た。粗砂～礫層は旧河道もしくは河川の氾濫に伴う堆積物で、不整合面から少なくとも3段階に分けることができる。灰白色シルト～粘土は粗砂～礫層の間の低い部分を充填した土層である。なお、地形環境の詳細および放射性炭素 (^{14}C) 年代については付論2を参照していただきたい。

遺構の概要 調査では室町時代の耕作土である4層下面を第1面、平安時代の礫敷1を構成する5層および平安時代の包含層である6層下面を第2面として遺構検出を行った。

第1面では室町時代の溝・土坑・柱穴および平安時代の礫敷1などを検出した。礫敷1は調査段階では所属する時期が不明であったが、層位や出土遺物などの検討により平安時代の遺構であることが判明した。また、東部・中央部・南部では4層の下が8層上面であったため、平安時代の溝を検出し調査することとなった。

第2面では平安時代の井戸・溝・小径・土坑・柱穴、弥生時代・古墳時代の溝・落ち込みなどを検出した。ただし、調査区北西部の溝・畦は、第1面では北西部の礫敷1を残したため掘削しなかったが、断面観察や出土遺物などの検討により、礫敷1よりも新しく第1面で検出した他の溝と同じく室町時代の遺構であることが判明した。

検出した遺構総数は358基である。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を中心に調査段階の検出状況にしたがって第1面と第2面に分けて報告し、調査地の歴史的な変遷についてはまとめて総括する。なお、検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都I期～

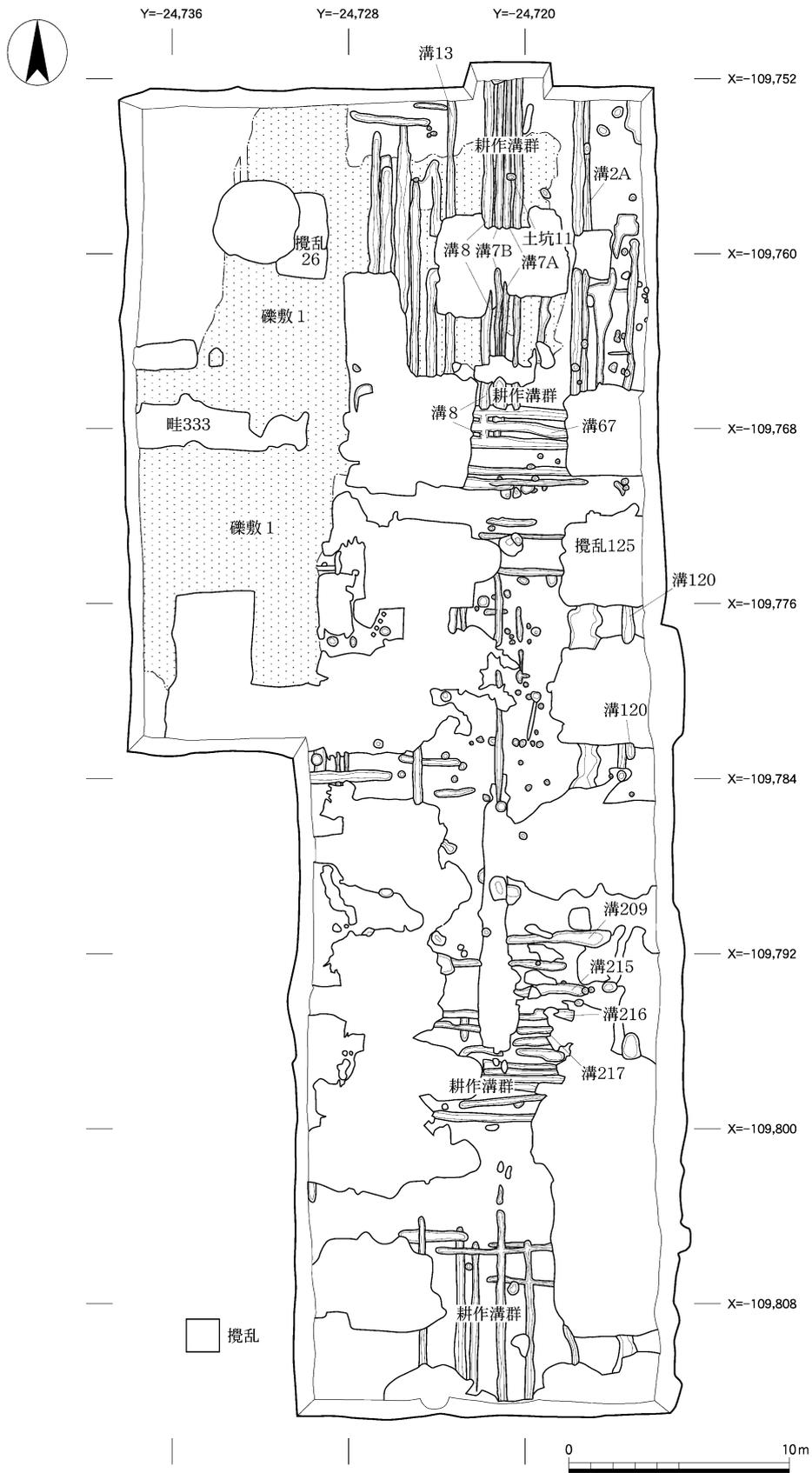


图11 第1面平面图 (1:300)

26)
期の編年案に準用する。

(2) 第1面の遺構 (図版1・2、図11)

耕作溝群 溝は調査区のほぼ全域で検出した。室町時代の耕作溝で、複数の溝が平行し、調査区北部・南部では南北方向、中央部では東西方向が優位である。攪乱により途切れる部分が多いが、幅0.2～0.7 m、深さ0.1～0.2 mのものが大部分を占める。埋土は4層と共通する。ここでは、出土遺物を掲載した遺構について報告する。

溝2 A 北東部で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外に延びるが、南側は攪乱されて途切れる。断面形は浅いU字形で、長さ13.2 m以上、幅0.2～0.4 m、深さ約0.1 mである。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

溝7 北東部で検出した南北方向の溝で、北寄りでは溝7 A・溝7 Bが接して平行する。北側は調査区外に延びるが、南側は東西方向の溝に接合する。断面形は浅いU字形で、長さ15.1 m以上、幅約0.6 m、深さ約0.1 mである。また、溝7 A・7 Bはともに断面形は浅いU字形で、幅0.2～0.4 mである。埋土は灰黄褐色粘質土で、Ⅷ期の遺物が出土した。

溝8 北東部で検出した溝7 A・Bと並ぶ南北方向の溝である。北側は調査区外に延びるが、南側は東西方向の溝に接合する。断面形は浅いU字形で、長さ16.4 m以上、幅0.3～0.5 m、深さ約0.1 mである。埋土は黒褐色粘質土で、Ⅶ～Ⅷ期の遺物が出土した。

溝13 北部中央で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外に延びるが、南側は攪乱されて途切れる。断面形は浅いU字形で、長さ12.5 m以上、幅0.2～0.4 m、深さ約0.1 mである。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅶ～Ⅷ期の遺物が出土した。

土坑11 北東部で検出した。溝6・溝7 Aに攪乱されるが、直径約0.2 mの円形と推定できる。深さは約0.1 mである。埋土は黒褐色粘質土で、Ⅶ期の遺物が出土した。

礫敷1 (図版2-1) 調査区北西部の広い範囲で検出した人為的に施された地層で5層に相当する。上面に大きさ1～5 cmくらいの礫を敷き詰め、下部は砂質泥となる。厚い部分では約5 cmを測るが、東辺・南辺では輪郭がやや不明瞭となり、薄く礫が散布する状態となる。礫の上面には土器・瓦の小片や木片が散在し、土壌構造の分析から土壌化が進んでいたことが判明した。Ⅱ期の遺物が多量に出土した。

溝67 北西部で検出した東西方向の溝である。わずかに西で北に振る方位を採る。東側・西側とも攪乱されて途切れる。断面形は浅いU字形で、長さ4.3 m以上、幅約0.5 m、深さ約0.1 mである。埋土は6層と共通する暗褐色粘質土が混じる黒褐色粘質土で、Ⅱ期の遺物がわずかに出土した。三町のほぼ南北中心に位置する。

溝120 (図版2-2) 北東部から東部壁際で検出した南北方向の溝である。わずかに北で東に振る方位を採る。北側・南側とも浅く不明瞭となる。断面形はU字形で、断続的ながら長さ23.8 m、幅0.3～0.6 m、深さ0.1～0.2 mである。埋土は黒褐色粘質土で、Ⅱ期の土器・瓦のほか麻布を芯材とする漆製品が出土した。三町のほぼ東西中心に位置する。

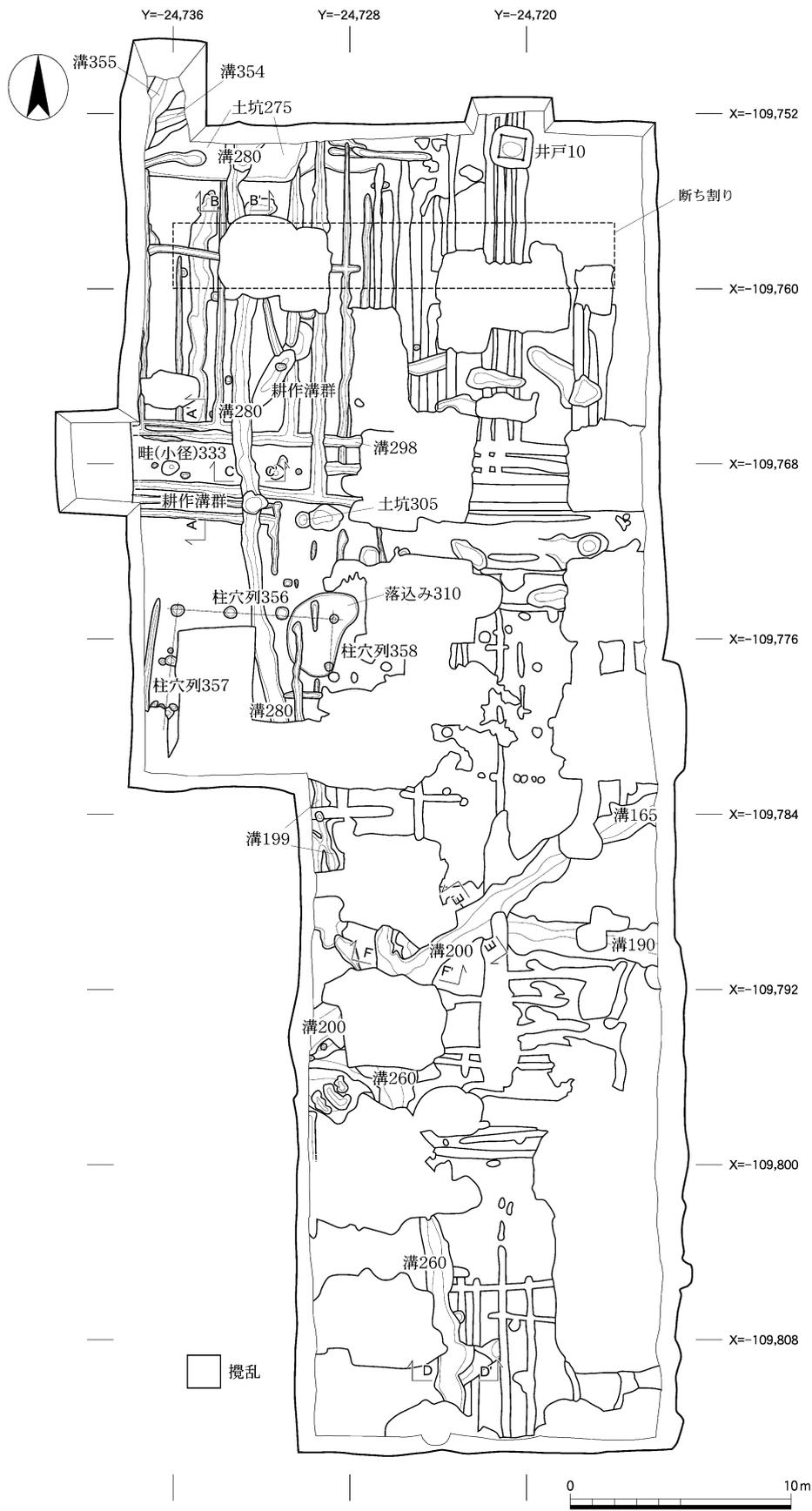


図12 第2面平面図 (1:300)

溝 209・溝 215・溝 216・溝 217 中央部南寄りで検出した東西方向の溝群である。東側・西側とも攪乱されて途切れる。断面形は浅い皿形で、溝 216 で長さ 6.3 m 以上、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.05 m である。埋土は 6 層と共通する黒褐色粘質土で、Ⅱ期の遺物がわずかに出土した。遺物が出土していないため時期の判定ができなかったが、南に隣接する東西溝群も埋土が共通することから、これらは平安時代前期の耕作溝の可能性はある。

(3) 第 2 面の遺構 (図版 3 ～ 6、図 12)

畦 (小径) 333 (図版 3-2、図 13) 北西部で検出した南北両側に溝を伴う東西方向の畦である。東側は南北方向の溝に接し、西側は攪乱されて途切れる。8 層を台形に成形し、上部を礫敷 1 が覆う。長さ 10.8 m 以上、上面の幅約 1.8 m、溝底からの高さ約 0.3 m である。上面がわずかに東から西へ向けて傾斜していることから、東側が耕作により削られている可能性がある。8 層を成形しているため遺物は出土していないが、三町のほぼ南北中心に位置し、これを境として室町時代の耕作溝が屈曲することから耕作地の区画施設であった可能性が高い。また、上部を礫敷 1 が覆うことから、平安時代前期にも高まりであったこととなり、三町内の位置から区画の小径であったと評価できる。なお、畦 333 の構造および層位関係を把握するために調査区を西側へ拡張したが、攪乱が広がっており目的を果たすことができなかった。

溝 298 北西部で検出した畦 333 の北側を区画する東西方向の溝である。東側・西側とも攪乱されて途切れる。断面形は浅い U 字形で、長さ 10.1 m 以上、幅 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m である。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

耕作溝群 北西部の礫敷 1 を取り外した段階で検出したが、断面観察や出土遺物などの検討により礫敷 1 よりも新しく第 1 面で検出した室町時代の耕作溝と同時期であることが判明した。第 1 面と同様、複数の溝が平行し、南北方向が優位であるが、畦 333 に接合するものが多い。幅 0.2 ～ 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m のものが大部分を占める。埋土は 4 層と共通する。

土坑 305 中央部西寄りで検出した。平面形は直径約 0.7 m の円形で、深さ約 0.1 m である。埋土は暗褐色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

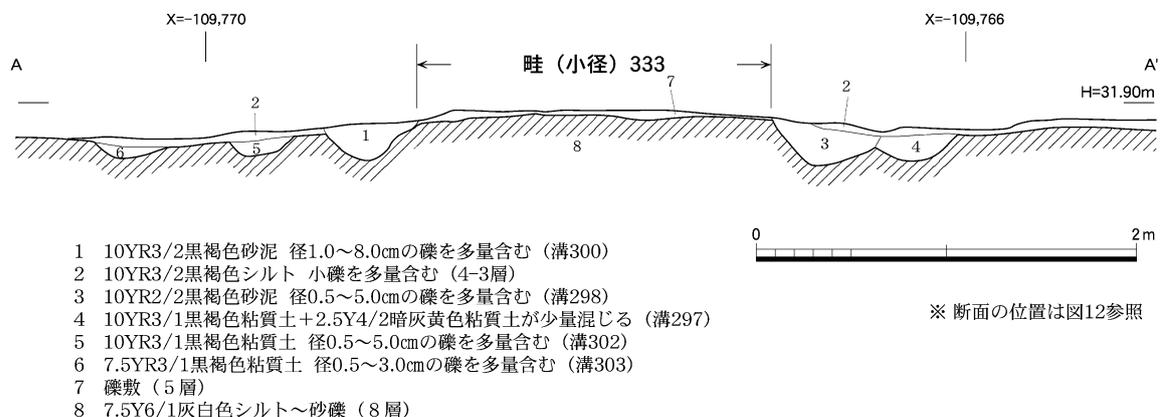


図 13 畦 (小径) 333 断面図 (1 : 40)

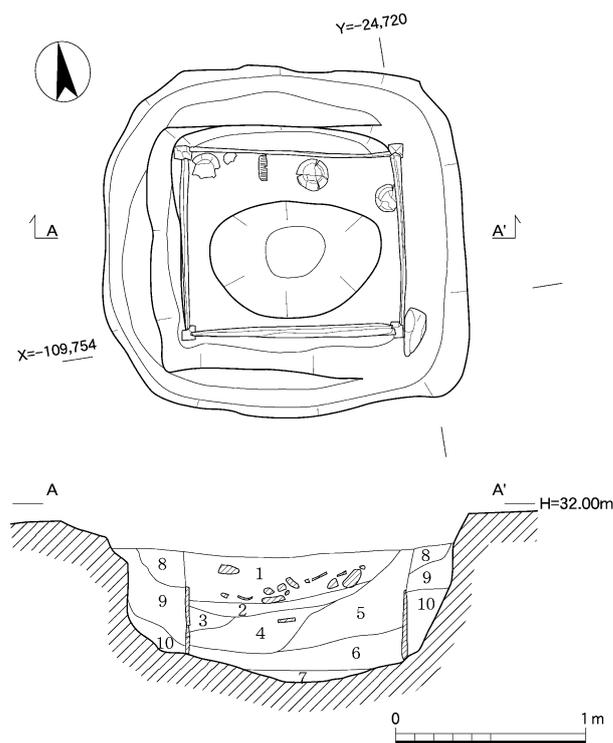
井戸 10 (図版 4、図 14・15) 北東部で検出した方形横板組の井戸である。掘形は南北約 1.8 m、東西約 1.9 m の隅丸方形である。深さは検出面から約 0.8 m で、底部の標高は 31.0 m である。井戸枠の内法は南北約 0.9 m、東西約 1.1 m の東西にやや長い長方形で、わずかに北で東に振る方位を採る。井戸枠は四隅に溝を加工した隅柱を立て、横板を嵌め込んで組む型式である。上部は腐植するが、底部から約 50 cm の高さまで残っていた。底部は浅く掘窪めるのみで水溜はない。調査中は標高 31.2 m 付近で湧水がみられた。井戸枠内の埋土は黒色シルト・黒褐色シルト・オリーブ黒色シルト、掘形の埋土は黒褐色シルトで下部には小礫などを含む。井戸枠内よりⅡ期の土器・瓦・木製品などがまとまって出土しており、特に井戸底付近からは完形の土師器皿・杯、櫛・容器などが出土した。井戸枠内埋土上部には大礫や須恵器甕・瓦片を多く含み、また、埋土の上部と下部で破片が接合する土器があることから人為的に埋め立てられたことがわかる。

土坑 275 (図版 5-1) 北西隅で検出した。北側・西側が調査区外へ拡がり、東側はやや不明瞭となるが、検出長は南北約 1.8 m、東西約 7.4 m、深さ約 0.2 m である。南辺は直線的で切り立っていることから人為的に成形していることがわかる。埋土は 6 層の黒色シルトで、下部には 8 層

の灰色シルトのブロックが混じる。Ⅱ期の遺物が出土した。遺構の性格を確認するため調査区を北西部へ拡張した結果、この遺構は調査区北側に大きく拡がること判明し、調査地北隣の 2 次調査で検出した落込み 7 と一連の遺構である可能性が考えられた。

柱穴列 356 (図版 5-2、図 16) 西部で検出した東西方向の柱穴列である。柱穴は 4 基で、検出長は約 7.2 m である。西側でわずかに北に振る方位を採る。柱穴は直径 0.4 ~ 0.5 m、深さ約 0.1 m である。柱穴の間隔はいずれも約 2.4 m である。埋土は黒褐色シルトなどで、柱穴 349 からⅡ期の遺物がわずかに出土した。

柱穴列 357 (図版 5-2、図 16) 西部で検出した南北方向の柱穴列である。柱穴は 3 基で、検出長は約 4.2 m である。北側でわずかに東に振る方位を採る。柱穴は直径 0.3 ~ 0.5 m、深さは最も深い柱穴 323 で約 0.4 m であ



- 1 10YR2/1黒色シルト 小～大礫、土器・瓦を含む
- 2 10YR2/1黒色シルト
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 極粗砂～中礫を含む
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 木片、植物遺体・昆虫遺体を多量含む
- 5 10YR2/2黒褐色シルト 小～中礫を多量含む
- 6 2.5Y3/1オリーブ黒色シルト
- 7 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト 極粗砂・小～中礫多量含む
- 8 10YR2/2黒褐色シルト 小礫を多量・中礫を少量含む
- 9 10YR3/1黒褐色シルト 小礫・中礫を少量含む
- 10 2.5GY6/1オリーブ灰色粗砂～小礫 泥混

図 14 井戸 10 実測図 (1 : 40)

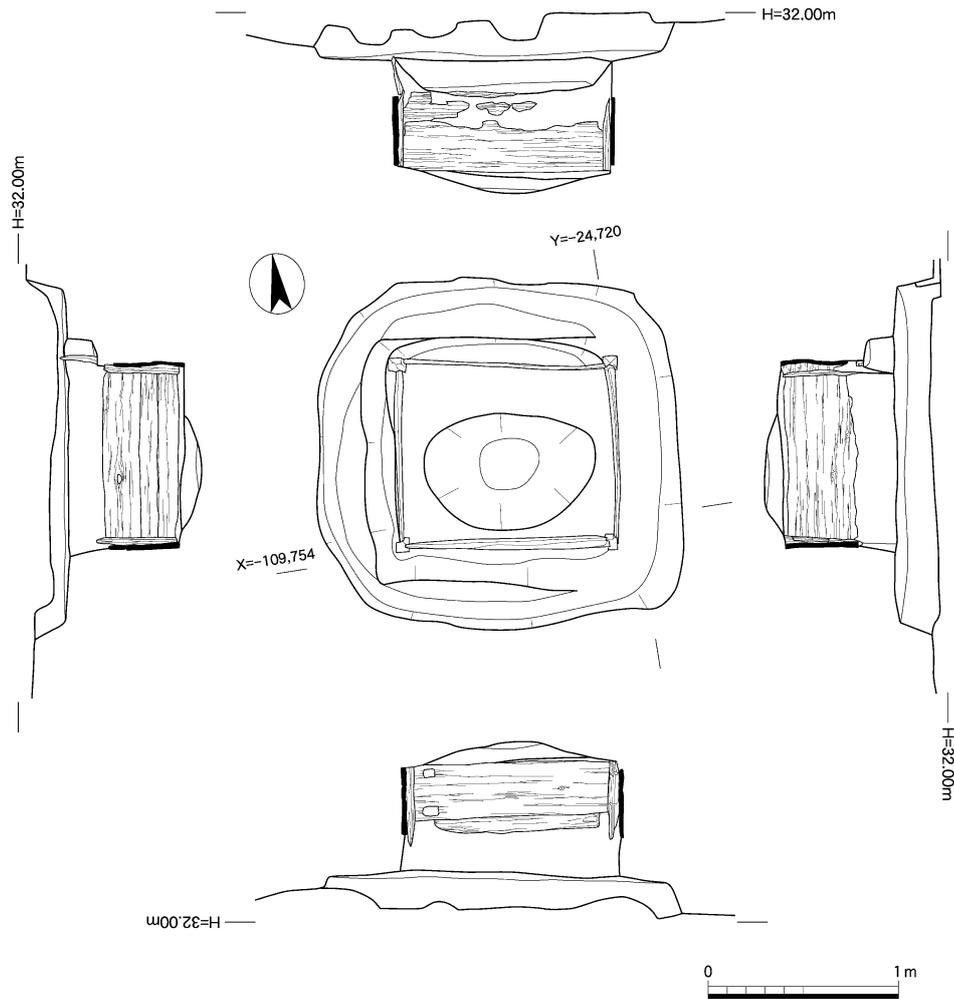


図 15 井戸 10 展開図 (1 : 40)

る。柱穴の間隔はいずれも約 2.1 m である。埋土は黒褐色シルトなどで、柱穴 323 から時期不明の遺物がわずかに出土した。

柱穴列 358 (図版 5-2、図 16) 西部で検出した南北方向の柱穴列である。柱穴は 2 基で、間隔は約 2.1 m である。北側でわずかに東に振る方位を採る。柱穴は直径約 0.4 m、深さ約 0.1 m である。埋土は黒褐色シルトなどで、出土遺物はない。

柱穴列 356・柱穴列 357・柱穴列 358 は、柱穴 322・柱穴 350 が共通し、コ字形の配置を採るが、隅部は直交しない。柱穴の深さも浅く一致しないことから、建物と断定することはできず、柵などの区画施設の可能性を考えたい。また、方位や柱穴 323 からの出土遺物からⅡ期の遺構と判断できる。

溝 260・溝 199・溝 280 (図版 6、図 17・18) 溝 260 は調査区南部、溝 199 は西部、溝 280 は北西部で検出した。攪乱により分断されるが、同一の緩やかに蛇行する南北方向の溝である可能性が高い。断面形は U 字形で、同一の遺構とすると長さ 59.0 m 以上、幅 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.3 ~ 0.6 m である。底部はわずかに北に向けて傾斜する。埋土は黒褐色シルトなどで中程に流水による堆積層がみられる。北西部の溝 280 を中心に、古墳時代前期から中期の土師器・須恵器が完

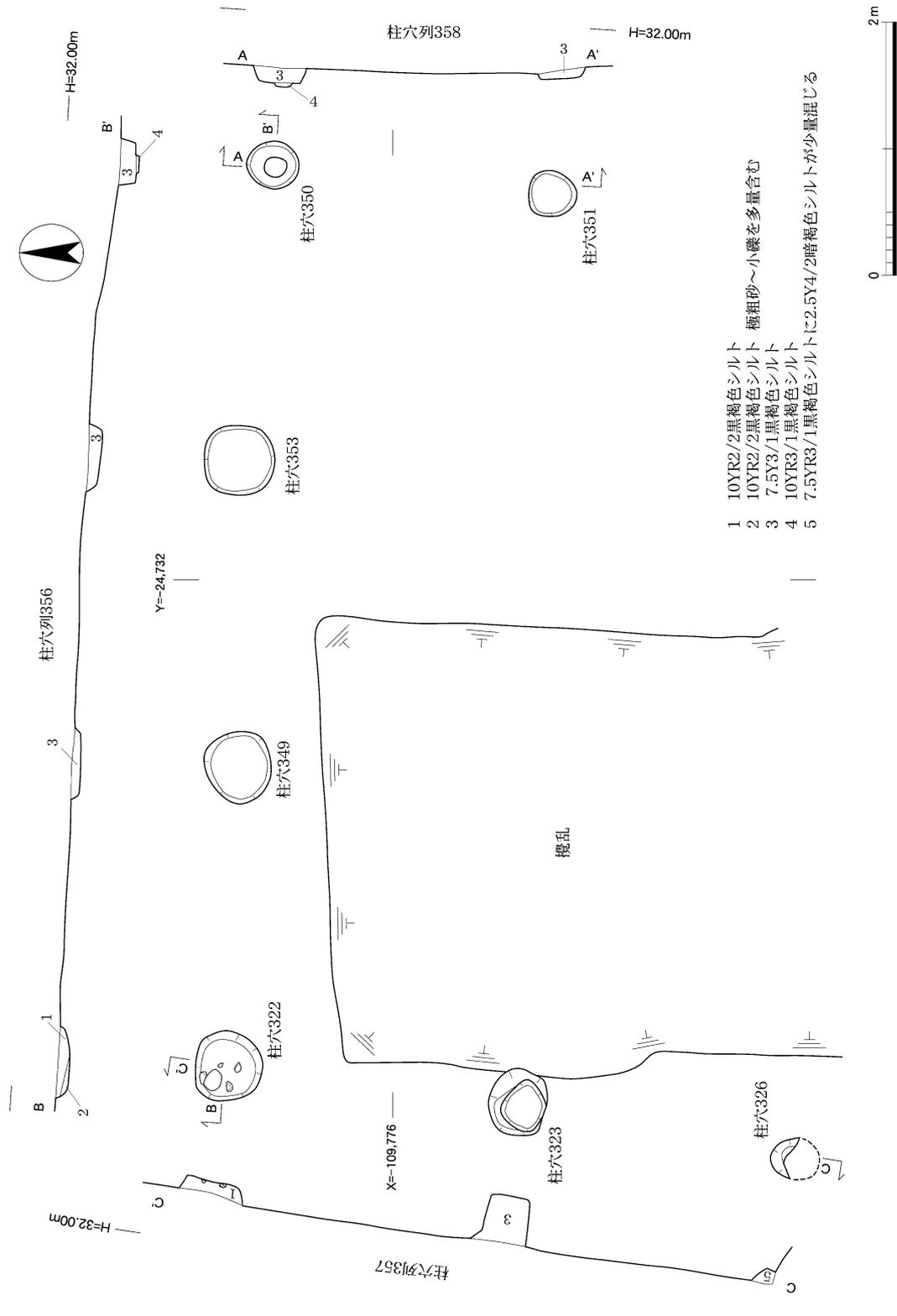


図 16 柱穴列 356・柱穴列 357・柱穴列 358 実測図 (1 : 50)

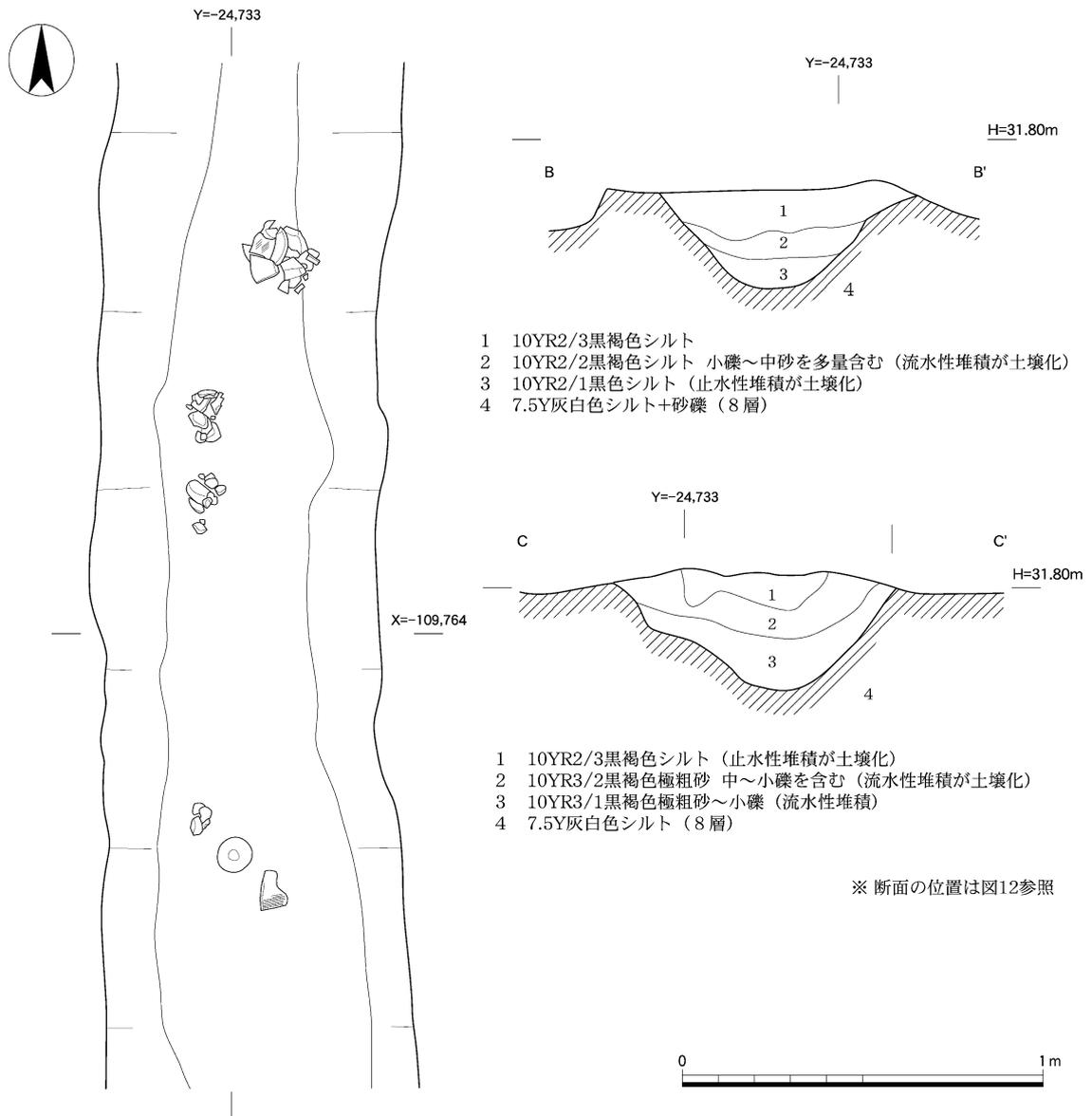


図17 溝280実測図（1：20）

形に近い状態でまとまって出土した。

溝165・溝190・溝200（図版6-4、図19～21）溝165・溝190は調査区東部、溝200は中央部から西部で検出した。溝165・溝200は北東から南西方向・溝190は東西方向の溝で、溝165・溝190が合流して溝200となる。溝165は断面形はU字形で、長さ8.5m以上、幅1.2～1.4m、深さ0.3～0.5mである。底部は南西に向けて傾斜する。溝190は断面形は浅いU字形で、長さ7.0m以上、幅1.4～1.6m、深さ0.2

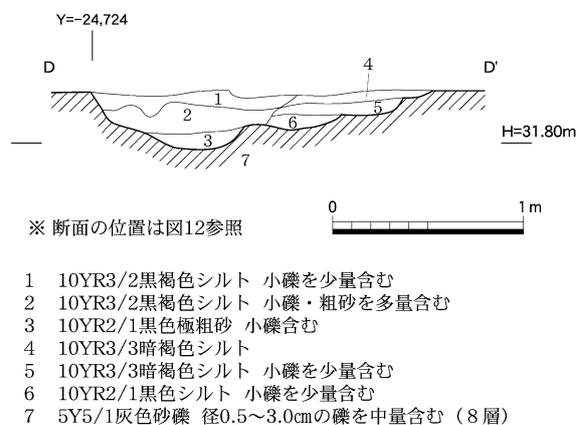
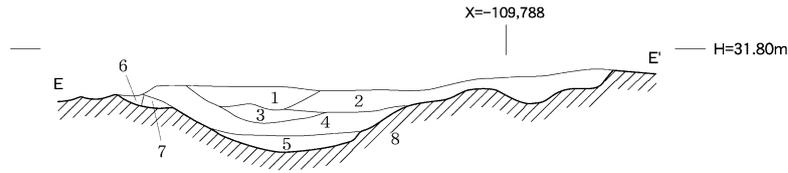
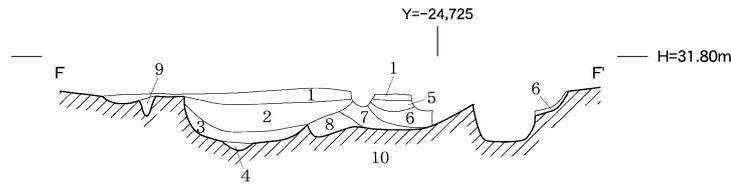


図18 溝260断面図（1：40）



- 1 10YR3/2黒褐色シルト
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 小礫を少量含む
- 3 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を少量含む
- 4 10YR3/2黒褐色シルト 小礫・粗砂を多量含む
- 5 10YR2/2黒褐色粗砂～中砂
- 6 10YR3/2黒褐色シルト 中～小礫を少量含む
- 7 10YR3/2黒褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルト（8層）が混じる
- 8 10GY7/1明緑灰色～5Y7/3浅黄色シルト（8層）



- 1 10YR3/2黒褐色シルト
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 小礫をわずかに含む
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 小礫をわずかに含む
- 4 10YR5/3にぶい黄橙色シルト 小礫を中量含む
- 5 10YR3/3暗褐色シルト 中砂～細砂を少量含む
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を中量含む 小礫を少量含む
- 7 10YR6/3にぶい黄橙色シルト 小礫を中量含む
- 8 10YR4/3にぶい黄橙色シルト 小礫を中量含む
- 9 10YR5/3にぶい黄橙色シルト
- 10 5Y7/2灰白色～2.5Y6/6明褐色シルト（8層） 一部に径0.5～2.0cmの礫を少量含む

※ 断面の位置は図12参照

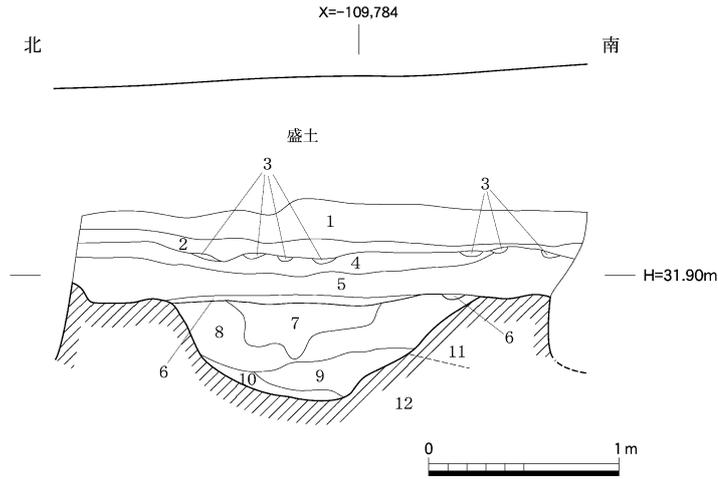


図 19 溝 200 断面図（1：40）

～0.3 mである。底部はほぼ平坦である。溝 200 は断面形は皿形で、長さ 10.0 m以上、幅 1.2 ～1.6 m、深さ約 0.3 mである。底部は南西に向けて傾斜する。溝の埋土は黒褐色シルトなどが共通し、一連の堆積であることがわかる。上部が室町時代以降の攪乱を受けている部分があったが、古墳時代前期の遺物が少量出土した。

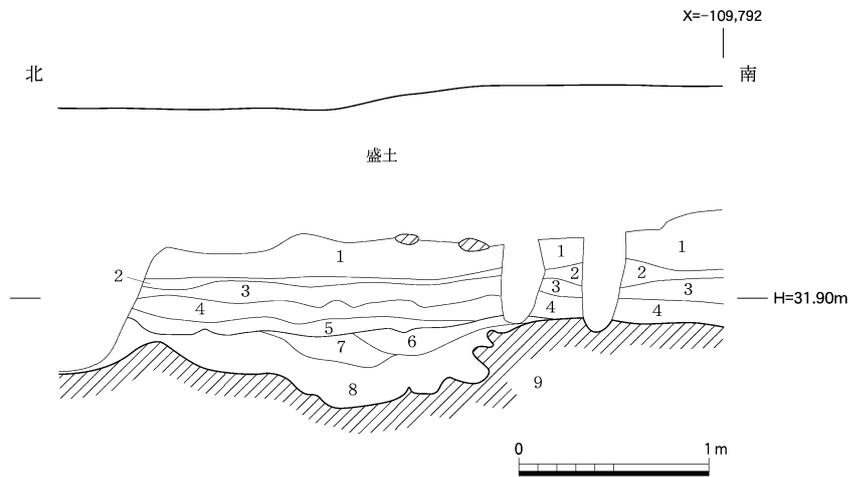
溝 354・溝 355（図版 6-5） 調査区北西側拡張区で検出した。ともに北東から南西方向の溝である。西側で重複するが、溝 354 の方が新しい。溝 354 は断面形は浅いU字形で、長さ 1.5 m以上、幅約 1.0 m、深さ約 0.2 mである。底部は南西に向けて傾斜する。溝 355 は断面形はU字形で、長さ 2.0 m以上、幅約 1.2 m、深さ約 0.3 mである。底部は南西に向けて傾斜する。埋土は黒褐色小礫～シルトなどで一部には葉理が観察できる。溝 354 から弥生時代終末期から庄内式併行期、溝 355 から弥生時代後期の遺物がわずかに出土した。

落込み 310 中央部で検出した。南北約 4.5 m、東西約 3.4 mの不整形な平面形で、深さ約 0.1 mである。埋土は黒褐色粘質土で、Ⅱ期と古墳時代前期の遺物が出土した。



- 1 5Y5/2灰オリーブ～7.5Y5/8明褐色大礫～極粗砂 (1-1B層)
- 2 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト 鉄斑あり (3-1A層)
- 3 7.5Y4/2灰オリーブ色細砂～シルト (3B層)
- 4 5Y3/1オリーブ黒色シルト 小礫を含む (4-1層)
- 5 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を多量含む (4-3層)
- 6 10YR2/1黒色シルト (6層)
- 7 10YR3/1黒褐色シルト (溝165)
- 8 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を少量含む (溝165)
- 9 10YR3/2黒褐色細砂～小礫 (溝165)
- 10 10YR3/2黒褐色シルト (溝165)
- 11 砂礫 (8層)
- 12 10YR6/6明黄褐色シルト～粘土 (8層)

図 20 東壁溝 165 断面図 (1 : 40)



- 1 5Y5/2灰オリーブ～7.5Y5/8明褐色中礫～小礫 (1-1B層)
- 2 7.5Y4/2灰オリーブ色細砂～シルト (3B層)
- 3 5Y3/1オリーブ黒色シルト 小礫を含む (4-1層)
- 4 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を少量含む (4-2層)
- 5 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を多量含む (4-3層)
- 6 10YR2/2黒色シルト (溝190)
- 7 7.5YR3/1黒褐色シルト (溝190)
- 8 10YR2/1黒色シルト 小礫・8層ブロックを多量含む (溝190)
- 9 10YR6/6明黄褐色シルト～粘土 (8層)

図 21 東壁溝 190 断面図 (1 : 40)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査では整理用コンテナに70箱の遺物が出土した。出土遺物には土器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品・植物遺体・昆虫遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、次いで瓦・木製品が多く、その他の種類はわずかである。

調査では新しい時代の遺構埋土・包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。時代別の出土量では、弥生時代から古墳時代が約1割、平安時代が約4割、室町時代が約5割である。

以下では種類ごとに出土遺物の概要を報告する。なお、出土遺物の時期の判定は、平安京・京都²⁷⁾I期～期の編年案に準用する。

(2) 土器

土器には、弥生土器・土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。土器類は出土遺物の多くを占めるが、弥生時代から古墳時代、平安時代前期、室町時代に大別することができ、それ以外の時期のものは少ない。

弥生時代から古墳時代(1～30)(図版7、図22)弥生時代から古墳時代の土器には、弥生土器・土師器・須恵器がある。古墳時代の土師器がほとんどで弥生土器・須恵器は数点にとどまる。溝260・溝280からまとまって出土した(図版6-2)。また、少量ながらその他の溝・土坑から出土したものや平安時代の遺構に混入していたものがある。

弥生土器から土師器には壺(1～11)・甕(17～22)・高杯(23～29)・小型器台(12～15)・小型鉢(16)・小型丸底壺などがある。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、土師器、須恵器		弥生土器1点、土師器28点、須恵器1点	5箱	
平安時代	土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品		土師器12点、黒色土器1点、須恵器5点、灰釉陶器5点、緑釉陶器4点、輸入陶磁器1点、瓦5点、土製品4点、木製品17点	16箱	1箱
室町時代	土師器、白色土器、瓦器、須恵器、焼締陶器、灰釉系陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器2点、瓦器2点、輸入陶磁器1点、土製品1点、石製品3点、金属製品3点	11箱	31箱
合 計		73箱	96点(9箱)	32箱	32箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

壺の形態は多様である。1・2はやや突出する平底で、1は体部が外上方に直線的に開く。調整は1は底部内外面・体部内面はナデで、体部外面は表面の損傷のため詳細不明であるがミガキの可能性もある。2は底部内外面ともナデである。3は口縁部はわずかに外傾して高く立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は口縁部外面は縦方向のハケののち横方向のナデで内面は横方向のナデである。4・5は口縁部はわずかに内弯気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は4は口縁部内外面は横方向のナデ、5は口縁部外面は横方向の粗いミガキで内面は横方向のナデである。6は口縁部は2段階に外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は口縁部内外面は横方向のナデである。7は口縁部は体部から屈曲して直立し、端部はやや外反して小さな面をつくる。調整は口縁部外面は横方向のナデで内面は左上がりのナデである。8・9は口縁部は体部から強く屈曲して外反気味に開き、端部は明瞭な面をつくる。調整はともに口縁部内外面は横方向のナデで、9は体部外面は横方向のハケで内面は横方向のケズリである。10は頸部の破片で屈曲部外面に突帯がめぐる。調整は体部外面はハケで内面はナデとオサエ、口縁部内外面は横方向のナデである。11は大型の壺で口縁部は外反して開き、端部は屈曲してほぼ直立する。調整は内外面は横方向のナデである。讃岐地方の影響がうかがえる土器である。

甕はいずれも口縁部が「く」字状に強く屈曲して、わずかに内弯気味に開く。端部は肥厚して17は小さな玉縁となり、18・19は明瞭な面、20～22は内傾する面をつくる。調整はいずれも口縁部内外面は横方向のナデ、18・19・22の体部外面はハケで内面はケズリである。ケズリの範囲は18・19が屈曲部にまでおよぶのに対して、22はやや下位にとどまる。

高杯には杯部が屈曲して外反するもの(23～26)と椀形のもの(27・28)がある。脚部はいずれも中空で、前者の脚部は緩やかに外反するのに対して、後者は円筒形状の柱状部から裾部が屈曲して開く。23は杯部の屈曲が明瞭である。脚部と杯部の接合は24～26が円盤充填技法で、24・25は内面中央に細い棒状工具を突き刺した痕跡が残る。調整は23は杯部内外面は横方向のナデ、24は杯部外面は横方向のナデで内面はハケののち横方向のナデで放射状の粗いミガキを施す。25は杯部内外面はハケののちナデ、柱状部外面は縦方向のナデで内面は横方向のケズリ、裾部内外面は横方向のナデ、26は杯部外面はハケののちナデで内面は縦方向のナデ、柱状部外面は縦方向のナデまたはミガキで内面は横方向のケズリ、裾部外面は横方向のナデで内面はケズリののちナデである。27・28は杯部内外面は横方向のミガキ、27は表面の損傷のため調整不明であるが、28は脚部外面は横方向の粗いミガキで内面はナデである。なお、29は緩やかに外反する裾部で円形の穿孔がある。調整は表面の損傷のため詳細不明であるが、内外面ともミガキの可能性もある。

小型器台には杯部中央に穿孔があるもの(12)とないもの(15)がある。杯部は浅い皿形で端部が外反するもの(13・14)と短くつまみ上げるもの(15)がある。調整は13・15は杯部内外面は横方向のナデ、12は杯部内外面は横方向のミガキで端部は横方向のナデである。

小型鉢はやや扁平な半球形の体部から口縁部が屈曲して開く。底部は上底である。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、体部・底部外面はオサエののちナデで内面は工具による放射状のナデ

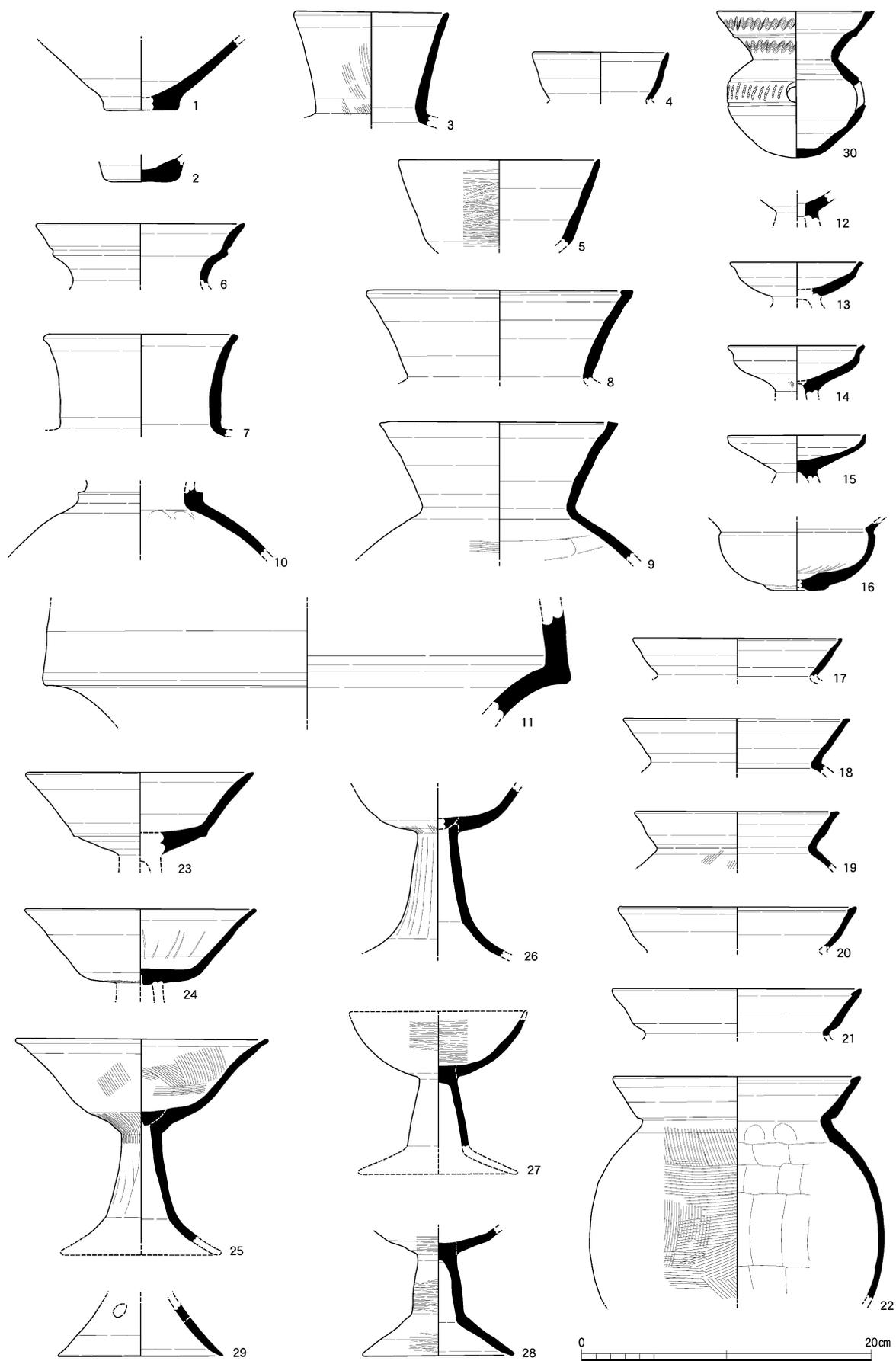


图 22 土器实测图 1 (1 : 4)

である。

時期の判別が難しいものもあるが、3は弥生時代後期、1・2・4・5・10・29は弥生時代終末期から古墳時代初頭の庄内式土器併行期、6～9・11～28は古墳時代の布留式土器に属すると考える。また、6～9・11～28はさらに6～9・11～19・23～26が須恵器を伴わない時期、20～22・27・28が須恵器を伴う時期に細別できる。

掲載した弥生土器・土師器の出土遺構を提示すると、溝260が4・6・8・20～24・26、溝280が5・7・9・11・13～19・25・27～29で、その他は1が溝354、2が6層、3が溝355、10が土坑275、12が土坑310である。

須恵器には甗(30)がある。溝280の埋土上部からほぼ完形の体部が正立する状態で出土し、口縁部の破片は埋土内に落ち込んでいた(図版6-3)。尖底気味でやや肩が張る体部から口縁部が強く屈曲して開き、端部をつまみ出す。体部中央を1箇所円形に穿孔し、口縁部中位には突帯が1条めぐる。調整は底部外面は一部に回転ケズリが残るが、大部分はケズリののち丁寧なナデ、その他はすべて横方向のナデである。また、体部最大径付近に2条の沈線と刺突文、口縁部は突帯の上下にそれぞれ波状文を施す。TK23～TK47型式の特徴を備えており、古墳時代中期に属する。²⁸⁾

平安時代前期(31～58)(図23)平安時代の土器は井戸10・溝120・土坑275・5層・6層などのほか室町時代の耕作溝・耕作土に混入して出土した。土師器皿・椀・杯・高杯・甕、黒色土器椀・甕、白色土器盤、須恵器杯・杯蓋・鉢・壺・甕、灰釉陶器皿・段皿・椀・壺・壺蓋・甕、緑釉陶器皿・段皿・椀・壺、中国製青磁などがある。土師器の割合が高く、それ以外の器種は少ない。

最もまとまっている井戸10からの出土土器を図示した(31～48)。土師器皿(31・32)・椀(33・34)・杯(35～38)・高杯、黒色土器椀(39)・甕、須恵器杯・鉢(40)・壺(41)・甕(42)、灰釉陶器椀(43・44)・壺(45・46)、緑釉陶器椀(47・48)などがある。

31・32は平坦な底部から口縁部が外反気味に低く開き、端部はわずかに屈曲する。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はオサエで内面はナデである。33・34は丸みをおびた底部から体部・口縁部が緩やかに内弯して開き、端部はわずかに屈曲する。調整は口縁部内外面・体部内面は横方向のナデ、体部・底部外面はオサエ、内面はナデである。35～37は高台のない杯、38は高台を貼り付ける杯である。ともに底部から口縁部が緩やかに屈曲して開き、端部はわずかに屈曲する。調整は35～37が口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はオサエで内面はナデである。38は口縁部内外面・体部内面は横方向のナデ、体部外面はオサエののちハケ・ケズリ、底部内外面はナデである。なお、31・37は完形で井戸底付近から横板に接した状態で出土した(図版4-3)。

39は平坦な底部から体部・口縁部が内弯して開き、端部は丸くおさめる。底部は貼り付け高台である。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面はオサエ、底部外面はナデで、内面は炭素を吸着させる。黒色土器椀には内外面に炭素を吸着させたものもある。

40は内弯する体部から口縁部が屈曲して開き、端部はつまみ出して拡張する。調整は口縁部・体部内外面とも横方向のナデである。41は体部と口縁部が直接接合しないが、特徴が共通するため同一個体と判断した。底部は平底で、口縁部は外反して開き、端部をつまみ上げて面を作る。

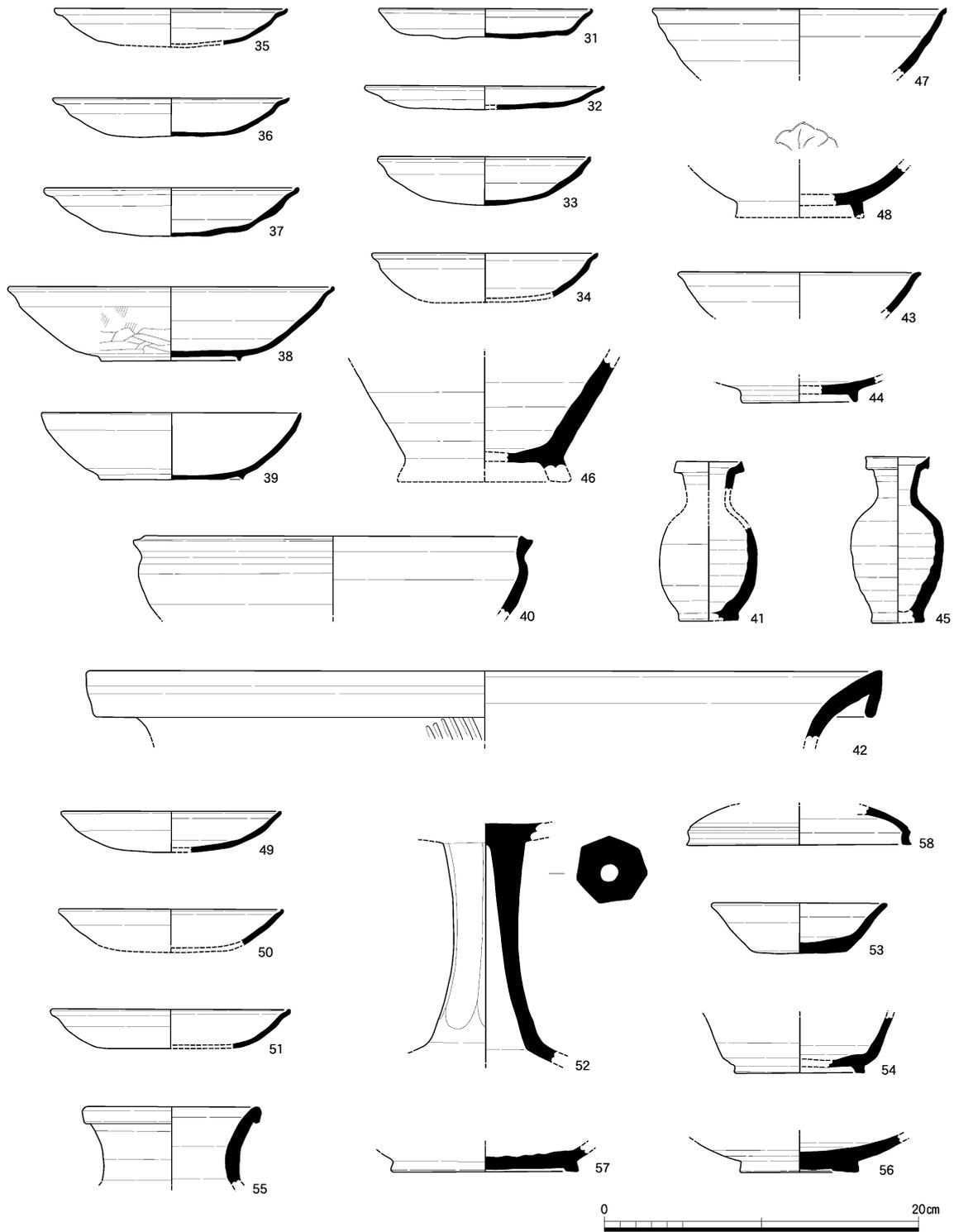


図 23 土器実測図 2 (1 : 4)

調整は体部外面下位がケズリで、他は内外面とも横方向のナデである。底部外面には糸切り痕が残る。42 は大型で口縁部は外反して開き、端部は垂下して広い面をつくる。調整は内外面とも横方向のナデである。

43 は口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに外反する。調整は内外面とも横方向のナデで施釉する。内面の施釉は厚い。44 は底部は貼り付け高台である。調整は底部外面は、高台貼り付け

にともなう横方向のナデ、内面は刷毛で施釉する。45は底部は平底で、口縁部は外反して開き、端部をつまみ上げて面を作る。調整は口縁部内外面・体部内面は横方向のナデ、体部外面はケズリである。底部外面には糸切り痕が残る。46は平坦な底部から体部が屈曲して直線的に開く。底部は貼り付け高台である。調整は体部内外面は横方向のナデ、底部外面はナデ、内面は施釉のため不明である。体部外面の施釉は薄い。

47は口縁部は内弯気味に開き、端部を丸くおさめる。調整は内外面とも横方向のナデで施釉する。48は削り出し高台である。調整は体部・底部外面はケズリで内面はミガキののち底部中央に陰刻花文を描く。井戸10出土土器はⅡ期中段階に属する。

49～58は他の遺構から出土した。49～51は土師器杯である。底部から口縁部が緩やかに屈曲して開き、端部はわずかに屈曲する。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はオサエで内面はナデである。いずれも溝120から出土した。52は土師器高杯柱状部である。調整は杯部内面はナデ、柱状部外面は面取り状の縦方向のケズリで内面はナデ、裾部内外面は横方向のナデである。土坑275から出土した。

53・54は須恵器杯である。53は平底の底部から口縁部が屈曲して外反気味に開き、端部は丸くおさめる。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はヘラオコシののちナデで内面は横方向のナデである。54は底部は貼り付け高台である。平坦な底部から口縁部が屈曲して開く。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はヘラオコシののちナデで内面は横方向のナデである。ともに6層から出土した。

55は灰釉陶器壺である。口縁部は外反して開き、端部は玉縁状になる。調整は内外面とも横方向のナデで内外面に刷毛で施釉する。室町時代の耕作土から出土した。

56は緑釉陶器椀である。底部は削り出し高台である。調整は底部外面はケズリ、内面はミガキで内外面に施釉する。57は底径が大きいことから緑釉陶器大型壺などの底部と考える。高台の接合技法は不明である。調整は底部外面の高台近くは横方向のナデで高台内側はミガキ、内面は横方向のナデである。56は遺構検出中、57は攪乱125から出土した。

58は中国製青磁である。小破片であるが、合子または香炉の蓋と考える。内弯気味の天井部から口縁部は屈曲して垂下し、端部はつまみ出して面を作る。調整は天井部外面はケズリ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。内外面に施釉する。越州窯産である。5層から出土した。これらの土器はいずれもⅡ期に属する。

室町時代(59～63)(図24)室町時代の土器は耕作溝・耕作土から出土した。土師器小型皿・大型皿・受皿・丸椀・釜、瓦器椀・鍋・釜・火鉢・甕、須恵器鉢・壺・甕、焼締陶器播鉢・壺・甕、灰釉系陶器椀・大鉢・壺、施釉陶器椀・皿・おろし皿・大鉢・おろし鉢・壺、中国製白磁皿・椀・鉢・壺・合子、中国製青磁皿・椀・鉢・壺・合子、中国製青白磁椀・合子、中国製褐釉鉢・盤・壺、中国製黒釉壺などがあるが、ほとんどが小片である。

59は赤色系土師器大型皿である。口縁部は直線的に開く。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はオサエで内面はナデである。土坑11から出土した。Ⅶ期に属する。60は白色系土師

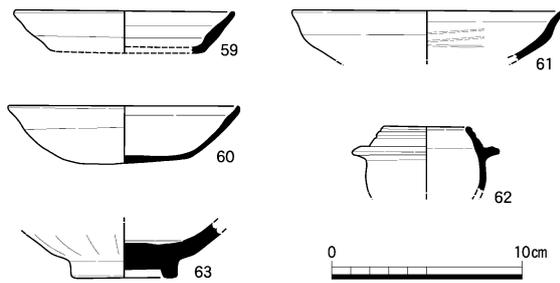


図 24 土器実測図 3 (1 : 4)

器大型皿である。口縁部が内弯気味に開く。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面はオサエののちナデで内面はナデである。土坑 305 から出土した。Ⅷ期に属する。

61 は瓦器碗である。口縁部はわずかに外反して開き、端部は丸くおさめる。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面はオサエで内面は横方向のナデののち暗文を施す。包含層から出土した。

62 は小型の瓦器釜である。体部は球形で口縁部外面に突帯がめぐる。調整は口縁部・体部内外面は横方向のナデ、底部外面はオサエで、口縁部外面に沈線を施す。5 層から出土した。

(3) 瓦

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。大部分は平安時代前期に属し、平安時代後期・室町時代のもはわずかである。出土した軒瓦は総数 8 点で、内訳は軒丸瓦 2 点、軒平瓦 6 点である。時期は平安時代前期が 5 点、後期が 2 点で、室町時代に属する巴文軒丸瓦の小片が 1 点ある。このうち図示したものは 5 点である

平安時代前期 (64 ~ 67) (図版 8、図 25) 64 は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。子葉が盛り上がり、二重の界線はやや太く、外区は珠文が巡る。中房は欠損している。瓦当部裏面上端に溝を付け、丸瓦を挿入する。胎土は砂粒多く、径 1.0 cm の礫を含む。灰白色で軟質である。『平安京古瓦図録』²⁹⁾ 36・37 と同文である。西賀茂瓦窯産。5 層から出土した。

65 ~ 67 は均整唐草文軒平瓦である。65 は唐草は緩やかに反転し、先端は細かく枝分かれする。珠文は 2 本の凸線の間疎に配され、脇区にも珠文をおく。中心部は欠損しているが、文様の類例から中心部には「大伴」³⁰⁾ 銘が入るとみられる。周縁および顎下部は欠損し、全体に磨滅しており、平瓦部凹面に布目がわずかに残る。胎土は砂粒を含み、灰白色で軟質である。産地は特定できていないが、平安宮からこの瓦が出土していないことから官窯産ではないと考える。4 層から出土した。66 は唐草文の主葉は連続して大きく反転し、中に 3 葉を配する。支葉は巻き込む。外区は珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凹面は横方向のケズリ。顎部凸面は縦方向のケズリ、裏面は縦方向のケズリののち横方向のナデ。平瓦部凹面は布目、凸面は縦方向のナデ、側面は縦方向のケズリ。胎土は砂粒を含み、灰白色で硬質である。『木村捷三郎収集瓦図録』³¹⁾ 287 と同文である。芝本瓦窯産。漆製品に接して溝 120 から出土した (図版 3 - 2)。67 は唐草文の主葉は大きく反転し、支葉は巻き込む。外区は珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凹面は横方向のケズリ。顎部凸面は縦方向のケズリ、裏面は縦方向のケズリののち横方向のナデ。平瓦部凹面は布目ののちに横方向のケズリ、凸面は縦方向のナデ。胎土は砂粒を含み、灰色でやや軟質である。『木村捷三郎収集瓦図録』

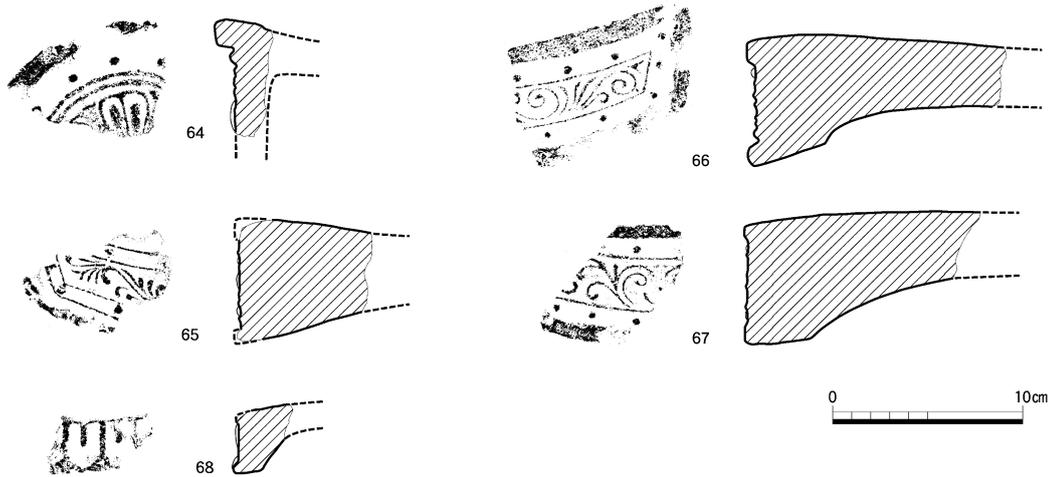


図25 瓦拓影・実測図（1：4）

285と同文である。西賀茂瓦窯産。井戸10から出土した。

平安時代後期（68）（図版8、図25） 剣頭文を配する軒平瓦で、他に図示していない破片が1点ある。瓦当部成形は折り曲げ技法で、顎部凸面は横方向のナデ。胎土は砂粒を含み、灰色でやや軟質である。山城産である。溝2Aから出土した。

（4）土製品

土製品には、硯・土馬・不明土製品・漆が付着した土器などがある。

硯（69・70）（図版8、図26） 須恵質の風字硯で、ともに胎土は精良で灰白色を呈し、硬く焼き締まる。69は中央に仕切をつけた二面硯海部の破片で、仕切は歪む。調整は内外面ともナデで、内面のナデは粗い。井戸10から出土した。平安時代前期に属する。70は端部の破片である。調整は内面は布目で、外面は外縁方向へのケズリである。4層から出土したが、平安時代に属するものである。

土馬（72）（図26） 胴体から折損した脚の破片である。表面には指オサエの痕が付く。溝120から出土した。平安時代前期に属する。

不明土製品（71）（図26） 緑釉陶器底部を加工した製品である。胎土は精良でにぶい橙色を呈し、

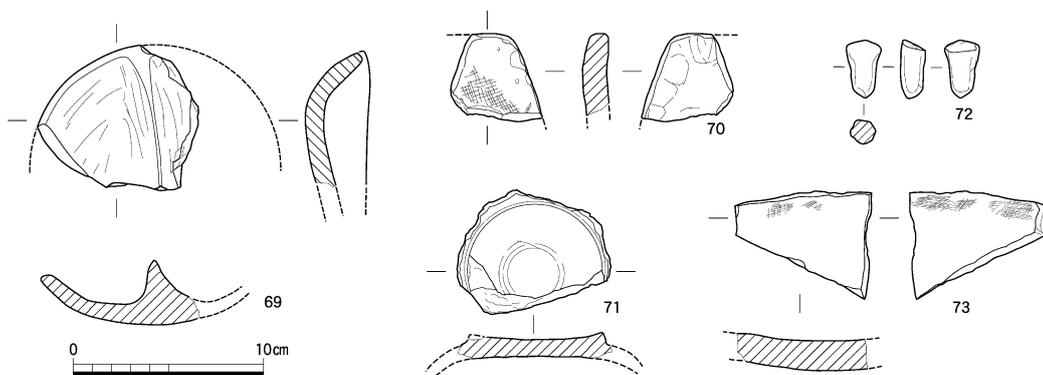


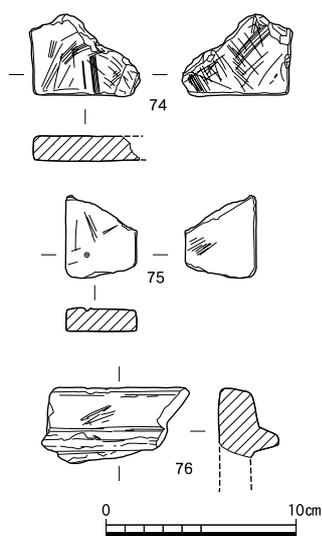
図26 土製品実測図（1：4）

硬質である。小塩産である。底部外面は釉が磨滅して滑らかなことから、調理具や硯に使用したと考えられる。4層から出土したが、平安時代に属するものである。

漆が付着した壺 (73) (図版8、図26) 焼締陶器壺の体部破片内外面に布と漆が付着する。外面の布は長さ6.0 cm以上・幅1.0～1.3 cmあり、上から漆が塗られて器壁に密着する。用途は不明である。溝8から出土した。室町時代に属する。

(5) 石製品

石製品には、温石・石鍋・砥石などがある。



温石 (74・75) (図版8、図27) とともに破片である。74は残存長が縦4.2 cm、横5.6 cm、厚さ1.3 cmである。石材は滑石である。溝7から出土した。75は残存長が縦4.4 cm、横3.2 cm、厚さ1.2 cmで、断面は長方形を呈する。やや黄色味を帯びた色調を呈する。石材は不明である。溝298から出土した。室町時代に属する。

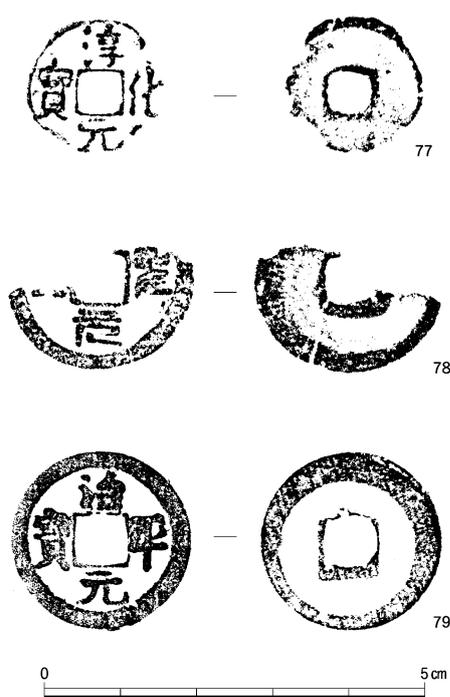
石鍋 (76) (図27) 口縁下部外側に鏝を削り出す。残存長は縦4.0 cm、横7.3 cm、厚さ2.0 cmである。石材は滑石である。4層から出土した。室町時代に属する。

砥石 石材は粘板岩が多い。室町時代以降に属する。

(6) 金属製品

金属製品には、銅銭・鉄釘・鉄滓などがある。

図27 石製品実測図 (1 : 4)



銅銭 (77～79) (図版8、図28) 銅銭は3種3点である。77は径約1.9 cm、厚さ約0.15 cmである。銭銘は「淳化元寶」と判読できる。初鑄は990年。外縁が矮小化していることから模鑄銭の可能性が高い。溝13から出土した。78は径約2.5 cm、厚さ約0.2 cmである。銭銘は「天聖元寶」と判読でき、字体の特徴から「天聖元寶」と判断した。初鑄は1023年。4層から出土した。79は径約1.9 cm、厚さ約0.2 cmである。銭銘は「治平元寶」と判読できる。初鑄は1064年。5層上面から出土した。いずれも北宋銭で室町時代に属する。

鉄釘 折損したものが多い。室町時代以降に属する。

鉄滓 大きさ数cm程度のものが散在して出土した。室町時代以降に属する。

図28 銭貨拓影 (1 : 1)

(7) 木製品

木製品には、櫛・容器・曲物・漆製品・井戸枠・箸・付木・漆器片などがある。井戸 10・溝 120 や室町時代の耕作溝・耕作土などから出土した。井戸 10 からの出土遺物が多くを占める。

櫛 (80～82) (図版 9、図 29) 80 は横櫛棟部の破片である。断面楕円形で、角は丸みが付き、ほぼ直線をなす。歯は欠損するが、鋸で挽き出した痕が付く。81 は横櫛で一端が折損する。棟部は断面半円形で、直線をなす。歯は密で 102 本以上あり、鋸で両側から挽き出す。82 はほぼ完形の横櫛で、中央下部がわずかに欠損する。棟部は断面半円形で、角は丸みが付き、直線を

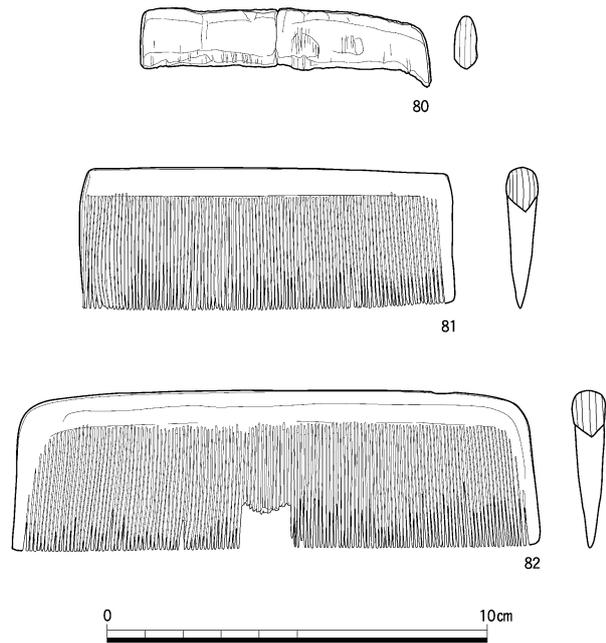


図 29 櫛実測図 (1 : 2)

なす。歯は密で 133 本あり、鋸で両側から挽き出す。材質は 3 点ともイスノキである。いずれも井戸 10 から出土した。平安時代前期に属する。

容器 (83・84) (図版 9、図 30) 破損が著しいが、ヒョウタンの果実を半裁して容器に加工したものである。外面は平滑で光沢をもち、内面には葉脈が残る。ともに井戸 10 から出土した。水を汲むのに使用した可能性がある。平安時代前期に属する。

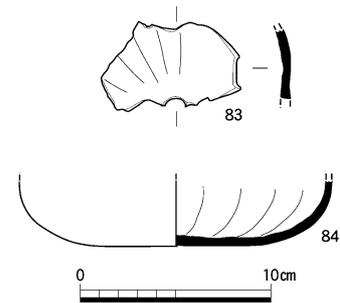


図 30 容器実測図 (1 : 4)

曲物 破損した曲物の一部が井戸 10 から出土した。平安時代前期に属する。

漆製品 目の粗い麻布を芯材にして、両面に黒色の漆を厚く塗布して固めた製品である。大きく変形しているが、残存長は 25 cm 以上ある。方形の容器の身または蓋と推定している。溝 120 から出土した (図版 2-2)。平安時代前期に属する。

井戸枠横板 (86～92) (図版 9、図 31) 井戸 10 は四隅に溝を加工した隅柱を立て、溝に横板を嵌め込んで方形に組む型式である。横板の幅は一定ではなく、北側は 1 枚 (86)、西側は 3 枚 (87～89)、南側は 2 枚 (90・91)、東側は 1 枚 (92) が残存していた。部材には柄穴などの加工痕をもつものがあり、建築部材などを転用した可能性が高い。材質はすべてヒノキである。

86 は北側横板である。長さ 109.2 cm、幅 27.2 cm 以上、厚さ 3.6 cm で、上部は腐植している。87～89 は西側横板である。3 枚とも比較的良好に残存している。下段から上に 89・88・87 の順で組み上げる。89 は長さ 94.0 cm、幅 9.2 cm、厚さ 2.6 cm、88 は長さ 94.0 cm、幅 8.6 cm、厚さ 2.6 cm、87 は長さ 91.4 cm、幅 21.8 cm、厚さ 3.2 cm である。89 の掘形側南端部には面取り痕がある。90・91 は南側横板である。下段から 91・90 の順で組み上げる。91 は長さ 107.8 cm、幅 29.2 cm、

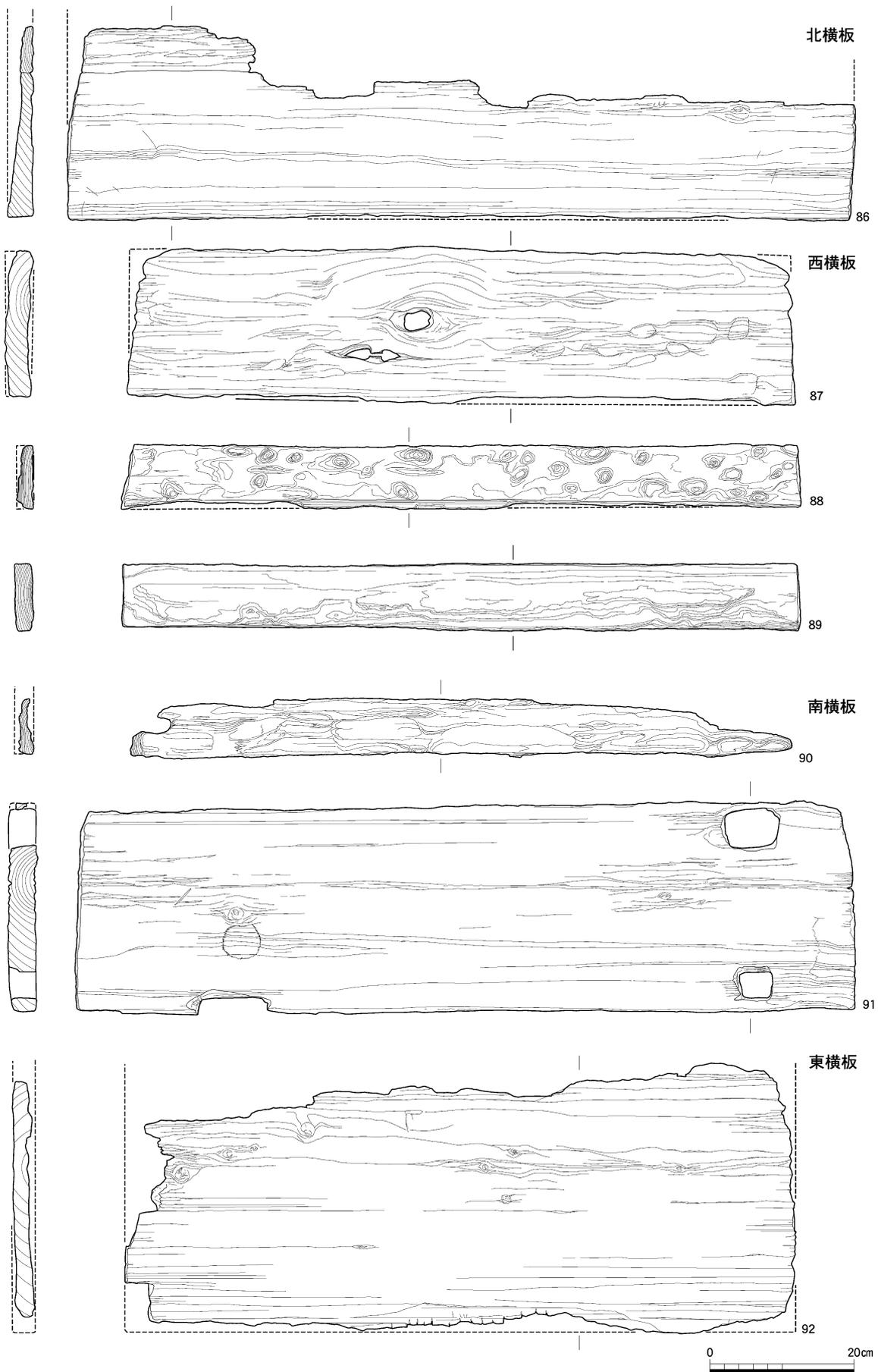


图 31 井戸枳実測图 1 (1 : 8)

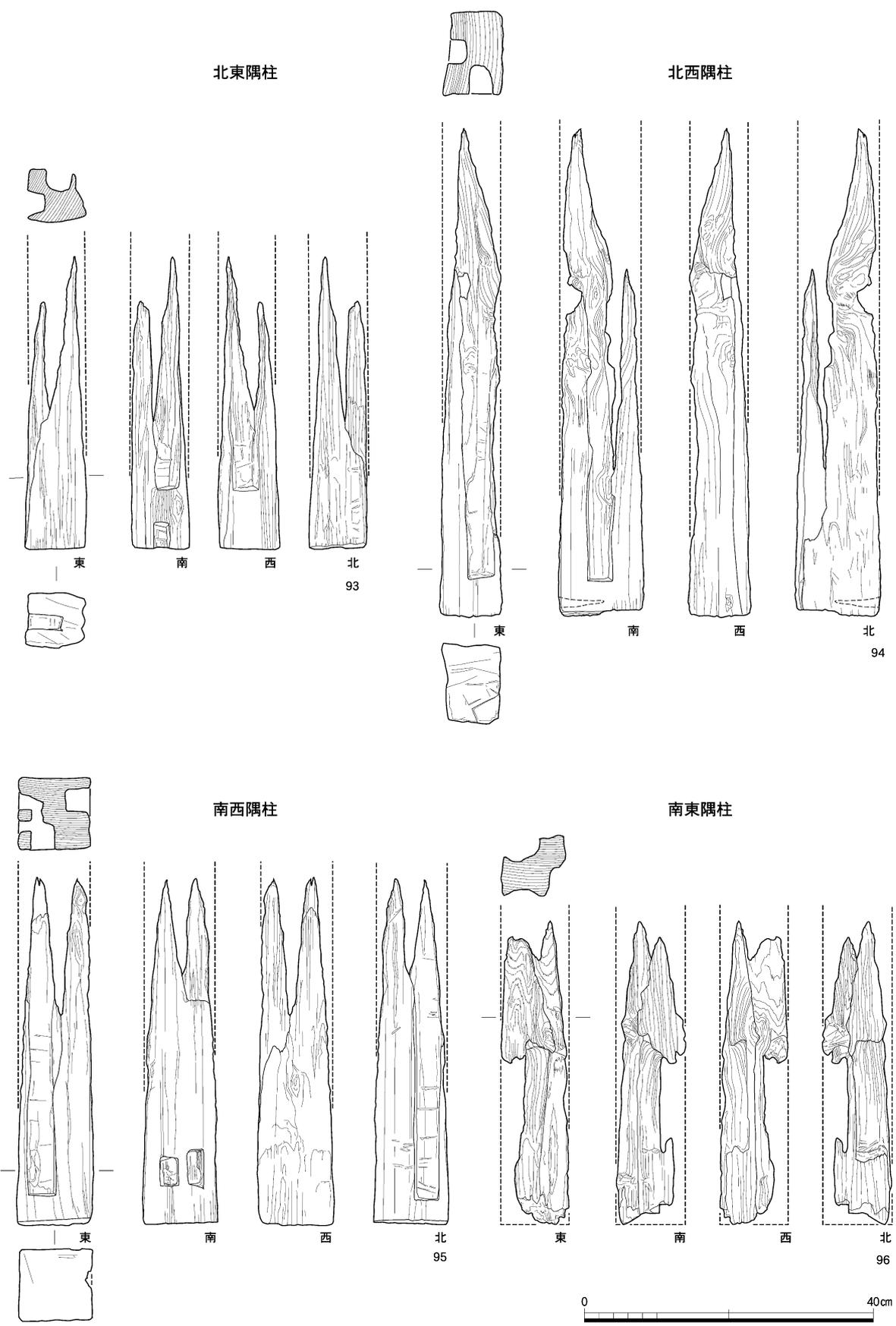


图 32 井戸枳実測图 2 (1 : 8)

厚さ 3.8 cm、90 は長さ 92.0 cm以上、幅 8.0 cm以上、厚さ 2.0 cm以上で、上部は著しく腐植している。91 は 2 箇所柄穴、下辺に削り込んだ加工痕があり、転用材と考えられる。また、内面に直径約 5 cmの焦げ痕が残る。92 は東側横板である。長さ 93.0 cm、幅 38.0 cm以上、厚さ 3.2 cmで、上部が腐植する。

井戸隅柱 (93 ~ 96) (図版 10、図 32) 隅柱は、側面の 2 面に横板を嵌め込むための溝を作る。全体に上部が腐植しているが、下部は良好に残存している。材質は 93 ~ 95 がヒノキ、96 がスギである。

93 は北東隅柱である。底面は 8.0 cm × 7.7 cmの長方形で、残存長は 40.5 cmである。南面と西面に東横板と北横板を嵌め込む溝を作る。底面に柄穴の痕跡があることから、転用材と考えられる。94 は北西隅柱である。底面は 8.0 cm × 11.2 cmの長方形で、残存長は 68.7 cmである。東面と南面に北横板と西横板を嵌め込む溝を作る。底面には調整の加工痕が残り、西面下部に釘穴があることから転用材と考えられる。95 は南西隅柱である。底面は 10.0 cm × 10.0 cmの正方形で、残存長は 48.0 cmである。東面と北面に南横板と西横板を嵌め込む溝を作る。南面下部に 2 箇所柄穴があることから転用材と考えられる。96 は南東隅柱である。全体に腐植がすすんでいるため底面の形状は不明である。残存長は 42.4 cmである。西面と北面に南横板と東横板を嵌め込む溝を作る。

箸・付木・漆器片 耕作溝・耕作土などから散在して出土した。付木は一端が焦げて炭化する。漆器片は木質部は腐植しており、漆膜の断片を採集したのみである。いずれも室町時代以降に属する。

(8) その他の出土遺物

焼土塊・焼土 包含層などから出土した。明橙色を中心とする色調を呈する。大部分は 1 cm以下の細粒であるが、スサとして用いられた植物遺体の痕跡があるものがある。壁土・屋根の葺土であったと考えられる。

炭片 各時代の遺構・包含層から出土した。細片が多く樹種の同定は実施していない。

植物遺体・昆虫遺体 (図 33、表 4) 井戸 10 の黒褐色シルト (中層)・オリーブ黒色シルト (下層)、溝 280 上層・下層、北西側拡張区 6 層・7 層の各層から土壌をサンプリングした。サンプル量はそれぞれ約 15 l、約 15 l、約 13 l、約 13 l、約 13 l、約 13 lを計った。土壌は 1・2 mmの篩で洗壤後選別し、実体顕微鏡で同定した。

井戸 10 からは、木本には庭木または栽培されるものと、山野のいたるところに生育するものが出土している。草本は主に道端・畑・山野のものと、湿地・水辺を好むものが出土している。一部ウリ・ゴマ・炭化コムギなど栽培されたものがみられた。その他特記するものとして昆虫の各部位片が多いこと、一部にハサミムシの尾鉋がみられたことが上げられる。

溝 280 からは、木片の炭化物以外では昆虫の上翅だけが出土している。

北西側拡張区からは、道端・畑に生育するエノキグサ、道端・野原に生育するイネ科と昆虫の上翅がみられたただけであった。

表4 井戸10 出土種実・昆虫遺体一覧表

木本

番号	和名	部位	科名	井戸10-中層(個数)	井戸10-下層(個数)	生育場所
1	ツガ	葉	マツ	1	2	山地・庭木
2	クワ科	果実	クワ	2	13	山地・庭木・栽培
3	カジノキ	果実	クワ	4	11	山野・栽培・庭木
4	ムベ	種子	アケビ		6	山地・庭木
5	アオツツラフジ	核	ツツラフジ		1	山野
6	モモ	核	バラ	2	1	栽培・庭木
7	スモモ	核	バラ	3	2	栽培・庭木
8	ウメ	核	バラ		1	栽培・庭木
9	アカメガシワ	種子	トウダイグサ	1	19	山野
10	センダン	核	センダン	1	1	山野
11	ノブドウ	種子	ブドウ	3		山野
12	ムラサキシキブ属	核	クマツツラ		2	山野・庭木
13	クサギ	核	クマツツラ	2	3	山野
14	トゲ			1	16	

草本

番号	和名	部位	科名	井戸10-中層(個数)	井戸10-下層(個数)	生育場所
15	ミゾソバ	果実	タデ		1	水辺
16	タデ科(三稜形)	果実	タデ	4	20	水辺・湿地・道端
17	タデ科(扁平形)	果実	タデ	29	114	水辺・湿地・道端
18	ハコベ属	種子	ナデシコ	5	4	道端・畑
19	アカザ属	種子	アカザ	14	7	道端・荒地
20	ヒユ属	種子	ヒユ	36	149	畑・道端
21	タガラシ	果実	キンポウゲ		1	水田
22	キイチゴ属	核	バラ	1		山野・道端
23	カタバミ属	種子	カタバミ	25	65	道端・畑
24	エノキグサ	種子	トウダイグサ	17	12	道端・畑
25	サンショウ	核	ミカン	1		山野
26	スミレ属	種子	スミレ	31	3	道端・山野
27	ウリ類	種子	ウリ		3	栽培
28	アリノトウグサ	核	アリノトウグサ	7	26	山野
29	チドメグサ属	果実	セリ	2	1	道端・庭・野原
30	アカネ科	果実	アカネ		3	山野・道端・湿地
31	キランソウ属	果実	シソ		4	野原・道端・土手
32	イヌコウジュ属	果実	シソ		3	山野
33	シソ属	果実	シソ	132	131	道端
34	ナス科	種子	ナス	6	10	山野・道端
35	ゴマ	種子	ゴマ		1	栽培
36	オオバコ	種子	オオバコ		2	道端・山野
37	タカサブロウ	果実	キク		15	湿地・水田
38	イネ科	穎	イネ		2	道端・野原
39	スズメノヒエ属	穎	イネ		1	原野
40	エノコログサ属	穎	イネ	24	90	道端・荒地・野原
41	炭化コムギ	果実	イネ	1		栽培
42	カヤツリグサ科(三稜形)	果実	カヤツリグサ	1	1	湿地・山野
43	カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ	1	5	湿地・山野
44	ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	1	9	水田・溝・湿地

昆虫

番号		部位	井戸10-中層(個数)	井戸10-下層(個数)	
45	昆虫	頭部・上翅・胸腹・脚	283 (ハサミムシ尾缺3)	385 (ハサミムシ尾缺9)	

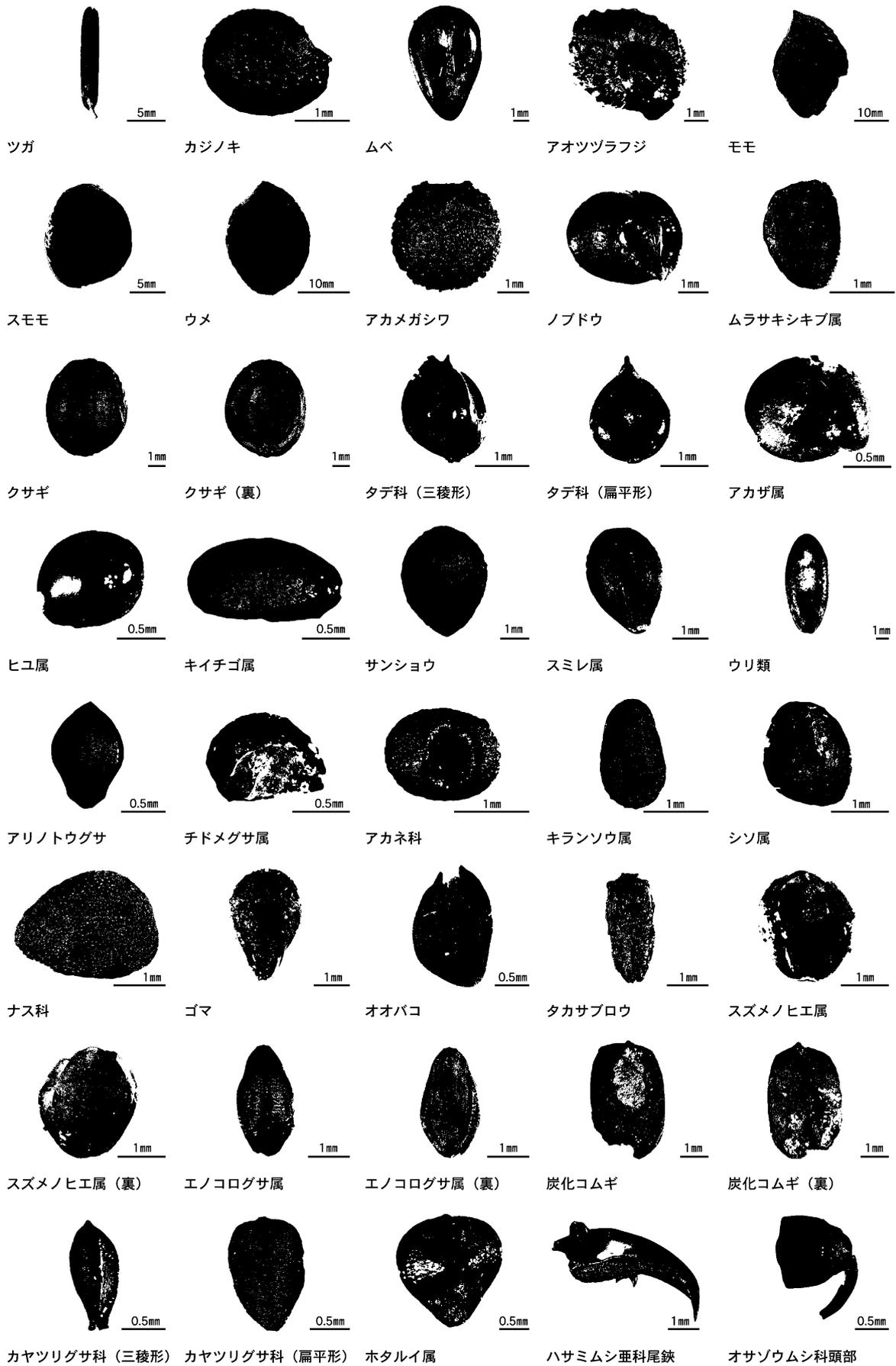


図 33 井戸 10 出土種実・昆虫遺体

5. ま と め

今回の調査では次のような調査地の歴史の変遷を明らかにすることができた。

弥生時代から古墳時代（図 34） 今回の調査で検出した最も古い遺構は弥生時代後期の溝 355 である。調査地北隣の 2 次調査では縄文時代にさかのぼる時期の尖頭器・石鎌が出土している。しかしながら、今回の調査では該当する時期の遺構・包含層を確認することができず、この時期の遺物が出土することもなかった。

なお、断ち割り部分の 8 層の堆積から調査地の地形環境を復元すると、約 24,000 年前は植物遺体が堆積する安定した状態にあったものが、その後は複数の不整合面の存在から旧河川の河道あるいは氾濫原となり、1 m 以上の厚さで砂礫が堆積していったことがわかる。溝 355 や弥生時代終末期から庄内式併行期の溝 354 は、一部に葉理が観察できることから流路と判断できる。

また、古墳時代前期から中期の遺構には溝 200・溝 280 などがある。溝 280 からは完形に近い状態で土器がまとまって出土したことから、近隣に集落などが所在している可能性も考えられる。西ノ京遺跡の調査では、これまでに遺構を検出した例は少なく、平安京下層に埋没している遷都以前の遺跡に対する知見を深めることができた。

平安時代前期（図 4・35） 調査地北隣の右京三条三坊三町北部の 2 次調査では、平安時代前期の建物・柵・井戸・溝・湿地状の落ち込みなどを検出している。今回の調査で検出した平安時代前期の井戸 10 は底をもつ建物 2（2 次調査）に付属すると考えられる。そして、土坑 275 は落込み 7（2 次調査）と同一の遺構である可能性が考えられた。礫敷 1 を構成する 5 層は落込み 7 の上面を覆うことから、落込み 7 と重複する 2 次調査の建物 3・柵 8・井戸 6・溝 10 は建物 2・井戸 10 よりも少し時期が新しくなる。

また、溝 67・溝 120 はそれぞれ三町の南北中心・東西中心に位置していることから 1 町内の区画溝、畦（小径）333 は三町の南北中心に位置していることから区画の小径として評価できる。三町の北部に建物・井戸が分布する一方で、今回の調査区南部では平安時代の遺構は柱穴列・耕作溝群のみである。試掘調査の成果や遺構検出面の状況から北東から南西方向に傾斜する地形であったことが明らかとなっているので、畦 333・溝 67 より南側は宅地内の耕作地として利用されていたのかもしれない。逆に三町全体としては検出した建物が必ずしも多くないことから、より高所である調査地東側に主要建物群が展開していたと推定できる。なお、遺構が北でやや東へ振る方位をとることもこの時期の特徴である。

平安時代中期から鎌倉時代（図 36） この時期の遺構はほとんど認めておらず、遺物も極少量しか出土していない。平安時代前期の邸宅が廃絶した後、放置され荒地となっていた状況が推定できる。

室町時代以降（図 37） 調査区ほぼ全面に多数の東西・南北方向の耕作溝を検出した。出土遺物から室町時代前期には調査地周辺が耕作地となっていたことがわかる。耕作地の区画である畦 333 は三条三坊三町の南北中心に位置しており、平安時代の小径がわずかな高まりとして痕跡を残していたと考えることができる。また、室町時代の遺物が出土遺物の中で一定の割合を占める

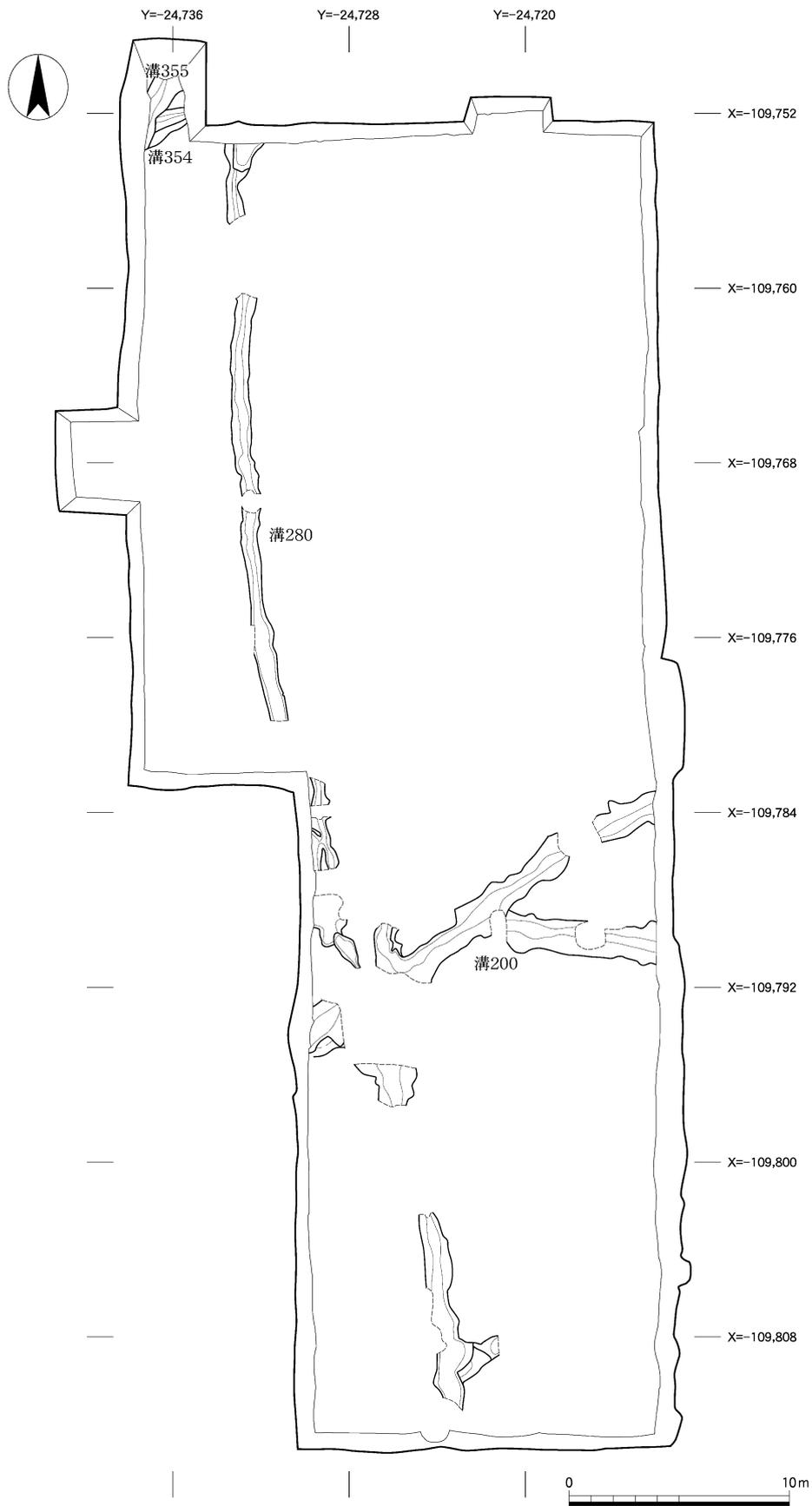


図34 遺構変遷図 弥生時代から古墳時代 (1 : 300)

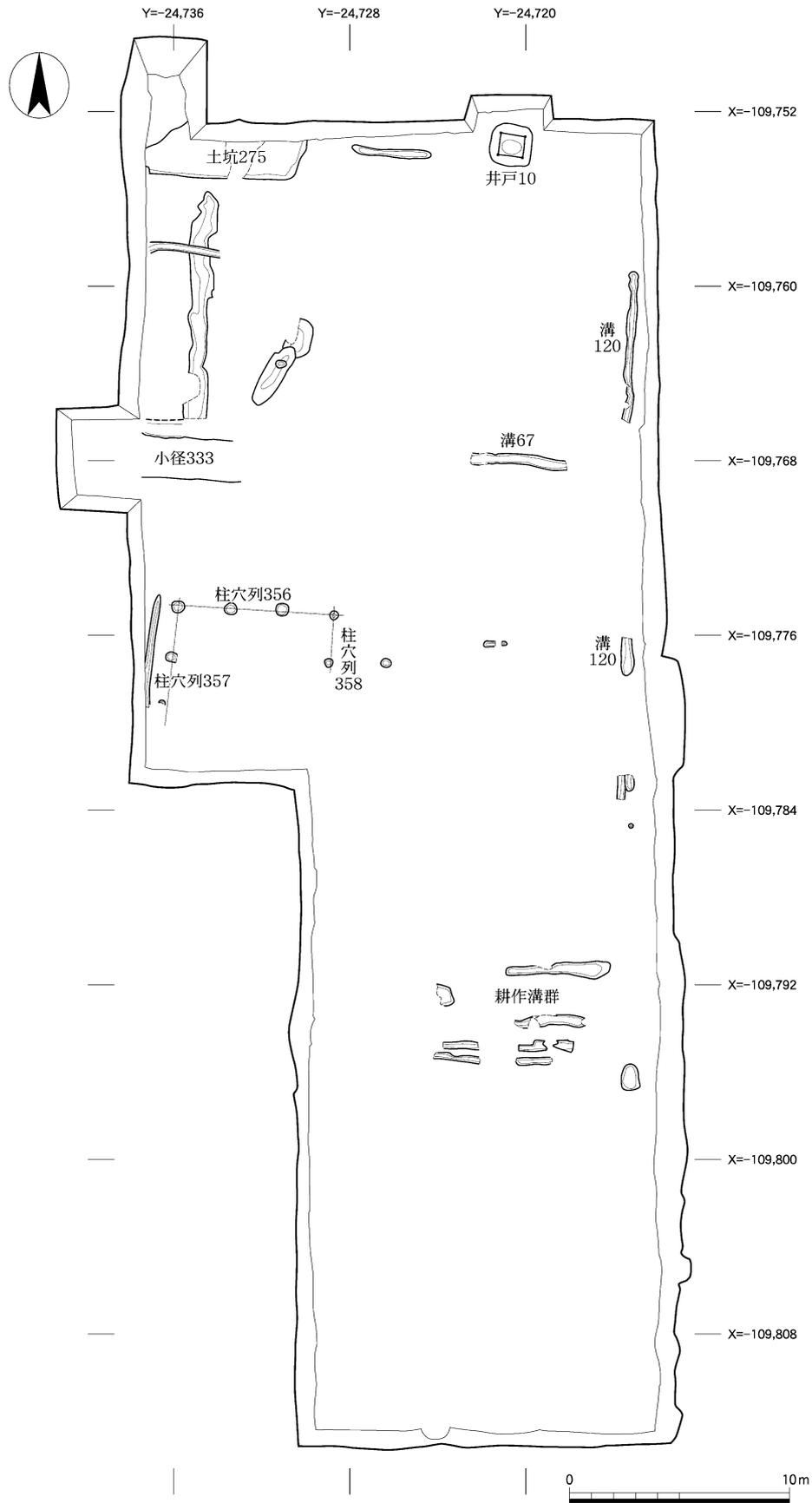


図 35 遺構変遷図 平安時代前期 (1 : 300)

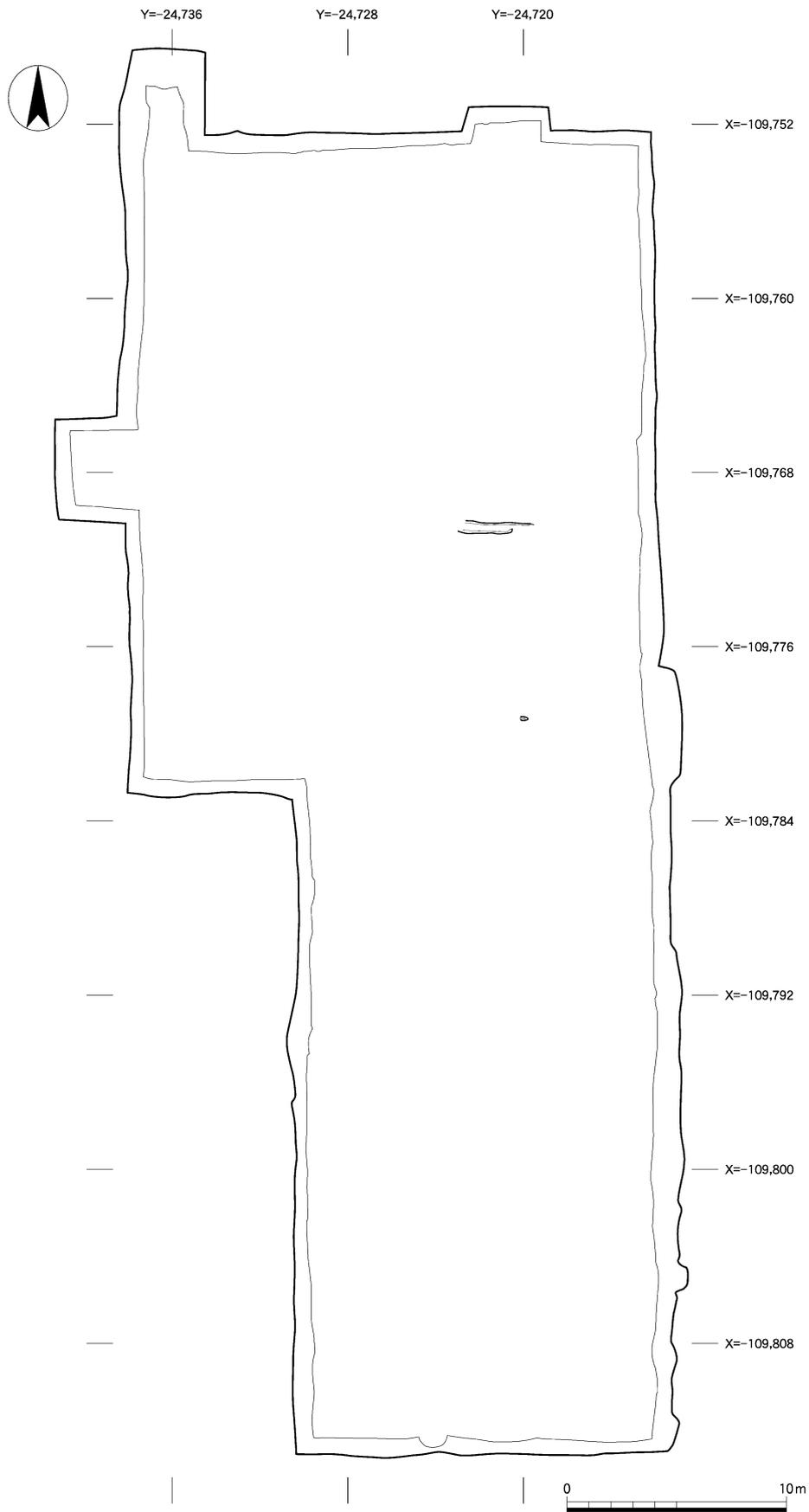


図 36 遺構変遷図 平安時代中期から鎌倉時代 (1 : 300)

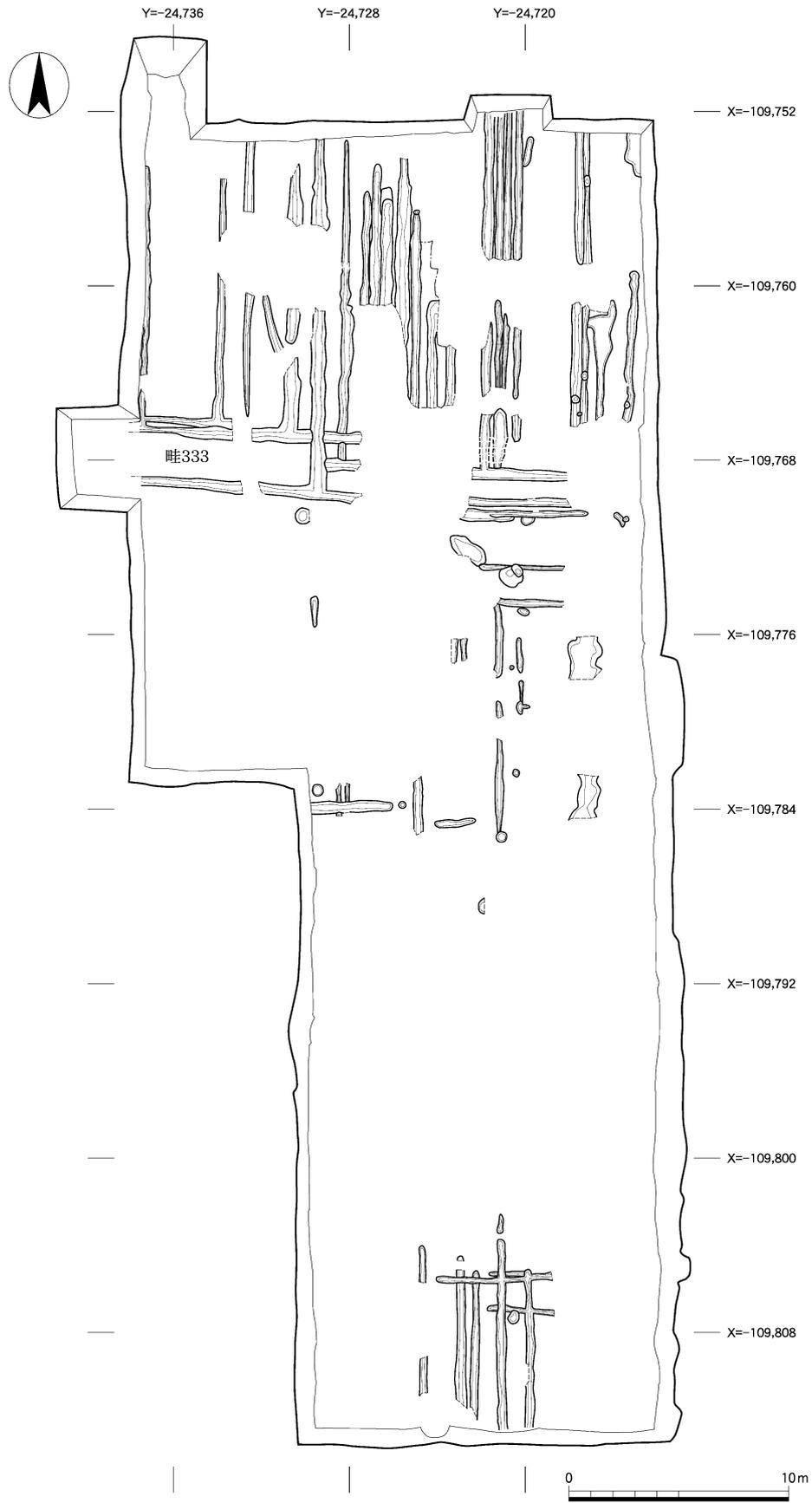


図 37 遺構変遷図 室町時代 (1 : 300)

ことから、近隣に住居や作業小屋があった可能性がある。

最下層の耕作土である4-4層は6層の小ブロックや小礫を含んでおり、花粉の組成が平安時代の特徴を示すことから、平安時代の包含層である5層・6層を母材として攪拌した耕作土と考えることができる。調査区東部・南部の大部分は4-4層により5層・6層および8層上部が削り取られたため、4層の下が8層となったものと推定できる。一方、調査区北西部は土坑275（2次調査の落込み7）などの影響で相対的に低い地形となっていたため削り取られることがなく、5層上面に4層が堆積したのであろう。なお、5層については室町時代の4-4層に伴う床土である可能性もあるが、看見の限りでは人為的に礫敷を床土として形成する事例がないので床土とする解釈はとらなかった。

1層から4-3層はすべて耕作土である。イネのプラントオパールや花粉を多量に含むという分析結果から主に水田として利用されていたことが判明した。小礫を含んでいたり、氾濫堆積物を挟在する状況が明瞭に観察できる土層があることから、氾濫堆積物を母材にしていることがわかる。いずれの土層も西側が厚く、また、西側から東側に向けて傾斜していることから、調査地西側を流れていた紙屋川が氾濫したときに供給された堆積物に基づくことは明らかである。20世紀前葉に付け替えられる前の紙屋川は天井川となっていたが、1層・2層に含まれる礫は3層・4層よりも大きいことから、時代が下がるにともない洪水の規模が激しくなったことが推定できる。しかし、度重なる洪水にもかかわらず、室町時代以降、工場が建設される近代に至るまで、耕作地としての利用が続けられた。

今回の調査では、西ノ京遺跡の構造や平安京左京三条三坊三町の宅地利用についての新たな知見を広げることができた。また、土層の堆積や土壌の科学的分析により、調査地の地形環境を詳細に検討することができた結果、地形環境が遺跡の立地・利用に大きな影響を与えていたことが判明したことも大きな成果である。

註

- 1) 歴史的状況については次の文献を参考にした。京都市編『京都の歴史』学芸書林 1968～1976年。『京都市の地名』平凡社 1979年。『平安京提要』角川書店 1994年など。
- 2) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年。
- 3) 註2)に同じ。
- 4) 「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- 5) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-24 平安京右京三条二坊十一町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年。
- 6) 「平安京右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979年。
- 7) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-19 平安京右京三条二坊十三町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年。
- 8) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-1 平安京右京三条二坊十四町跡』（財）京都市埋蔵

- 文化財研究所 2006 年。
- 9) 「平安京右京三条二坊 2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994 年。
 - 10) 「平安京右京三条二坊十四町跡 島津メディカルプラザ新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内 5 遺跡』（財）古代学協会 2009 年。
 - 11) 「平安京右京三条二坊」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 年。
 - 12) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001- 6 平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年。
 - 13) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003- 8 平安京右京三条二坊十五町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年。
 - 14) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005- 5 平安京右京三条二坊十五町跡・三坊二町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005 年。
 - 15) 「平安京右京三条二坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991 年。
 - 16) 「右京三条二坊（2）」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983 年。『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 21 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年。
 - 17) 『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 21 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年。
 - 18) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 10 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990 年。
 - 19) 「平安京右京三条三坊」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993 年。
 - 20) 『平安京右京三条三坊六町・西ノ京遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 2007 年。
 - 21) 「平安京右京三条三坊九町跡 島津本社内新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内 5 遺跡』（財）古代学協会 2009 年。
 - 22) 「HR - 145」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990 年。
 - 23) 試掘調査の成果については、文化財保護課の西森正晃氏にご教示を得た。
 - 24) 河川の氾濫にともなう堆積物の土層を B 層、これを母材として耕作による攪拌などの行為により土壌化がすすんだ土層を A 層と呼称する。
 - 25) 調査段階では 6 - 1 層を 6 層、6 - 2 層を 7 層としていたが、土壌構造の分析から一連の堆積であることが判明したため、呼称を変更し、7 層は欠番とする。
 - 26) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新

- 27) 註 26) に同じ。
- 28) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 年。
- 29) 『平安京古瓦図録』平安博物館 1977 年。
- 30) 上原真人「前期の瓦」『平安京提要』角川書店 1994 年。
- 31) 『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年。

付論 1 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

平安京右京三条三坊では、今回の調査地北隣の2次調査で、平安時代前期の建物、柵、井戸、溝などが見つかり、当時は宅地として利用されていたことが確認されている。今回の調査区は2次調査区の南側に位置し、弥生時代後期から古墳時代前期の溝、平安時代前期の溝・井戸、室町時代の耕作に伴うとみられる溝が検出されている。今回の分析調査は、調査区北部で検出された平安時代前期の性格不明の土坑 275 と、その上位層準の礫敷 1 を覆う堆積物までの形成・埋没過程を把握することを目的として、土壌微細形態学的分析（軟X線写真・土壌薄片観察）を実施する。また、古墳時代前期の溝埋土、平安時代前期の遺構埋土とその上位を覆う中・近世の堆積物を対象に、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析を実施し、古墳時代以降の古環境に関する情報を得る。

(2) 調査地点の層序

分析調査は、古墳時代前期から中期の溝 280、平安時代前期の土坑 275、礫敷 1 の堆積状況が確認される調査区北部で実施する。調査地点の位置および調査地点における堆積層の累重状況を図 38 に示す。以下に堆積層の層相について記載する。

1-1A・1-1B層：灰オリーブ色を呈する正級化するトラフ形斜交葉理をなす砂礫～細粒砂からなる氾濫堆積物である。2回の堆積ユニットが確認されるが、いずれも上部からの人為的攪拌により初生の堆積構造が不明瞭となっている。地層の外形は下に凸レンズ状をなし、級化することを合わせ考えると、堤防決壊堆積物（crevasse-splay deposit）と判断される。

1-2層：灰色を呈する細礫・砂混じり泥からなる。著しく攪拌されており初生の堆積構造は不明瞭となっている。上部で腐植がやや集積している。また、最下部には氾濫堆積物と判断される細礫混じり砂が堆積する。層相から耕作土と推定される。

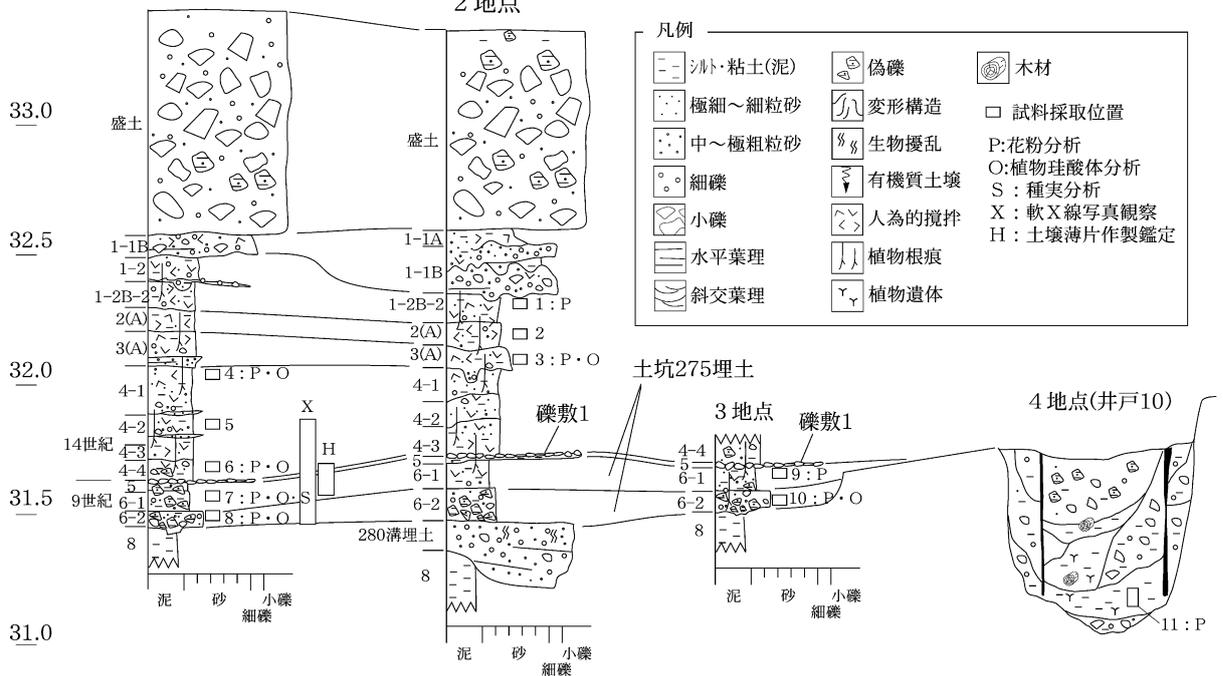
1-2B-1・2層：灰色を呈する細礫・砂混じり泥から泥混じり砂礫からなる。著しく攪拌されており、初生の堆積構造は不明瞭となっている。層相から耕作土と推定される。

2(A)層：暗灰色を呈する砂混じり泥からなる。著しく攪拌されており、初生の堆積構造は不明瞭となっている。

3(A)層：灰色オリーブ色を呈する砂混じり泥からなる。上部は著しく攪拌されているため、初生の堆積構造は不明瞭となっているが、最下部には氾濫洪水堆積物の示相堆積構造である逆級化成層（増田・伊勢屋,1985）をなす極細粒砂～中粒砂の積層が確認される。これらの層相から、本層は氾濫堆積物を母材とする耕作土と推定される。なお、本層より上位堆積物は上方粗粒化していることから、形成期間を通じて、調査区近辺の基準面が上昇傾向にあったことが推定される。

標高(m)

33.5



標高(m)

33.5

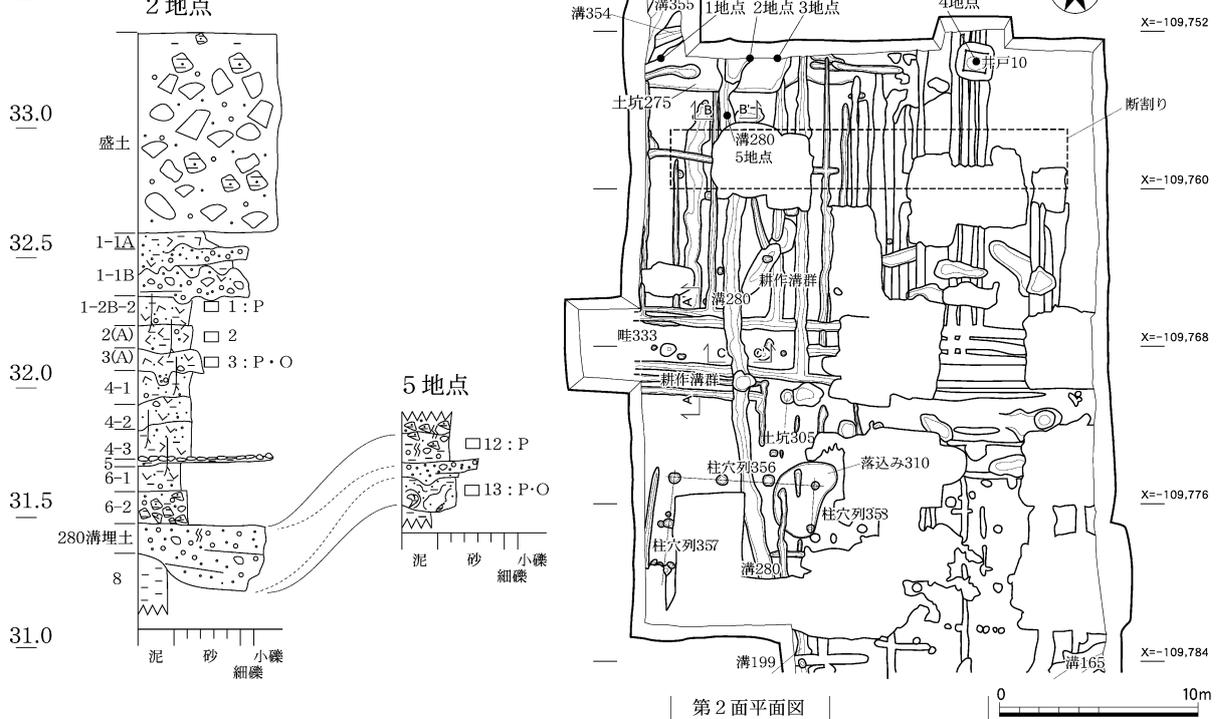


図38 調査地点の模式断面図

4-1～4-3層：灰色～暗灰色を呈する、著しく攪拌された小礫・細礫・砂混じり泥ないし砂質泥ないしその偽礫からなる。各層の層理面には、不連続な葉理構造を残す細粒砂の薄層を挟在する。

4-4層：暗灰色を呈する、著しく攪拌された小礫・細礫混じりの偽礫からなる。偽礫は垂角状をなし、その大きさは不揃いであり、上部に向けて細粒化する。石敷遺構を不整合に覆っている。

5層：上面に細礫・小礫からなる礫を含む、見かけ上塊状をなす黒色を呈する腐植質に富む砂質泥からなる。礫敷1の構成層である。

6-1層：塊状をなす、黒色を呈する小・細礫・砂混じりの腐植質泥からなる。

6-2層：土坑275を埋積する堆積物である。黒色を呈する腐植質砂質泥の偽礫、小礫・細礫および遺構のベースをなす8層の明灰色泥の偽礫からなり、間隙密度が高い。下位層との層理面は明瞭であり、遺構掘削直後に埋め戻された堆積物と判断される。

8層：古墳時代前期および平安時代の遺構のベースをなす扇状地性堆積物である。分析地点の側方では上下に凸な外形をなすトラフ型・プラナー型斜交葉理をなす砂礫の積層により形成されたロウブの可能性のある微高地、分析地点では微高地側方の凹地に積層した泥質堆積物からなる。8層の形成および離水時期については、本層上面において平安時代前期および古墳時代前期の遺構が検出されていることから古墳時代前期以前と判断される。なお、調査区北西隅で弥生時代後期の遺物を含む流路が形成されている。

溝280埋土：古墳時代前期から中期の溝埋土は大きく3層に区分される。便宜的に上位より、埋土1層・埋土2層・埋土3層と呼ぶ。埋土1層は遺構が構築されているベースをなす堆積物に由来する砂礫や泥からなる偽礫、細・小礫が混じる、著しく擾乱されている黒褐色有機質泥からなる。埋土1層は土坑275構築時に埋土2層上部まで削平されている。埋土2層は逆級化成層をなす細粒砂～砂礫からなり、溝底面深度が深くなる北側で厚く堆積する。埋土1層に覆われる場所では、埋土2層上部は著しく擾乱されており、初生の堆積構造が不明瞭となっている。本層は調査区北側より流入した氾濫堆積物と推定される。埋土3層は腐植質に富む泥混じり砂からなり、下部には溝掘削時のベース堆積物に由来する垂角状をなす偽礫が散在する。なお、本層は全体的に流動変形しており、下部の偽礫も粘塑性変化している。埋土2層形成期には水位上昇傾向にあったことから、その時期に変形している可能性がある。この変形構造については地震動による水底下の堆積物の変形構造（Matsuda,2000）に類似する。

（3） 試料

各分析試料の採取位置を図38に示す。

（4） 分析方法

1) 軟X線写真撮影

4-3層下部から8層までの不攪乱試料を厚さ1cmまで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧

50kvp、電流 3 mA、照射時間 270 秒の条件において軟 X 線写真撮影を実施した。撮影は元興寺文化財研究所の協力を得た。軟 X 線写真の記載は、堆積物について宮田ほか (1990)、土壌について佐藤 (1990a・b)、森ほか (1992)、成岡 (1993) などを参考とした。

2) 土壌薄片

4-4 層～6-1 層までの不攪乱試料を、80℃で 1 日間乾燥した後、樹脂 (ペトロポキシおよびシアノポンド) で固化を行い、片面の研磨を実施した。固化および研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ 70 μ m 程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーガラスを接着した。土壌薄片の記載は、久馬・八木久訳監修 (1998) の「土壌薄片記載ハンドブック」を参考とした。

3) 花粉分析

試料約 10g を秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス (無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液) 処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で産出率を算出し図示する。

4) 植物珪酸体分析

各試料について乾燥重量を秤量した後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と堆積物 1g あたりの含量 (同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算) の一覧表、および含量密度の層位分布図として示す。この際、100 個/g 以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める (100 単位にする)。

5) 種実分析

試料 300 cc (509.18g) を水に浸し、粒径 0.5 mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。抽出された種実を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材と土器は 70℃ 48 時間乾燥後の重量と最大径を併記する。分析後は、種実等 (炭化材、土器以外) を分類群毎に容器に入れ、70% エタノール溶液で液浸し保管する。

(5) 結果

1) 軟X線写真

試料および軟X線写真と拡大写真を図 39 に示す。X線写真は、明るい部分がより高い密度の物質（ここではおもにシルトと砂・礫、酸化鉄や炭酸鉄）からなり、暗い部分が低密度の物質（水分の多い粘土、細粒のシルト、植物性の炭片、植物遺体、孔隙など）からなる。以下に調査地点の堆積構造の特徴について記載する。

4-3層：密度は低く全体的に暗く、相対的に密度の低い堆積物と判断される。3 cm以下の垂角状をなす、密度の異なる偽礫、および細礫・砂が不規則に配置する。著しく攪拌されている。下位層との層界は明瞭であり、最下部に砂粒が層状に部分的に積層しているが、攪拌により不明瞭となっている。上位方向から連続する垂直方向に伸びる数mm以下の植物根痕が密に認められる。

4-4層：本層は上部で明るく、下部で暗く、堆積物の密度が層位的に異なっている。上部を4-4a、下部を4-4bとする。4-4a層は密度は均質であり、細礫混じり砂質泥からなる。下位の4-4bが著しく攪拌された堆積物と判断され、当該期の表土をなしていた堆積物の可能性がある。4-4b層は3 cm以下の垂角状～垂球状をなす、密度の異なる偽礫、および細礫・砂が不規則に配置する。4-4a～4-4b上位方向から連続する垂直方向に伸びる数mm以下の植物根痕が密に認められる。下位の礫敷構成である5層との層界は明瞭である。これらのことから、4-4層は人為的な客土の可能性が高いと考えられる。

5層：今回の試料中で最も密度の高い層準であり、上部に石が取り込まれている。水平方向に不明瞭な葉理状の構造が確認される。また、本層でも上位方向から連続する植物根痕が確認されるが、密度は相対的に低い。

6-1層：下部から上部にかけて密度が高くなる。下部では間隙に画された3 cm以下の偽礫ないしブロック土が確認される。また、小・細礫・砂が混じる。上部では密度が均質になる。植物根痕の密度は上位の5層に比較して高く、本層準形成期に生育していた植物由来のものも多く含まれていると判断される。これらのことから、本層は下位の6-2層形成期後に地表をなしていた堆積物（土壌）と推定される。

6-2層：砂質泥の偽礫、小礫・細礫および遺構のベースをなす8層の明灰色泥からなる、異なる大きさの偽礫が不規則に配置する。本層が土坑 275 覆土であることを踏まえると、遺構掘削直後に埋め戻された堆積物と判断される。下位層との層理面は明瞭であり、写真左側では遺構掘削時のものと判断される8層の偽礫が認められる。

8層：比較的な均質な堆積物からなる。

2) 土壌薄片

土壌薄片写真を図 40 に示す。4-4層ではチャンネル孔隙が発達する。5層では水平方向に伸びる面状孔隙の積層が顕著である。3では孔隙の発達認められず、壁状構造をなす。6-1層上部で認められる孔隙は、チャンネル孔隙である。6-1層下部は6-1層最上部と同様の構造をなす。

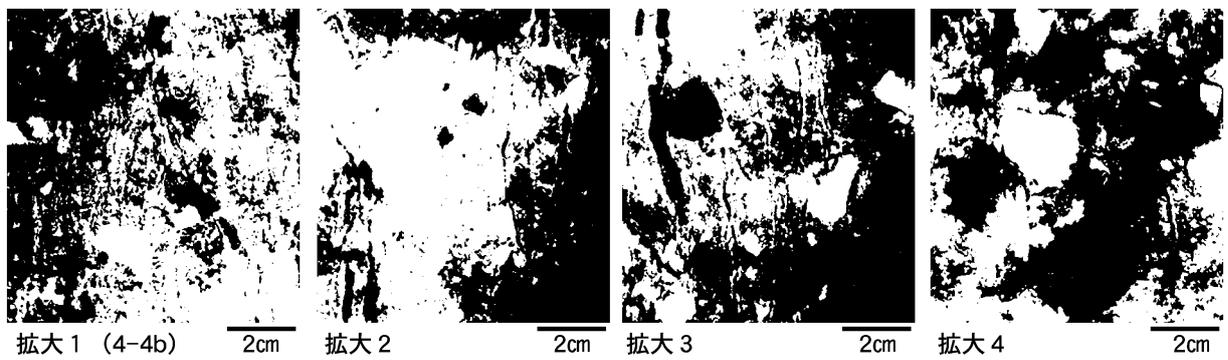
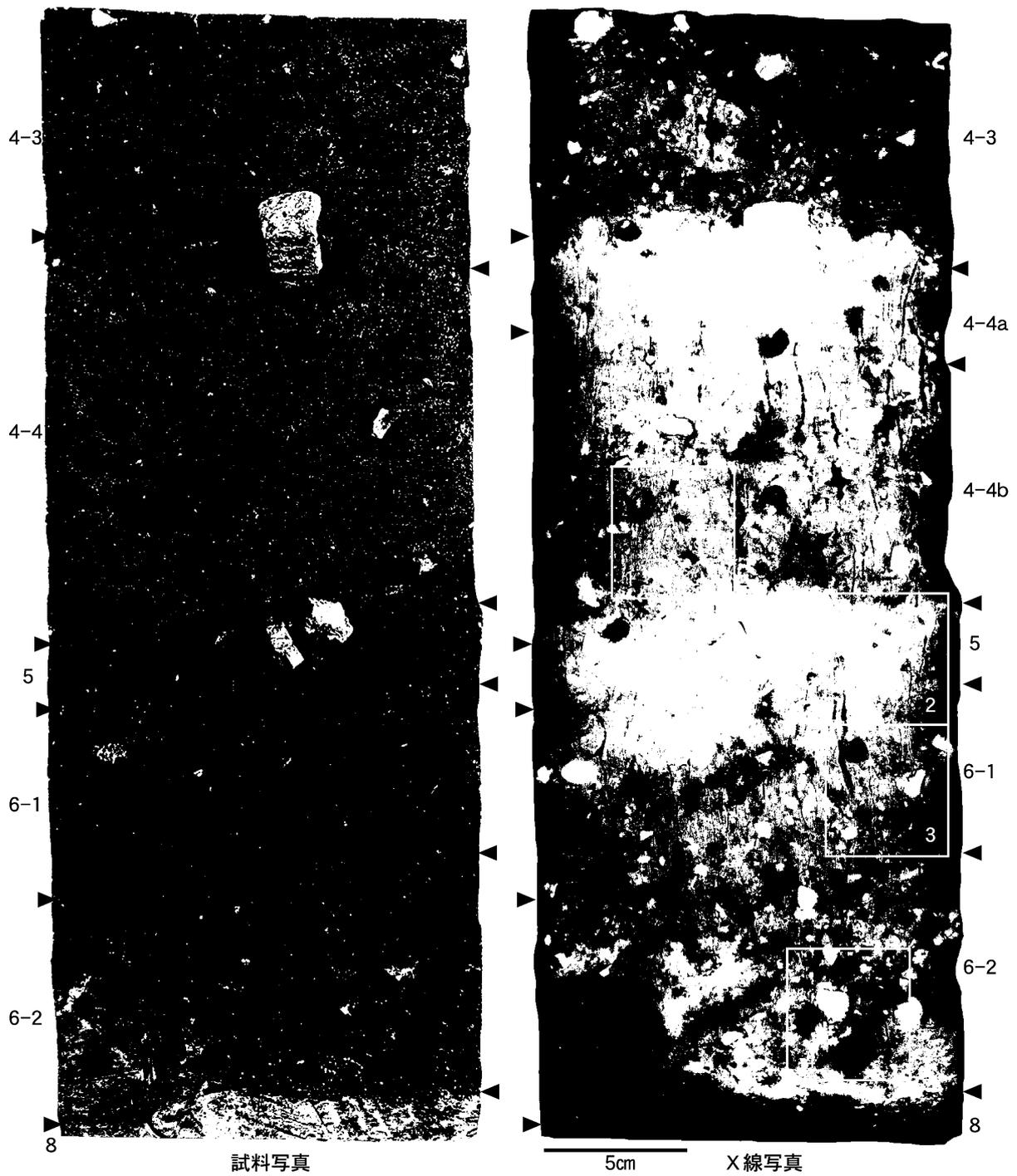
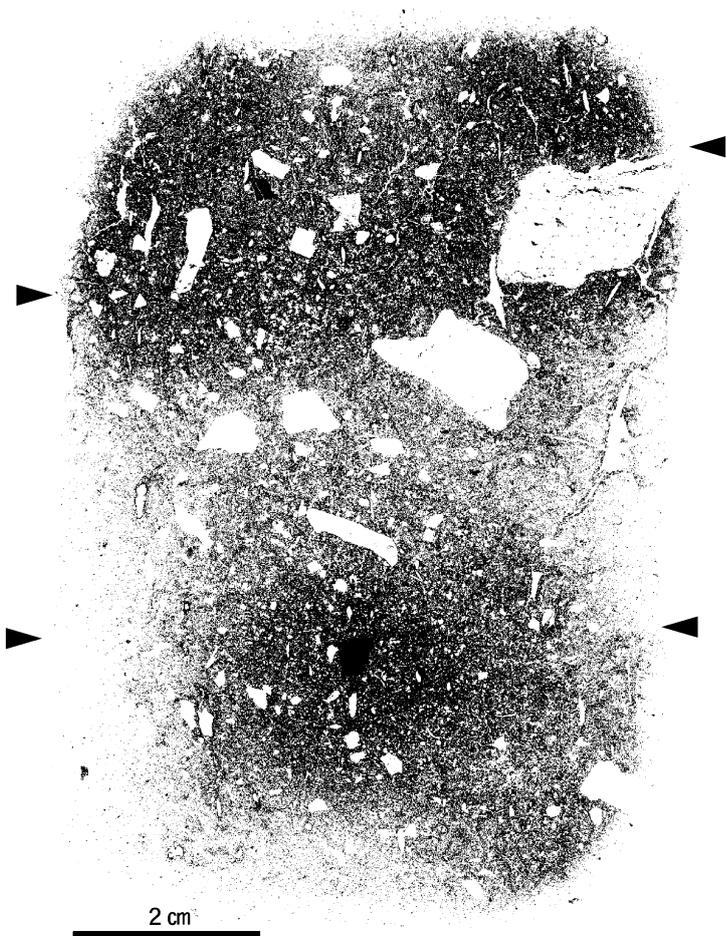


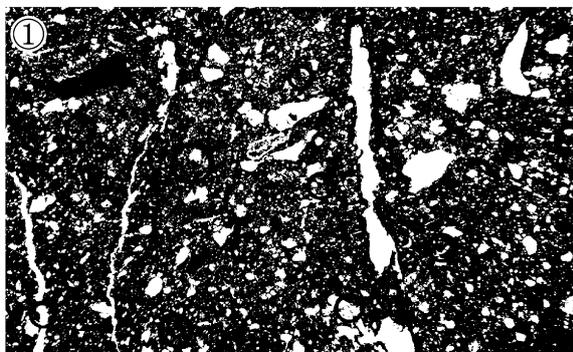
図 39 軟X線写真



4-4層
チャンネル孔隙が発達する(拡大①)。

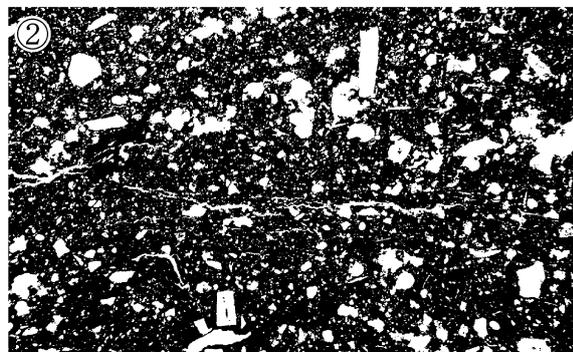
5層
水平方向に伸びる面状孔隙の積層が
顕著である(拡大②)。

6-1層
孔隙の発達が認められず、壁状構造を
なす。認められる孔隙は、チャンネル
孔隙である(拡大③)。下部では孔隙
において不純粘土質ないしシルト質ペ
ドフィチャーが被覆・充填物もしくは
挟在物として認められる(拡大④)。



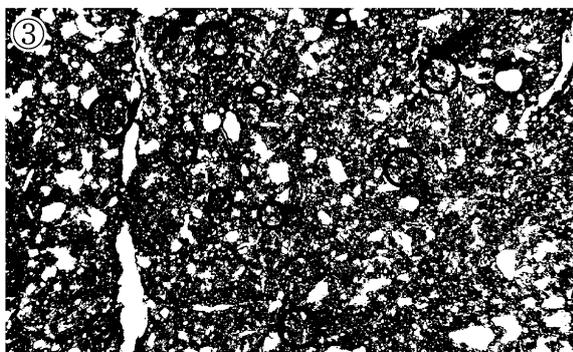
4-4層

2 mm



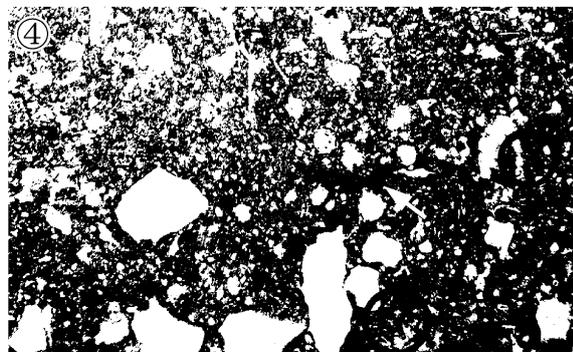
5層

2 mm



6-1層上部

2 mm



6-1層下部

2 mm

図40 土壤薄片写真

6-1層下部では孔隙において不純粘土質ないしシルト質ペドフィチャーが被覆や充填物もしくは挟在物として認められる。4-4層～6-1層の細粒質物質は、分解した有機物に由来すると思われる褐色を呈す。層内には炭化物片が多く含まれる。その他の植物組織残渣は認められない。細粒質物質には、微細な黒班粒子として観察される点状物を非常に多く含む。この点状物には、微粒炭に由来するものを多く含むと推定される。細粒質物質の復屈折ファブリックは、4-4層～6-1層上部で未分化b-ファブリックないし点斑状をなす。6-1層下部では、一部で孔隙ないし粒子に沿ったファブリックが観察される。

3) 花粉分析

結果を表5、図41に示す。下位層準ほど花粉化石の保存が悪い傾向にあり、特に古墳時代の溝280埋土2層（5地点試料12）は花粉化石が少ない。一方、中世以降の試料（試料番号1～6）の保存状態は概ね良好である。以下、時代別に傾向を述べる。

古墳時代前期から中期

溝280埋土3層（5地点試料13）は、花粉化石の保存状態が悪く、ほとんど検出されない。溝埋土1層（試料12）も花粉化石の保存状態は不良である。モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属、アカガシ属が産出するが、際だって多産する種類は認められない。草本花粉は木本花粉に比べて低率であり、イネ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科などがみられる。

平安時代前期

6-1層・6-2層（1地点試料7・8、3地点試料9・10）と井戸10埋土（4地点試料11）が相当する。ツガ属、マツ属が多く、次いでモミ属、スギ属が多い。草本花粉は木本花粉に比べて低率で、イネ科やカヤツリグサ科、タンポポ科などが検出される。栽培種としては、イネ属、ベニバナ属、ソバ属がみられる。井戸の組成はやや異なり、イネ科をはじめとする草本花粉の割合がやや高い。また、コナラ属やアカガシ属の割合がやや高い。

室町時代

4-4層（1地点試料6）は、木本の産状は上記した6-1層・6-2層と類似する。草本花粉は割合が増加し、イネ科が多産ようになる。イネ科には栽培植物のイネ属花粉が多数含まれる。水生植物の参照も・アカウキクサ属なども産出する。

4-1層・3(A)・1-2B-2層（1地点試料4、2地点試料1・3）では、木本花粉をみるとマツ属が急増し優勢となる。モミ属、ツガ属、スギ属、アカガシ属等が検出されるが、低率である。草本花粉はイネ科の割合が高く、栽培植物であるイネ属の花粉も含まれる。栽培植物は、他にソバ属、キュウリ属、ベニバナ属が検出される。サンショウモ、アカウキクサ属といった水生植物も検出される。

4) 植物珪酸体分析

結果を表6、図42に示す。時代毎の傾向を述べる。

古墳時代前期から中期

溝280埋土3層（5地点試料13）は約5万個/gの植物珪酸体が検出される。種類不明のもの

表5 花粉分析結果

種 類	上段：地点 下段：試料名											
	2地点		1地点				3地点		4地点	5地点		
	1	3	4	6	7	8	9	10	11	12	13	
木本花粉												
マキ属	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	
モミ属	6	6	7	18	38	38	12	76	13	29	15	
ツガ属	11	11	14	21	61	59	33	67	32	15	5	
トウヒ属	-	2	-	2	2	1	1	1	-	-	-	
マツ属複維管束亜属	91	72	170	84	39	56	9	11	22	10	-	
マツ属(不明)	59	41	33	15	43	34	34	31	47	44	8	
コウヤマキ属	-	-	-	4	-	3	2	-	2	1	1	
スギ属	3	-	2	27	21	30	7	7	27	39	3	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ヤマモモ属	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
クルミ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
クマシデ属-アサダ属	4	-	3	1	-	-	-	1	3	5	-	
カバノキ属	4	-	1	2	-	1	-	-	5	3	-	
ハンノキ属	2	1	2	-	2	-	-	-	-	1	-	
ブナ属	-	-	-	4	-	-	-	3	2	1	1	
コナラ属コナラ亜属	14	-	6	8	5	4	2	7	21	38	1	
コナラ属アカガシ亜属	3	-	1	15	-	1	1	-	28	15	-	
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
シイ属	2	-	-	2	-	-	-	-	-	3	-	
ニレ属-ケヤキ属	1	-	1	2	1	4	-	3	3	-	-	
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ウルシ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ツツジ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カキノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
トネリコ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボタノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
草本花粉												
オモダカ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
イネ属	131	8	22	119	-	3	-	3	9	5	-	
イネ科	340	52	72	185	21	17	11	48	87	28	4	
カヤツリグサ科	14	1	4	3	2	6	1	7	5	-	-	
イボクサ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ミズアオイ属	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
ギシギシ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	4	8	-	2	5	3	1	2	-	-	-	
ソバ属	10	1	14	-	-	2	-	-	2	-	-	
アカザ科	-	-	-	-	-	1	-	-	2	1	-	
ナデシコ科	2	-	3	2	2	2	-	-	-	-	-	
キンボウゲ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
アブラナ科	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ワレモコウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
フウロソウ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
キカシグサ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アリノトウグサ属	-	-	-	-	1	-	3	6	12	3	-	
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	
ヤエムグラ属-アカネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
キュウリ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ベニバナ属	1	7	8	-	-	1	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	3	-	-	-	1	1	-	2	19	10	-	
キク亜科	2	-	1	1	-	2	1	-	2	6	4	
タンポポ亜科	1	-	4	-	6	11	2	6	4	9	-	
不明花粉	1	-	8	18	9	2	3	6	9	6	-	
シダ類孢子												
ヒカゲノカズラ属	5	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	
ゼンマイ属	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
イノモトソウ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
サンショウモ	-	7	3	4	-	-	-	-	-	-	-	
アカウキクサ属	1	6	20	6	-	-	-	-	-	-	-	
他のシダ類孢子	175	49	35	144	343	230	205	252	191	198	43	
合 計												
木本花粉	205	133	241	207	214	233	102	207	209	209	35	
草本花粉	512	78	131	316	39	50	19	75	146	62	8	
不明花粉	1	0	8	18	9	2	3	6	9	6	0	
シダ類孢子	183	62	59	155	345	232	205	252	191	198	43	
総計(不明を除く)	900	273	431	678	598	515	326	534	546	469	86	
その他												
クンショウモ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
鞭虫卵	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	

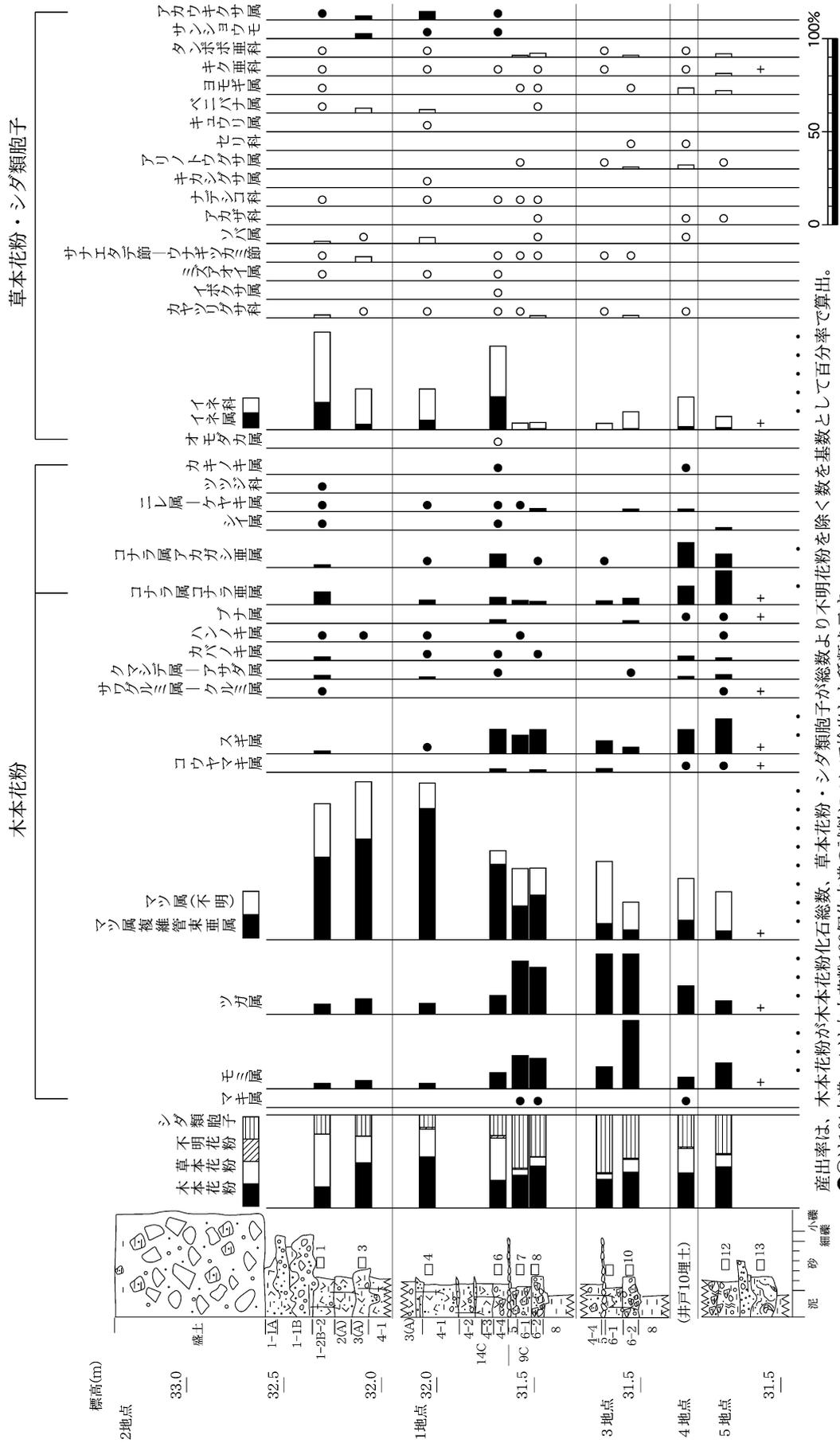


図 41 花粉化石群集の層位分布

産出率は、木本花粉が木本花粉化石総数、草本花粉が総数が総数として百分率で算出。
●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表6 植物珪酸体分析結果

種 類	上段：地点 下段：試料名							
	2地点	1地点					3地点	5地点
	3	4	6	7	8	10	13	
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	400	12,500	300	900	-	-	-	
タケ亜科ネザサ節	100	1,300	1,500	2,000	500	900	300	
タケ亜科	1,800	38,500	42,400	45,800	23,200	47,900	23,000	
ヨシ属	-	300	900	900	500	1,400	-	
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	300	600	-	-	-	
ウシクサ族スキ属	<100	2,400	1,200	600	1,100	1,200	500	
イチゴツナギ亜科	500	2,400	1,200	600	-	700	-	
不明キビ型	200	6,600	9,000	5,700	4,000	5,200	1,600	
不明ヒゲシバ型	<100	2,400	4,300	2,300	1,600	6,100	800	
不明ダンチク型	200	4,800	1,200	6,300	2,600	4,900	1,100	
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	500	5,600	1,500	1,100	-	-	-	
タケ亜科ネザサ節	200	800	3,400	1,700	500	2,600	500	
タケ亜科	700	8,500	24,100	19,700	21,100	23,700	8,800	
ヨシ属	-	300	900	600	300	-	-	
ウシクサ族	-	-	900	300	300	700	300	
シバ属	-	500	300	-	-	-	-	
不明	1,600	15,400	16,100	10,600	6,100	12,000	5,700	
合 計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,200	71,100	62,500	65,500	33,500	68,400	27,400	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	2,900	31,000	47,300	34,000	28,300	39,000	15,300	
総 計	6,200	102,200	109,800	99,500	61,800	107,400	42,700	

数値は、含量密度（個/g）を示す。含量密度は、10の位で丸め100単位で表示する。<100は100個/g未滿を示す。

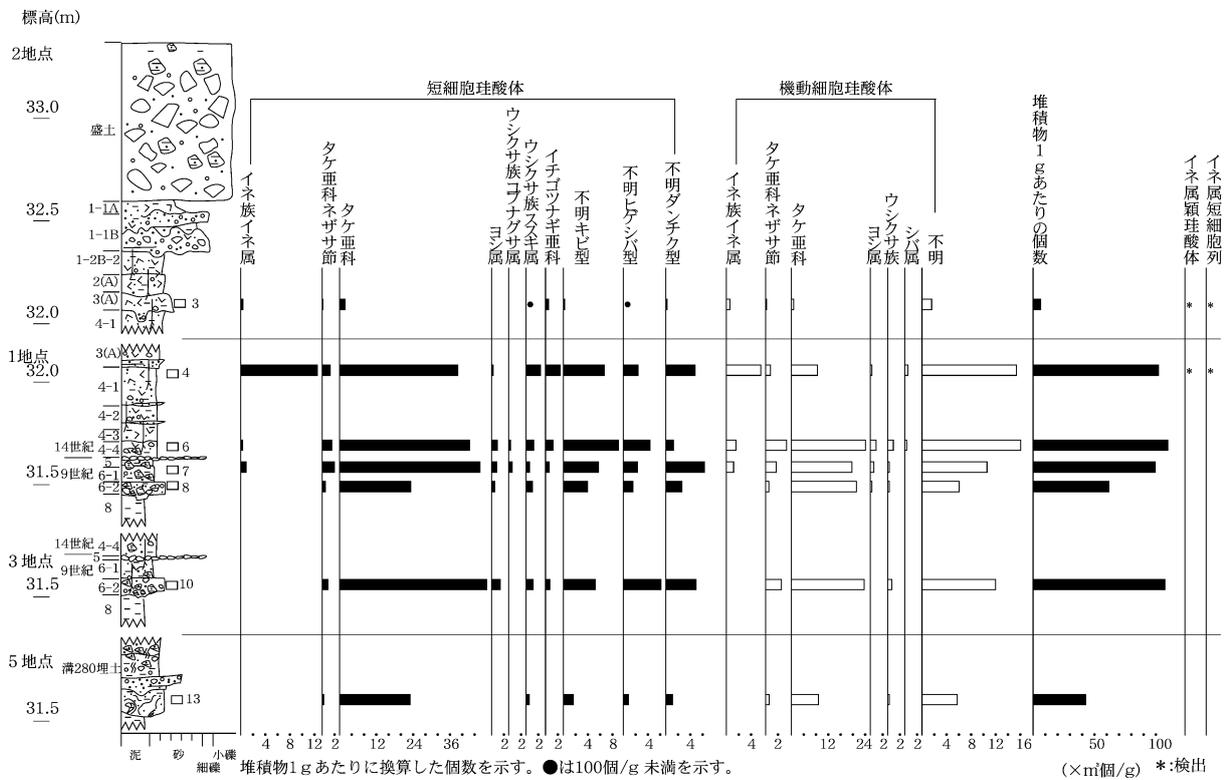


図42 植物珪酸体含量の層位変化

表7 種実分析結果

分類群	和名	学名	部位	状態	1地点(土坑275) 7	備考
木本	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i> Thunb.	種子	破片	1	0.23g,最大径9.5mm
	炭化材				83	
草本	カヤツリグサ科	Cyperaceae	果実	完形	4	
	タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.	果実	破片	1	
	エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> L.	種子	破片	8	
不明炭化物					1	最大径2mm 1.69g,最大径13mm
昆虫遺体					4	
土器					10	

注) 表中の数字は、土壌300g(509.18g)に含まれる種実などの個数を示す

を除けば、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体共にタケ亜科が優勢である。タケ亜科以外ではウシクサ族がみられる。

平安時代前期

6-1層・6-2層（1地点試料7・8、3地点試料10）が相当する。植物珪酸体量や10万個/gを越える試料もあり、古墳時代の堆積物より含量が多い。種類不明のものを除けば、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体共にタケ亜科が優勢である。タケ亜科以外ではヨシ属、ウシクサ族などがみられる。なお、6-1層からはイネ属が少量であるが検出される。

室町時代

4-4層（1地点試料6）では植物珪酸体量が10万個/gを越える。種類不明のものを除けば、下位と同様にタケ亜科が優勢である。タケ亜科以外ではヨシ属、ウシクサ族、などがみられ、イネ属の植物珪酸体も検出される。イネ属の含量は短細胞珪酸体が3百個/g、機動細胞珪酸体が1千5百個/gと少ない。

4-1層（1地点試料4）では、植物珪酸体量が10万個/gを越える。種類不明のものを除けば、下位と同様にタケ亜科が優勢であるが、本層準では栽培種のイネ属の含量が増加する。イネ属の含量密度は、短細胞珪酸体が1万2千個/g、機動細胞が5千6百個/gと増加する。また、イネの穎い由来する珪酸体や、イネ属の珪酸体を含む組織片もみられる。

3(A)層（2地点試料3）では植物珪酸体含量が極端に少なくなり6千個/g程度となる。イネ属やタケ亜科などが検出されるが、いずれも少ない。

5) 種実分析

結果を表7に示す。被子植物4分類群（常緑広葉樹林内の林床に生育する常緑低木-小高木のヒサカキ、カヤツリグサ科、湿生草本のタガラシ、エノキグサ）14個の種実の他に、炭化材（最大径9.5mm）、不明炭化物、昆虫、摩耗した土器（最大径13mm）が検出された。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

<木本>

ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunb.) ツバキ科ヒサカキ属

種子の破片が検出された。黒褐色、径1.3mm程度のやや扁平な不規則多角状広倒卵体。基部の臍に向かい薄くなる。種皮表面は臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

<草本>

カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。淡褐色、長さ 1 mm、幅 0.8 mm 程度の偏平な倒卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

タガラシ (Ranunculus sceleratus L.) キンボウゲ科キンボウゲ属

果実の破片が検出された。長さ 0.9 mm、幅 0.5 mm、厚さ 0.3 mm 程度のやや偏平な広楕円体。果皮表面は粗面。中心部は淡黄褐色でやや凹み、縁は黄白色の海綿状で水に浮きやすい。

エノキグサ (Acalypha australis L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば長さ 1.5-1.8 mm、径 1 mm 程度の倒卵体で、基部はやや尖り、Y 字状の稜がある。破片の大きさは、最大 1.3 mm 程度。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

(6) 考察

1) 土坑 275 および礫敷 1 の形成・埋没過程について

4-4 層～6-1 層では、細粒質物質の特徴が共通している。その特徴から、これらは、すべて人為的に擾乱された土壌を母材としていると判断される。各層では、孔隙の形態に明瞭な差異が認められる。4-4 層のチャンネル孔隙は、上位で発達した草本の根痕に由来すると考えられる。4-4 層は 5 層と明瞭な層界なしで接している。4-4 層は塊状をなし葉理が認められないことから、自然層でなく人為的攪乱土であることが確認される。最上部に礫敷 1 が検出された 5 層を完全に覆うことから、4-4 層は客土と判断される。4-4 層上部では、イネ属珪酸体が産出し、イネ属花粉化石が増加する。この分析結果と微細構造から、4-4 層は水田作土に相当し、薄片観察した下部は水田の下層に相当すると考えられる。4-4 層の水田は、礫敷 1 を埋積する客土を伴う整地によって形成されたことが推測される。

5 層の水平方向の面状孔隙は、本層が礫敷 1 検出層準であることをふまえると、整地土の積層によって形成されたと推定される。特に礫敷 1 の直下で孔隙が発達することから、本遺構については、整地土が形成された後に石敷がなされた可能性が示唆される。

孔隙が発達が相対的に低い 6-1 層上部では、直下の 6-1 層下部に不純粘土質ないしシルト質ペドフィチャーの発達が認められる。これらは、耕作土の下層に形成されることがしばしば報告されている。ただし、6-1 層上部では耕作土の特徴を示す微細土壌構造が観察されない。薄片観察を行った層準は、有機質に富み人為的に擾乱された堆積物で構成される。このような堆積物は、耕作土と同様の性状を示し、下位に上記したようなペドフィチャーが観察されると思われる。微細構造をふまえると、6-1 層上部・下部は 6-1 層上部を地表面としてある一定期間、土壌化した時期が存在したものと推定される。6-1 層下部のペドフィチャーは、その時期に A 層をなしていた 6-1 層上部に対応する B 層に相当するものと解釈される。従って、6-1 層は整地後に放置され土壌化した層準と考えられる。今回の調査区は、当該層の時期である平安時代前期の建物が

検出されておらず、上記の状況と整合的と捉えられる。ところで6-1層は、壁状をなし水田層の微細構造に類似するとも解釈される。本層からは栽培植物のイネ属珪酸体が産出するが低密度であるため特定には至らない。また微細構造からは、畑として利用された可能性が小さいと推定される。これらのことをふまえると、6-1層については、土壌化によって土壌構造が均質化し、整地当初の構造の大半が失われたものと想定される。

なお軟X線写真によれば、非常に多くの孔隙が存在するしまりの悪い礫を多く含む堆積層をなす土坑充填物である6-2層と6-1層の間には、堆積の休止期を示すような間層の存在が認められない。このことから、平安時代前期の土坑275充填物と6-1層は、一連の地業によって形成された可能性がうかがえる。この後、当該期に本調査区では、一旦安定した地表が形成され土壌化が進行する。その後、同じ平安時代前期には、さらにそれまでの地表面を整地して礫敷1が形成されるような地業が存在したと考えられる。このように本調査区では、平安時代前期にそれ以前までに生成していた土壌を母材とする整地作業がなされ、さらに礫敷1を伴うような地表面の再構成がなされたものと推定される。その後、調査区では人為および自然双方の地表攪乱が認められず、地表面の埋積や削平がほとんど起こらなかったものと想定される。室町時代には、客土をともない水田の造成がなされたと考えられた。

以上のことから、本調査区では、土地改変の画期として平安時代前期と室町時代の2時期が存在する可能性が示唆された。この画期では、平安時代前期が居住域などの生活領域の形成にともなう削平、整地、室町時代が耕作地造成をともなう客土と、地業の過程が異なっていたことが、詳細な土壌構造観察から読みとることができる。

2) 古植生

平安京における古植生に関する報告は、平安京域では、各地で断片的であるかは植生史に関する情報が蓄積されてきている。平安京右京五条二坊九町・十六町では平安時代～中世の花粉分析(パリノ・サーヴェイ株式会社,1991)、平安京右京三条一坊三・六・七町跡の平安時代の園池埋土の植物化石分析(環境考古学研究会,2002)、平安京右京三条一坊二町跡の12世紀の朱雀大路西側溝埋土の花粉・種実化分析(環境考古学研究会,2004)、史跡二条離宮の9世紀～13世紀まで続く庭園の池埋土の花粉分析(環境考古学研究会,2001)、平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡の11世紀の池埋土の花粉・植物珪酸体分析(古環境研究所,2001)、大覚寺大沢池の12世紀～14世紀の池堆積物の花粉分析(未公表)、平安京右京六条一坊三町跡の12世紀末溝埋土の花粉分析(パリノ・サーヴェイ,2006)がある。これらの分析成果をふまえながら、時代毎に古植生について検討する。

古墳時代前期から中期

古墳時代の溝280埋土では、花粉化石の保存状態が悪い。花粉化石は好気的環境下における風化に弱いことから(中村,1967)、分解した可能性が考えられる。溝280埋土1層では花粉化石が検出されるが、後述する平安時代前期の組成と類似する(特に井戸の組成)。古墳時代も、平安時代と同様な環境であった可能性もあるが、試料採取位置が平安時代前期の堆積物の直下であるこ

とから、後代の花粉化石が落ち込んだとも考えられる。植物珪酸体では、タケ亜科が多い。ただし、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量が多いことが指摘されており（近藤, 1982: 杉山・藤原, 1986）、他の種類よりも残留しやすい。このため、分析結果から単純に解釈すると遺跡周辺でタケ亜科が優勢であったように見えるが、周辺にはそれほど多くなかったとみられる。

平安時代前期

平安時代前期の分析結果をみると、木本花粉ではマツ属、モミ属、ツガ属、スギ属等針葉樹花粉が多く、シダ類胞子も多産する。一方草本花粉は、イネ科などが検出されるものの低率である。シダ類胞子や針葉樹花粉は、他の花粉に比べて風化に強いことから（徳永・山内 1971）、保存状態が悪い場合にはこれらが相対的に増加する可能性はあるが、その影響を差し引いても今回は針葉樹が優勢な組成であることは間違いない。モミやツガからなる森林は、春～秋の気温からみると、カシ類など常緑樹（照葉樹）の生育条件に適するが、冬季の気温がカシ類の生育には不適（カシ類は冬の寒さに弱い）である場所に成立する。さらに、これらは谷頭や谷斜面など土地条件の不安定な場所に生育することが多い。また、花粉化石で多いスギは湿潤な土壌を好む種類である。モミやツガ、スギなどの針葉樹は、北側や東側の山地や山地に続く扇状地面に分布していたと思われる。

マツ属は成長が早く痩地に育つ陽樹であることから、二次林を構成することが多い。このため人為的な森林破壊によって増加することが知られており、これまでの平安京の調査においてもマツ属花粉の増加が確認されている。一方、マツは有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安京の庭園でも植栽されていたことが、文献等の調査により明らかにされている（飛田, 2002）。また、先に挙げた平安京関連の遺跡の花粉分析成果をみると、マツ属の増加は12世紀末以降に増加し、今回のように平安時代前期で多産する結果は確認されていない。これらのことを踏まえると、今回検出されたマツ属も、二次林や植栽に由来すると考えられる。草本花粉は木本花粉に比べて低率で、イネ科やカヤツリグサ科、タンポポ亜科などが検出される。当時の土地利用が宅地であったとされることから、土地開発により開けた場所に生育していたものとみられる。

この時期植物珪酸体量が下位に比べて急増するが、不明を含めほぼ全ての種類が一様に増加しており、各種類の相対的な量比に変化はない。このことから、植生の変化ではなく、堆積物中のシルト粒径の割合が増加したなど堆積機構の変化による増加と考えられる。植物珪酸体組成の中で、周辺植生を反映するものは、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属含む）、イチゴツナギ亜科等がある。タケ亜科も生育していたとは思われるが、前述の理由により実際の周辺植生の中では植物珪酸体量が示すほど多くなかったと考えられる。

種実遺体は検出量は少ないが、林縁部に生育するヒサカキや、カヤツリグサ科、タガラシ、エノキグサなどの人里植物に属する分類群が確認される。これらが周囲に生育していたと考えられるが、個々の生育環境をみると、花粉分析の成果と矛盾しない。

検出された栽培植物の花粉は、イネ属、ベニバナ属、ソバ属であり、周辺での栽培に由来する可能性がある。イネ属は植物珪酸体でも検出されるが、最大でも1000個/gであり、水田耕土とされる堆積物に比べて少ない。当時の土地利用状況を考慮すれば、調査区での栽培の可能性は低いとみられる。

井戸の組成はやや異なるが、大局的には類似することから堆積機構等の違いに由来する可能性がある。イネ科をはじめとする草本花粉の割合がやや高く、コナラ属やアカガシ亜属の割合がやや高い点は、既存の成果に近く、広域的な植生を反映している可能性もある。

これまでの平安時代の花粉分析結果をみると、木本花粉に比べ、草本花粉の割合がやや高く、イネ科をはじめ、カヤツリグサ科、クワ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属などを伴う場合が多い。また、木本花粉はアカガシ亜属やコナラ亜属など広葉樹が主体である（たとえば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1991など）。しかし、向日市中海道遺跡では、奈良時代以降の堆積物においてツガ属が多産する傾向がみられ、扇状地の発達に伴って、ツガが分布を拡大してきたことが示唆されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2003）。また、平安京左京六条三坊五町跡ではヒノキ科類の花粉が多産している（古環境研究所,2005）。さらに、平安京右京六条一坊三町跡の花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ,2006）では、12世紀末の堆積物から、針葉樹を主とした木本花粉組成が得られている。このことから、平安京を取り巻く森林植生は、大局的には常緑樹が主であるが、土地条件等（扇状地に立地？）によっては針葉樹が多産する場所もあると予想される。今後、これまでの成果を空間的、時代的に整理し、地形発達過程を照らし合わせながら議論していく必要があると思われる。

中世以降

4-4層の花粉化石群集を解釈する上で、先述した堆積層の形成過程を踏まえる必要がある。4-4層上部は水田として土地利用されていた可能性があり、4-4層下部は客土を伴う整地によって形成されたものであることから、元々の客土に取り込まれていた花粉化石と水田耕作時に取り込まれた時代の異なる花粉化石が混合されていることになる。木本花粉組成が6-1層・6-2層の群集に類似するものそのことが理由と考えられる。本層で特徴的に変化する種類が当時の植生を反映している可能性が高く、イネ属を含むイネ科が増加していることは水田として土地利用されるようになることと同調的変化といえる。したがって、本層形成期には開けた場所であったことが推定される。

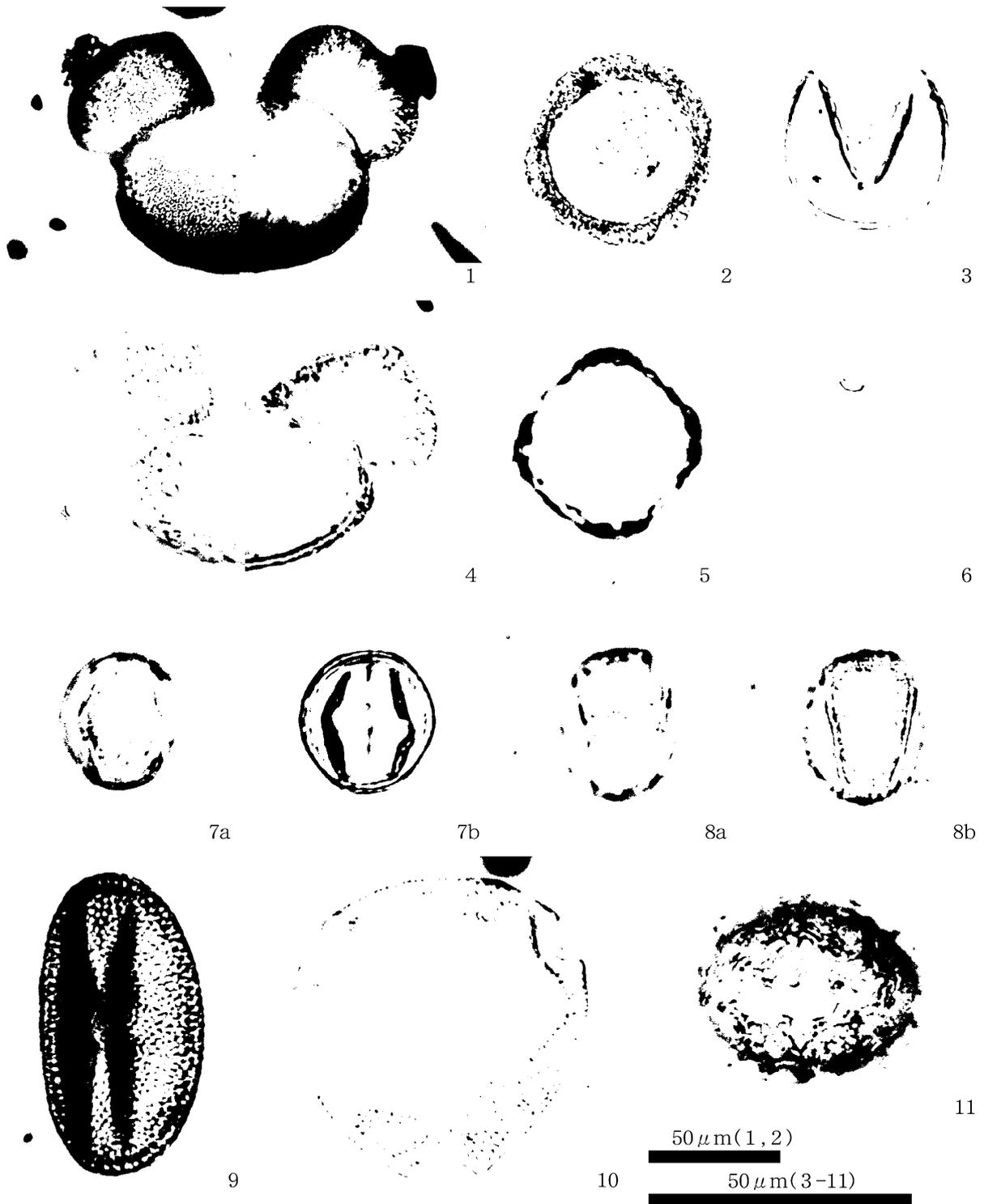
4-1層より上位層準の花粉化石群集は、木本花粉ではマツ属が多産する。先に挙げた平安京に関連した遺跡の花粉分析成果をみると、マツ属の増加は12世紀末以降に顕著になる。このころになると、周辺での植生破壊が顕著になり、マツの二次林が増加したと考えられる。また、イネ科の多産は周辺の耕地化により開けた草地が広がったのが原因と考えられ、土地利用状況（中世以降は耕作地として利用）からみても調和的である。栽培種は、イネ属に加え、カキ属、ソバ属、ベニバナ属などが検出されることから、周辺での栽培が示唆される。特にイネ属は花粉化石で多く検出され、沼沢域を好み水田雑草として普通にみられるサンショウモ、アカウキクサ属、イボ

クサ属、オモダカ属を伴う。一方、植物珪酸体でもイネ属が多産し、耕作地における稲作の指標となる5千個/gを越える試料もみられる。このことから、水田として利用されていたと推測される。

京都大学北部構内遺跡で行われた近世の京都盆地の花粉分析結果によると、木本ではマツ属、草本ではイネ科が多産し、他の種類は貧弱になるとされ(上中,2004)、今回の結果と調和的である。植物珪酸体は1-2b-2層で検出量が極端に少なくなる。不明を含む全ての種類で激減していることから、植物珪酸体が堆積しにくい状況下になったか、堆積後の土壌化の過程で分解された可能性がある。植物珪酸体は、乾湿を繰り返すような場所や、アルカリ性の水域では分解されやすいといわれるが(江口,1994;1996)、今回の場合、堆積環境を踏まえると、双方の可能性が推定される。

引用文献

- 江口 誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして.植生誌研究,2,19-27.
- 江口 誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値.ペトロジスト,40,81-84.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 環境考古学研究会,2001,自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 史跡旧二条離宮(二条城),財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,55-58.
- 環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 平安京跡右京三条一坊三・六・七町,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,33-47.
- 環境考古学研究会,2004,溝64の土壌分析について.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,21-23.
- 古環境研究所,2005,自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 平安京左京六条三坊五町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,152-165.中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 近藤 鍊三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペトロジスト,48,46-64.
- 増田富士夫・伊勢屋ふじ子(1985)"逆グレーディング構造":自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造.堆積学研究会会誌,22・23,p.108-116. Matsuda,J.-I,2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告,平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町,京都文化博物館,108-116.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2003,自然科学分析.向日市埋蔵文化財調査報告書第60集,久々相遺跡・中海道遺跡,財団法人 向日市埋蔵文化財センター,256-273.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2008,6.付章 自然科学分析.39-62.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7 平安京右京六条一坊三町跡,(財)京都市埋蔵文化財研究所



- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 モミ属(1地点;6) | 2 ツガ属(1地点;6) |
| 3 スギ属(1地点;4) | 4 マツ属複維管束亜属(1地点;4) |
| 5 ニレ属—ケヤキ属(1地点;6) | 6 イネ属(1地点;6) |
| 7 アカガシ亜属(1地点;6) | 8 コナラ亜属(1地点;6) |
| 9 ソバ属(1地点;4) | 10 キュウリ属(1地点;4) |
| 11 ベニバナ属(1地点;4) | |

図43 花粉化石



- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 イネ属短細胞珪酸体(2地点; 3) | 2 ネザサ節短細胞珪酸体(1地点; 6) |
| 3 ヨシ属短細胞珪酸体(1地点; 6) | 4 コブナグサ属短細胞珪酸体(1地点; 7) |
| 5 ススキ属短細胞珪酸体(1地点; 7) | 6 イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点; 4) |
| 7 イネ属機動細胞珪酸体(2地点; 3) | 8 ネザサ節機動細胞珪酸体(1地点; 6) |
| 9 ヨシ属機動細胞珪酸体(2地点; 6) | 10 シバ属機動細胞珪酸体(1地点; 6) |
| 11 イネ属穎珪酸体(2地点; 3) | 12 ヒサカキ 種子(1地点; 7) |
| 13 カヤツリグサ科 果実(1地点; 7) | 14 タガラシ 果実(1地点; 7) |
| 15 エノキグサ 種子(1地点; 7) | |

図 44 植物珪酸体・種実遺体

付論 2 平安京右京三条三坊三町の発掘調査から見た最終 氷期以降の紙屋川（天神川）扇状地の地形発達史

河角龍典（立命館大学）・小野映介（新潟大学）

（1）目的と方法

本報告では、トレンチ断面の観察結果と遺物の包含状況・堆積物中の有機物の放射性炭素年代をもとに、調査区域の地形発達史を明らかにした。地層断面の観察においては、堆積物の粒度・色調・構造とともに土壌化の程度に注目した。また、各層準に認められる炭化物・植物遺体については年代測定用の試料として採取した。今回は、そのうちの1点について加速器質量分析計（AMS）による¹⁴C年代測定を実施した¹⁾。

（2）本調査区の地形

図45は、2mメッシュのデジタル地形モデル（DTM）から作成した1m間隔の等高線図である。本調査区は、紙屋川（天神川）流域に発達した扇状地に立地する。扇状地には、昭和初期の付替え以前の天井川化した天神川が認められ、調査区はその左岸の微高地に位置する。

京都盆地北部には、山地部から流入する小河川によって形成された扇状地群が認められるが、その発達過程については十分に解明されていない。本調査区で得られた層相・層序と堆積年代は、とりわけ、紙屋川扇状地の形成時期を明らかにする上での重要な資料となる。

（3）層序・層相および年代

図46は、トレンチ西壁の地層断面である。本調査区の地層断面は、層相と堆積年代を基準にすると2つのユニットに大別できる。平安京の遺構検出面より下位のユニット（＝ユニットI）は最終氷期の扇状地を構成する堆積物である。一方、平安京の遺構検出面より上位のユニット（＝ユニットII）は、室町時代以降の微高地と湿地を構成する堆積物である。

なお、各ユニットと本文中の層位との関係は次のとおりである。ユニットI-1は黒色有機質シルトより下層、ユニットI-2は6層および灰白色シルト、粗砂～礫層、ユニットII-1は4層、ユニットII-2は1～3層。

1) ユニットI（最終氷期～弥生時代後期）

最終氷期に形成された天神川扇状地を構成する堆積物からなるユニットIは、2つのサブユニットに細分できる。

ユニットI-1は、調査区内で確認される最も下位のサブユニットである。最下層は砂礫から構成され、その砂礫層の低地部を覆うように有機質シルトが堆積する。有機質シルトからは24,090yrs BP (Beta- 261439) の¹⁴C年代値が得られた。

ユニットI-2は4層に細分される。最下部はシルト質粘土層からなり、その上層には層厚0.7

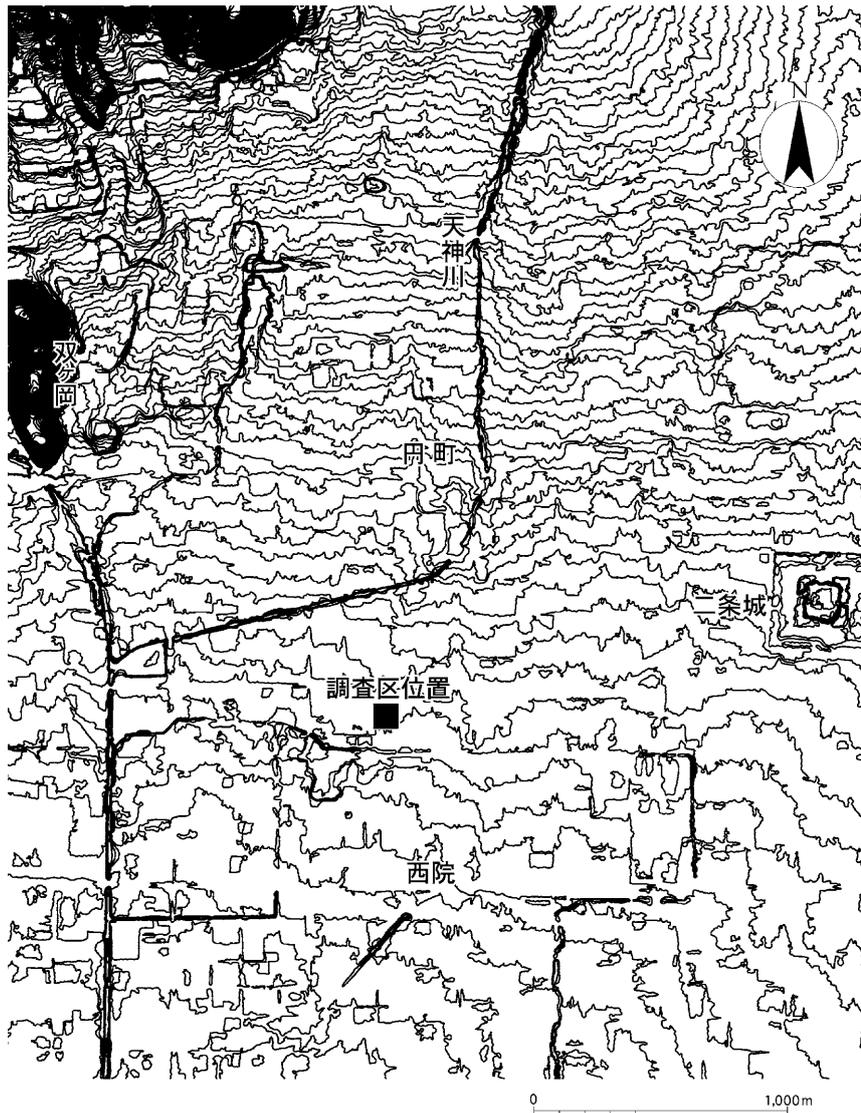


図 45 紙屋川（天神川）流域扇状地周辺

mを測る砂礫層が堆積する。この砂礫層は、ユニット I - 1 の段階に既に存在していた低地部を埋積するものである。同砂礫層の上部には、ローブを形成する堆積物が確認できる部分もある。²⁾ そのローブ間の低地は、シルトで埋積される。シルト層の表面には、部分的に黒色の土壌層が残存している部分が認められ、同層には平安時代の遺物が包含される。

ユニット I - 1 の有機質シルトの 14C 年代が 24,000yrsBP を示し、同層の直上にユニット I - 2 の砂礫層が供給されている状況から、ユニット I - 2 の供給時期はユニット I - 1 の年代に近い値を示すと推測される。また、ユニット I - 2 内の砂礫層とその上位のシルト層との境界にも地形の安定期に形成される土壌が確認されない。調査区の堆積状況をみるかぎり、これらは 24,000yrsBP に近い時代に形成されたものと想定できる。ただし、厳密に言えば、ユニット I の形成期間の下限には 24,000yrsBP から弥生時代後期³⁾ という大きな時間幅が存在する。

2) ユニット II（室町時代～現代）

ユニット II は 2 つのサブユニットに区分できる。下位のユニット I - 1 は、ユニット I によつ

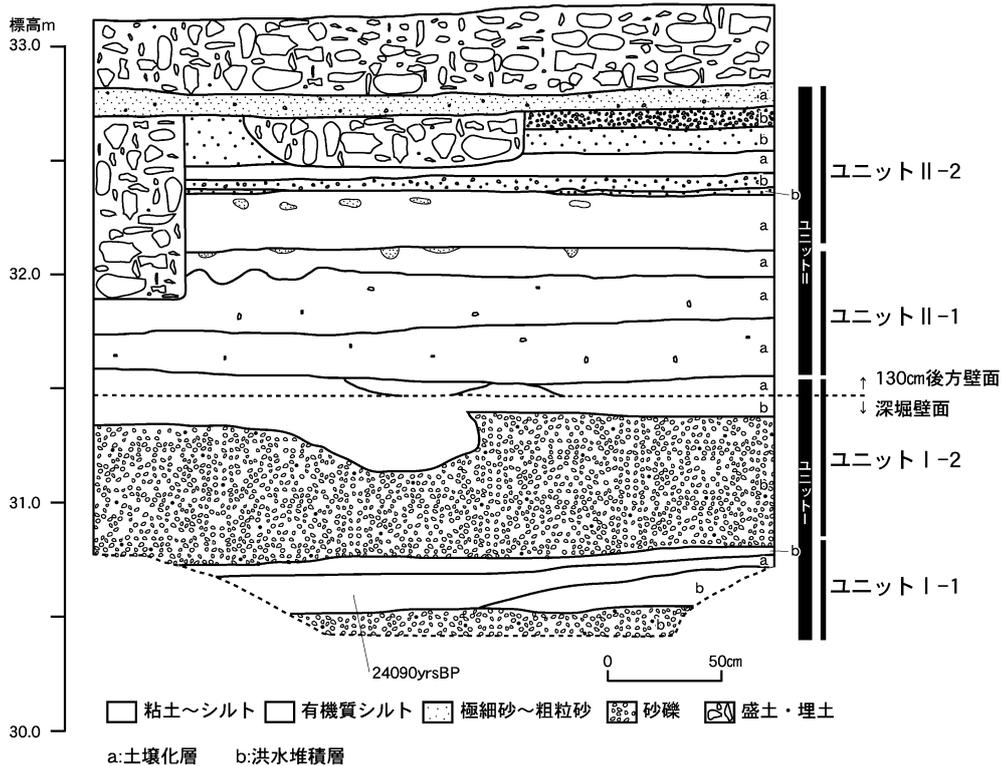


図 46 地質断面図 (西壁)

て形成された微低地を埋積する 14 世紀頃 (室町時代) の堆積物、ユニット II - 2 は紙屋川の左岸に形成された微高地を構成する堆積物である。

ユニット II - 1 は、暗灰色の砂質シルトから構成される。このユニットはさらに 3 層に細分できるが、すべて土壌化している。それらは、ユニット I によって形成されたロープ間の微低地を埋積する湿地に堆積し、その後、耕作等による土壌化の影響を受けたものと考えられる。このユニットからは、14 世紀 (室町時代) の土器が出土している。なお、調査区の北壁 (東西断面) で確認されるユニット II - 1 の層厚は、西側のロープ間の微低地⁴⁾で層厚が厚く、東の微高地 (ロープ上) では層厚は薄い。

ユニット II - 2 は、砂質シルト～細砂からなる。7 層に細分可能で、いずれも土壌化の程度は低いものの耕作土が確認され、それらの一部は洪水堆積物によって覆われている。このユニットは、天神川左岸に発達した微高地を構成する堆積物と推定される。遺物は採取されておらず、堆積物の形成年代は上限が室町時代としか把握されていない。なお、同ユニットは調査区の北壁 (東西断面) において、西側で厚く東側で薄く堆積する。⁵⁾

(4) 最終以降の紙屋川 (天神川) 扇状地の地形発達史

本調査区では、最終氷期から完新世にかけて堆積した天神川扇状地の構成層が確認された。層相・層序、堆積物の年代を踏まえ、更新世末以降の天神川扇状地の地形発達史について検討を加える。

最終氷期の 24,000yrsBP 頃に有機質シルトの堆積する静穏な環境が認められたが、その前後に

砂礫の活発な供給が生じた。有機質シルトの上位の砂礫やシルトの供給時期は、今のところ特定されていないが、各サブユニットには土壌の発達認められないことから、24,000yrsBP に比較的近い時代に堆積したことが示唆される。

ユニット I の最上部を構成する土壌化層の存在は、最終氷期の扇状地構成層の供給後、堆積物の供給が無い静穏な環境が続いたことを示す。その要因としては、最終氷期末における河川の下刻の進行と、それにとまなう当地域の離水（扇状地性低位段丘面の形成）が考えられる。しかし、調査区域では弥生時代後期に、流路（溝）が見られることから、弥生時代後期までには扇状地性低位段丘面は再度、氾濫原へと変化していたと考えられる。

平安時代の遺構は、この扇状地性低位段丘面上に広がる。なお、調査区域は最終氷期に形成された扇状地の微高地（ローブ）に位置しているため、平安時代から鎌倉時代における堆積量は少なく、顕著な地形変化は認められない。

また、室町時代以降には天神川沿いの微高地が形成された。14世紀頃から徐々に溢流堆積物の供給が始まり、その後、微高地の形成が急速に進行した。ユニット II の上部では、洪水に伴い砂層や砂礫層がみられるが、これらの堆積物は天神川の天井川化に伴う洪水の増加を示唆する。

ところで、調査区で確認された堆積物には歴史時代以外の完新世の地形発達史に関する情報が含まれていない。京都盆地北部の扇状地の発達過程を明らかにするためには、空白となっている完新世前半の地形変化に関わる情報を収集していく必要がある。

注釈・引用文献

- 1) 測定は地球科学研究所に依頼した。
- 2) 本文 9 ページ、北壁断面図を参照。
- 3) 調査区で検出された年代の判明している遺構の内、最も古いものは、弥生時代後期の溝 355 である。
- 4) 本文 9 ページ、北壁断面図を参照。
- 5) 本文 9 ページ、北壁断面図を参照。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうさんぼうさんちょうあと							
書名	平安京右京三条三坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-4							
編著者名	山本雅和・田中利津子・竜子正彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年10月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょうさんぼうさんちょうあと 三条三坊三町跡 にしのきょういせき 西ノ京遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうくわばらちょう 西ノ京桑原町 いちばんち 1番地	26100	461	35度 00分 37秒	135度 43分 45秒	2009年4月 6日～2009 年6月23日	1,265m ²	建物建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西ノ京遺跡	散布地	弥生時代 ～古墳時代	溝、落込み	弥生土器、土師器、須 恵器				
平安京右京 三条三坊三町跡	都城跡	平安時代	井戸、溝、小径、 土坑、柱穴列、礫 敷	土師器、白色土器、黒 色土器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、輸入 陶磁器、瓦、土製品、 木製品				
		室町時代	畦、溝、土坑	土師器、白色土器、瓦 器、須恵器、焼締陶器、 灰釉系陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦、土製 品、石製品、金属製品、 木製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-4
平安京右京三条三坊三町跡

発行日 2009年10月30日
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265番地の1
住所 〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>
印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961